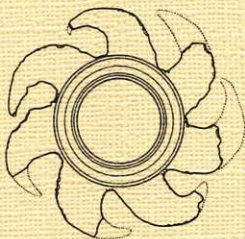


方保田東原遺跡



1987

山鹿市教育委員会

方保田東原遺跡

か と お だ ひがし ばる

山鹿市立博物館調査報告書第7集

1987

山鹿市教育委員会



卷頭図版解説

方保田東原遺跡出土石砲丁形鉄器

序 文

このたび、山鹿市農業協同組合（以下「市農協」。）のご好意により、大道支所増改築に伴う発掘調査報告書を刊行することができました。

ご案内のように、今、我国の農業は外圧による歪みを生じ、ガットへの対応、コメ流通システムの見直しといった難問題に直面しております。このような厳しい情勢の中で、市農協は日頃から文化財保護行政に対し深いご理解を示してこられました。今回の調査において考古学史上、特記すべき快挙に遭遇することができました。それは本邦初の石廬丁形鉄器の出土をみたことであります。ここに改めて、三浦八水組合長はじめ市農協関係職員の皆様に対し心から敬意と感謝を申しあげる次第であります。

さらに、調査対象地域は、国指定史跡方保田東原遺跡の西方約250メートルに位置していることから、事前協議の段階でかなりの成果は期待されていましたが、とりわけ、古代農業の生産用具が20世紀の農業人の中核たる農協用地で出土したことは誠に象徴的です。勿論、調査の成果はこの鉄器だけに見られるものではありません。然しながら今回の調査がなければ、この遺物は永遠に実証の手順を欠いた推理上の、いわば幻の鉄器として地中に眠り続けたでありましょうし、私自身も農業の原点を垣間見る機会を失ったかも知れません。文化の担い手は、ひとり文化財行政担当者にとどまるものではありません。どうか、本報告書を学術上の資料としてだけでなく、広く文化財愛護思想の振興に役立てて頂きますよう、心から祈念して刊行のご挨拶といたします。

昭和62年3月31日

山鹿市教育長 弓 掛 正 久

例 言

1. 本書は山鹿市農業協同組合が計画した大道支所改築工事に伴う事前調査として、山鹿市教育委員会が昭和59年に実施した方保田東原遺跡の第Ⅶ次調査の報告書である。
2. 調査は山鹿市教育委員会が主体となり、山鹿市立博物館において実施した。
3. 本書の執筆は1章・2章・4章を中村幸史郎、3章・5章を中村と坂本重義があたり、各分担は文末に銘記した。また、専門調査員の先生の玉稿を6章として上梓した。
4. 本遺跡の遺構・遺物の実測図作成および製図は挿図目次に示すとおりである。
5. 本書に掲載した写真は、遺構を中村と坂本があたり、遺物は中村と中村徹也が撮影した。また現像・引伸しは中村徹也と富田清子が行った。
6. 本書の編集は中村が行った。
7. 鉄器の保存処理に関しては佐賀県立博物館の手を煩わせた。
8. 表紙タイトルは山鹿市長、中原淳の揮毫である。

本文目次

序 文

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査の組織	4

第2章 遺跡の環境

4

第3章 遺構と遺物

1 1号住居跡	15
2 2号住居跡	15
3 3号住居跡	18
4 4号住居跡	23
5 5号住居跡	24
6 6号住居跡	28
7 7号住居跡	31
8 8号住居跡	33
9 9号住居跡	39
10 10号住居跡	42
11 11号住居跡	42
12 12号住居跡	49
13 13号住居跡	52
14 15号住居跡	55
15 16号住居跡	57
16 17号住居跡	57
17 18号住居跡	58
18 19号住居跡	59
19 溝状遺構	61
20 溝状遺構上面土師器（祭祀遺構）	78
21 溝状遺構東端部遺構	80
22 1号竪穴	80
23 2号竪穴	81

24	1号土墳	81
25	2号土墳	83
26	その他の遺物	83
27	遺構に伴わない遺物	88

第4章 考 察

第1節	溝状遺構出土の甕について	100
第2節	石庖丁形鉄器について	104

第5章 周辺遺跡の調査

第1節	古閑白石遺跡	107
第2節	方保田石原遺跡	131
第3節	藤井前田遺跡	135

第6章 付 論

第1節	方保田東原遺跡出土鉄器〈穂摘具〉の金属学的調査	154
まとめ		163

図 版 目 次

第 VII 次 調 査

巻頭図版	石庖丁形鉄器
図版 1	遺跡より馬見塚古墳群および不動岩を望む
2	1 調査区域全景（南より）
	2 調査区域全景（北より）
3	1 1号住居跡
	2 完掘状態
4	1 2号住居跡
	2 遺物出土状況
	3 完掘状態
5	1 2号住居跡遺物出土状況
	2 壺出土状況
	3 甕出土状況
6	1 3号住居跡
	2 遺物出土状況（西より）

- 3 遺物出土状況（北より）
- 7 1 4号住居跡
 - 2 遺物出土状況（北より）
 - 3 遺物出土状況（西より）
- 8 1 5号住居跡
 - 2 遺物出土状況
 - 3 完掘状態
- 9 1 6号住居跡
 - 2 鎌出土状況
 - 3 勾玉出土状況
- 10 1 7～10号住居跡
 - 2 完掘状態
 - 3 完掘状態（南より）
- 11 1 10号住居跡
 - 2 土製品出土状況
 - 3 土製品出土状況
- 12 1 紡錘車出土状況
 - 2 勾玉出土状況
 - 3 16号住居跡
- 13 1 溝状遺構全景
- 14 1 埋土断面
 - 2 完掘状態
- 15 1 床面状況
 - 2 埋土中遺物出土状況
 - 3 遺物出土状況
- 16 1 遺物出土状況（南より）
 - 2 遺物出土状況（西より）
 - 3 遺物出土状況
- 17 1 甕出土状況
 - 2 勾玉出土状況
 - 3 ミニチュア土器出土状況
- 18 1 溝上土師器
 - 2 遺物出土状況
- 19 1 溝東端部遺構（北より）
 - 2 溝との切合い状況
 - 3 遺物出土状況

- 20 1 1号竖穴
 - 2 完掘状態
 - 3 2号竖穴
- 21 1 土器捨て場
 - 2 発掘風景（北より）
 - 3 発掘風景（南より）
- 22 2号・3号住居跡出土遺物
- 23 3号・4号住居跡出土遺物
- 24 5号・6号住居跡出土遺物
- 25 1 6号住居跡出土鉢
 - 2 繊維付着状況
 - 3 付着した繊維
- 26 7号・8号住居跡出土遺物
- 27 9号・11号住居跡出土遺物
- 28 11号・12号住居跡出土遺物
- 29 12号住居跡出土石庖丁形鉄器（実大）
- 30 13号住居跡出土遺物
- 31 15号・18号・19号住居跡出土遺物
- 32 溝状遺構出土遺物（1～3期）
- 33 溝状遺構出土遺物（3期）
- 34 溝状遺構出土遺物（3・4期）
- 35 溝状遺構出土鉄器
- 36 溝上土師器・溝東端部出土遺物
- 37 その他の遺物・遺構に伴わない遺物
- 38 遺構に伴わない遺物
- 39 遺構に伴わない遺物
- 古閑白石遺跡
- 40 白石遺跡出土遺物（甕）
- 41 白石遺跡出土遺物（甕）
- 42 白石遺跡出土遺物（甕・鉢）
- 43 白石遺跡出土遺物（壺）
- 44 白石遺跡出土遺物（壺・高坏）
- 45 白石遺跡出土遺物（高坏・鉢・器台）
- 石原遺跡
- 46 白石遺跡・石原遺跡・藤井前田遺跡出土遺物
- 藤井前田遺跡

47	藤井前田遺跡出土遺物 (壺)
48	藤井前田遺跡出土遺物 (壺)
49	藤井前田遺跡出土遺物 (壺)
50	藤井前田遺跡出土遺物 (壺・甕)
51	藤井前田遺跡出土遺物 (甕・高坏)
52	藤井前田遺跡出土遺物 (鉢)
53	藤井前田遺跡出土遺物 (鉢)
54	藤井前田遺跡出土遺物 (鉢)
55	藤井前田遺跡・古閑の上遺跡出土遺物

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (中村幸史郎作成)	5
第2図	遺跡位置図 (中村作成)	7~8
第3図	遺構配置図 (中村、倉原謙治実測、大森よう子製図)	11~12
第4図	1号住居跡実測図 (中村実測、緒方久美子製図)	13~14
第5図	1号住居跡出土遺物実測図 (緒方実測、緒方製図)	15
第6図	2号住居跡実測図 (中村実測、緒方製図)	16
第7図	2号住居跡出土遺物実測図 (中村、緒方実測、緒方製図)	17
第8図	2号住居跡出土遺物実測図 (中村実測、緒方製図)	18
第9図	3号住居跡実測図 (倉原実測、垣田美穂子製図)	19
第10図	3号住居跡出土遺物実測図 (中村、坂本重義実測、緒方製図)	20
第11図	3号住居跡出土遺物実測図 (中村実測、大森製図)	21
第12図	3号住居跡出土遺物実測図 (中村、坂本実測、大森製図)	21
第13図	4号住居跡実測図 (倉原実測、垣田製図)	22
第14図	4号住居跡出土遺物実測図 (中村実測、垣田製図)	23
第15図	4号住居跡出土遺物実測図 (中村実測、緒方製図)	23
第16図	4号住居跡出土鉄器実測図 (坂本実測、製図)	24
第17図	5号住居跡実測図 (坂本実測、垣田製図)	25~26
第18図	5号住居跡出土遺物実測図 (中村実測、緒方製図)	27
第19図	5号住居跡出土遺物実測図 (中村、坂本実測、坂本、緒方製図)	28
第20図	6号住居跡実測図 (倉原、坂本実測、垣田製図)	29
第21図	6号住居跡出土遺物実測図 (中村、坂本実測、坂本製図)	30
第22図	6号住居跡出土鉄器実測図 (坂本実測、製図)	31
第23図	6号住居跡出土石器実測図 (中村実測、緒方製図)	31

第24図	7号住居跡実測図（中村実測、垣田製図）	32
第25図	7号住居跡出土遺物実測図（中村、緒方実測、緒方製図）	33
第26図	8号住居跡実測図（坂本実測、垣田製図）	35~36
第27図	8号住居跡出土遺物実測図（坂本、緒方実測、垣田製図）	37
第28図	8号住居跡出土遺物実測図（中村、坂本、緒方実測、緒方製図）	38
第29図	9号住居跡実測図（坂本実測、垣田製図）	40
第30図	9号住居跡出土遺物実測図（中村、緒方実測、緒方製図）	41
第31図	9号住居跡出土遺物実測図（中村実測、緒方製図）	41
第32図	10号住居跡実測図（坂本実測、大森製図）	42
第33図	11号住居跡実測図（中村、坂本実測、垣田製図）	43~44
第34図	11号住居跡出土遺物実測図（大森、垣田実測、製図）	45
第35図	11号住居跡出土遺物実測図（中村、緒方実測、緒方製図）	46
第36図	11号住居跡出土遺物実測図（中村、緒方実測、緒方製図）	47
第37図	11号住居跡出土遺物実測図（坂本、緒方実測、坂本製図）	48
第38図	12号住居跡実測図（中村、坂本、木村元浩実測、垣田製図）	49
第39図	12号住居跡出土遺物実測図（中村、緒方実測、垣田製図）	50
第40図	12号住居跡出土遺物実測図（中村、垣田実測、垣田製図）	51
第41図	12号住居跡出土鉄器実測図（中村実測、緒方製図）	51
第42図	13号住居跡実測図（坂本実測、垣田製図）	53
第43図	13号住居跡出土遺物実測図（中村、坂本、大森、緒方実測、製図）	54
第44図	15号住居跡実測図（坂本実測、大森製図）	56
第45図	15号住居跡出土遺物実測図（中村、坂本実測、坂本製図）	56
第46図	16号住居跡実測図（坂本実測、緒方製図）	57
第47図	17号住居跡実測図（中村実測、垣田製図）	57
第48図	18号住居跡実測図（坂本実測、垣田製図）	58
第49図	18号住居跡出土遺物実測図（緒方実測、緒方製図）	58
第50図	18号住居跡出土鉄器実測図（坂本実測、製図）	58
第51図	19号住居跡実測図（坂本実測、大森製図）	59
第52図	19号住居跡出土遺物実測図（中村実測、緒方製図）	60
第53図	19号住居跡出土製品実測図（中村実測、垣田製図）	61
第54図	溝状遺構断面実測図（中村実測、大森製図）	62
第55図	溝状遺構実測図（中村実測、大森製図）	63~64
第56図	溝状遺構出土遺物実測図（坂本実測、垣田製図）	66
第57図	溝状遺構出土遺物実測図（坂本、緒方実測、製図）	67
第58図	溝状遺構出土石器実測図（中村実測、緒方製図）	68
第59図	溝状遺構出土遺物実測図（坂本実測、製図）	68

第60図	溝状遺構出土遺物実測図（坂本実測、垣田製図）	69
第61図	溝状遺構出土遺物実測図（坂本実測、垣田製図）	70
第62図	溝状遺構出土遺物実測図（坂本実測、製図）	71
第63図	溝状遺構出土遺物実測図（坂本、緒方実測、製図）	72
第64図	溝状遺構出土遺物実測図（坂本、緒方実測、製図）	74
第65図	溝状遺構出土遺物実測図（中村、坂本、緒方実測、緒方製図）	76
第66図	溝状遺構出土石器実測図（中村実測、緒方製図）	76
第67図	溝状遺構出土鉄器実測図（坂本実測、製図）	77
第68図	溝状遺構上面土師器実測図（中村実測、緒方製図）	78
第69図	溝状遺構上面土師器実測図（中村実測、緒方製図）	78
第70図	溝状遺構上面出土遺物実測図（坂本、緒方実測、製図）	79
第71図	溝状遺構東端部遺構実測図（中村実測、垣田製図）	80
第72図	溝状遺構東端部出土遺物実測図（中村実測、緒方製図）	80
第73図	1号竪穴実測図（中村実測、大森製図）	81
第74図	2号竪穴実測図（中村実測、垣田製図）	82
第75図	1号土壇実測図（中村実測、垣田製図）	82
第76図	2号土壇実測図（坂本実測、緒方製図）	83
第77図	その他の遺物実測図（緒方実測、垣田、緒方製図）	84
第78図	土器捨て場実測図（中村実測、垣田製図）	85
第79図	その他の遺物実測図（緒方実測、緒方製図）	86
第80図	その他の遺物実測図（緒方実測、緒方製図）	87
第81図	ミニチュア土器実測図（中村実測、垣田製図）	88
第82図	遺構に伴わない遺物実測図（緒方実測、製図）	88
第83図	遺構に伴わない遺物実測図（緒方実測、製図）	90
第84図	遺構に伴わない遺物実測図（緒方実測、製図）	91
第85図	遺構に伴わない遺物実測図（緒方実測、製図）	92
第86図	遺構に伴わない遺物実測図（緒方実測、製図）	93
第87図	遺構に伴わない遺物実測図（緒方実測、製図）	94
第88図	遺構に伴わない遺物実測図（緒方実測、製図）	95
第89図	遺構に伴わない石器実測図（中村実測、製図）	96
第90図	遺構に伴わない石器実測図（木村元浩実測、製図）	96
第91図	遺構に伴わない祭祀遺物実測図（中村、緒方実測、緒方製図）	97
第92図	遺構に伴わない祭祀遺物実測図（中村、緒方実測、緒方製図）	98
第93図	遺構に伴わない鉄器実測図（坂本実測、製図）	99
第94図	在地系壺の編年（中村作成）	100
古閑白石遺跡		

第95図	周辺遺跡分布図（中村作成）	108
第96図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	109
第97図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	110
第98図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	112
第99図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	113
第100図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	114
第101図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	115
第102図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	116
第103図	白石遺跡出土遺物実測図（緒方実測、製図）	117
第104図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	117
第105図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	118
第106図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	119
第107図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	120
第108図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	121
第109図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	122
第110図	白石遺跡出土遺物実測図（緒方実測、製図）	123
第111図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	124
第112図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	124
第113図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	125
第114図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	126
第115図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	127
第116図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	128
第117図	白石遺跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	129
石原遺跡		
第118図	周辺遺跡分布図（中村作成）	132
第119図	方保田石原遺跡出土遺物実測図（中村実測、緒方製図）	133
藤井前田遺跡		
第120図	周辺遺跡分布図（中村作成、垣田製図）	136
第121図	藤井前田遺跡出土遺物実測図（中村実測、垣田製図）	138
第122図	藤井前田遺跡出土遺物実測図（中村実測、垣田製図）	139
第123図	藤井前田遺跡出土遺物実測図（中村実測、垣田製図）	142
第124図	藤井前田遺跡出土遺物実測図（中村実測、垣田製図）	144
第125図	藤井前田遺跡出土遺物実測図（中村実測、垣田製図）	147
第126図	藤井前田遺跡出土遺物実測図（中村実測、垣田製図）	148
第127図	藤井前田遺跡出土遺物実測図（中村実測、垣田製図）	150
第128図	古閑の上遺跡出土遺物実測図（中村実測、垣田製図）	151

目 次

表 1	周辺遺跡一覧	6
表 2	第VII次調査遺構重複一覧	101
表 3	第VII次調査遺構編年表	101
表 4	方保田東原遺跡における鉄器及び石器出土一覧	105
表 5	石庖丁形鉄器黒錆表面のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果	158
表 6	手鎌黒錆表面のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果	159
表 7	鉄器黒錆片の CMA 定量分析結果	160

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

山鹿市農業協同組合（以下山鹿市農協と言う）では市内7か所に支所を有しているが、これらの支所は年次計画で改築工事が進められており、最後に残ったのが大道支所の改築であった。大道支所は旧大道村役場跡を利用しており山鹿市大字方保田字東原に所在している。

昭和56年3月から山鹿市教育委員会では国、県の補助を得て方保田東原遺跡の重要確認調査を実施し、さらに7月からは大道小学校改築工事に伴う発掘調査も引き続いて実施していた。このような時、我々は大道支所改築の話を初めて聞いたのであった。とくに3月末から実施していた重要遺跡確認調査では、大道支所の東側に隣接する山鹿工業株式会社を中心に広がる、方保田東原遺跡の範囲確認をいそいでいた。そのため、早速試掘調査も兼ねた大道支所改築予定地の調査を口頭で申し入れたのである。大道支所では予定地の購入、登記が未定であったにもかかわらず、地権者との交渉を含めて快く了承していただいた。その結果支所東隣の畑地中央部に長さ4m、幅2mのトレンチを設定したのである。調査の結果東西方向に伸びた溝状遺構を検出し、方保田東原遺跡の広がりを確認することができた。

この成果を踏まえて山鹿市教育委員会は山鹿市農協に対して昭和57年8月27日付の文書で改築予定地における埋蔵文化財調査についての必要性を訴えたのである。

山鹿市農協では大道支所改築を昭和59年度実施の方針で準備を進められていたため、昭和58年1月8日、山鹿市農協より寺崎新一参事、岡英男総務部長、脇山登喜男総務部次長の3氏が発掘調査に関する打ち合わせのため博物館に来館されたのであった。

博物館からは原口長之館長、轟木正斗副館長と中村が同席して話し合いを進めた。農協では昭和59年度事業として改築を考えており、できれば昭和58年度で埋蔵文化財の調査を終了しておきたいとのことであった。博物館からは、大道支所及び予定地が存在する方保田地区における方保田東原遺跡の重要性について説明し、具体的な発掘手順に至る段階まで話を進めたのであった。

昭和58年12月13日、再び寺崎参事他2氏が来館され、大道支所改築が昭和60年度事業となったことを伝えられた。話によると昭和60年の5月もしくは6月に着工し、12月完成の予定であり、できれば昭和59年度中に発掘調査をお願いしたいとのことであった。さらに調査については資材庫と事務所を対象として、できるだけ建築予定部分のみの発掘に留めて実施して欲しいとの意向であった。

12月21日、岡部長と脇山次長が具体的な点の話し合いに来館された。とくにこの席では費用負担の点に話が集中し、原因者負担で国庫補助は無いということを理解していただいた。なお調査経費の明細については後日連絡をするということで合意に達した。

昭和59年5月29日、農協より竹下恒昭総務部長、中島正春管理課長補佐待遇が来館。調査は梅雨明けより約2か月間とし、遺物整理に関しては昭和60年度に実施することとし、経費については全額農協が負担をする。また調査範囲については敷地（3,188㎡）のうち建設予定地内（390㎡）を実

施し、現在の建物部分については除外することとなった。

昭和59年6月5日、中村が農協に出向き、副組合長と最終的な詰めを行い、合意に達した。

このようにして大道支所改築に伴う発掘調査を実施するはこびとなり、方保田東原遺跡第Ⅶ次調査とした。

調査は山鹿市立博物館が山鹿市農協の委託を受けて昭和59年7月から9月まで実施した。調査にあたって山鹿市農協はもとより大道支所の皆様に多大なる協力を賜った。ここに記して感謝の意を表すものである。

第2節 調査の経過

方保田東原遺跡の重要性については過去の調査結果から明らかとなっているが、その範囲については未だに把握できていないといえる。というのも、方保田東原遺跡の立地する台地全域、さらにはその周辺の台地上に至るまで弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡が密集しており、これらの遺跡の境界を見い出せないような状態である。このような意味において今回調査対象となった地点は、方保田東原遺跡と大道小学校校庭遺跡の中間に位置しているところから、両遺跡の関係を知る上で貴重な資料を得ることができた。調査面積は390㎡のうち現在の建物部分を除く299㎡を発掘したもので、その結果、遺構として住居跡17軒と溝状遺構1本を検出したほか、遺物としては国内で初めて出土した石甕丁形鉄器（鉄甕丁）をはじめ膨大な量の土器、祭祀遺物としてのミニチュア土器等多数出土した。とくに石甕丁形鉄器は稲の収穫具の変遷を考える上において貴重な資料となったことは言うまでもなく、この調査終了後昭和60年2月19日付で方保田東原遺跡が国指定史跡となったことにも重要な役割を果たしたと言えよう。

調査日誌抄

- 7月18日(木) 発掘予定地の表土剥ぎ。経費節減のため調査員2名がブルとユンボを運転する。
- 7月21日(出) 午前中で表土剥ぎ終了する。いよいよ23日から調査開始である。作業員の手配を行う。
- 7月23日(月) 本日より調査開始。朝から小雨が降っていたにもかかわらず作業員の皆さんに集合していただいた。多少足元が悪かったが表土剥ぎ後の遺構検出作業を行った。調査区南端より壺の完形品が顔をのぞかせていた。
- 7月24日(火) 作業員を2班に分け、それぞれ両側から遺構検出を行い、南側で住居跡が確認され、内部に壺と甕の完形品が検出された。
- 7月25日(水) 南北2班でそれぞれ作業を進める。石甕丁未製品が1点出土した。
- 7月26日(木) 住居跡に番号付けを実施する。今のところ4号住居跡まで付けている。
- 7月27日(金) 2号住居跡は中心に炉を有する隅丸方形のプランで、4m×3.2mの大きさである。炉は摺鉢状を呈している。調査区中央部から指圧痕を残した粘土塊が出土した。
- 7月30日(月) 調査区北側で大形の住居跡が見られる。その南側では遺物が密集して出土し、土色も黒くなっているところから住居跡の可能性が大きい。

調査区中央でようやく溝状遺構が顔をのぞかせ始めた。

- 7月31日(火) 1号～4号住居跡の実測および遺物取り上げを行う。5号住居跡は1辺5.7mを測ることを確認。床面は堅く、壁面の残存状態も良い。しかし一部は調査区外のため全体の姿はつかめない。
- 8月1日(水) 5号住居跡写真撮影。その後、西と北壁面を出すため調査区を拡張する。1～4号住居跡は柱穴確認のため床面の掘り下げを行う。2号住居跡から土竈基1基が検出された。
- 8月3日(金) 調査区中央部分を掘り下げる。住居跡が重複しているようだが今のところ前後関係やプラン等は不明。溝状遺構の上にも住居跡が見られ、溝埋没が人工的な可能性も考えられるが、今後の調査で明らかにしてゆきたい。
- 8月4日(土) 昨日の重複した住居跡は3軒分と判明、7～9号住居跡とした。このうち8号住居跡は溝が埋没した後建てられたことが判明。さらに9号住居跡もカットしていることが明らかになった。8号住居跡の時期は布留並行期であった。
- 8月7日(火) 今までに住居跡11軒分を検出しており、それ以外の部分で遺構の検出作業を行う。調査区北側から石庵丁形鉄器（鉄庵丁）が出土する。全国で唯一の資料である。
- 8月9日(木) 昨日から遺物出土状況の実測を行っており、終了後遺物取り上げを行う。
- 8月14日～17日 灯籠のため現場作業を休む。
- 8月20日(月) 調査区中央部の溝状遺構の掘り下げを開始する。
- 8月24日(金) 大道支所改築委員会に調査経過の説明を行う。
- 8月27日(月) 溝状遺構からは多量の遺物が出ており、層位的にとらえられそうである。溝自体はほぼ東西に一直線で伸びていることが判明。
- 8月29日(水) 県文化課より、森課長と隈主幹の視察を受ける。溝状遺構の検出作業と調査区北側において遺構検出作業を進める。
- 8月25日～26日 南阿蘇国民休暇村において開催された第16回埋蔵文化財研究会にて（テーマ弥生時代から古墳時代初期における鉄製品をめぐって）石庵丁形鉄器出土の報告を行い注目を浴びる。
- 8月31日(金) 5号住居跡東側において遺物が散在しており住居跡の可能性が高い。山鹿市農協本所より現地見学に訪れる。
- 9月4日(火) 方保田東原遺跡を国指定史跡とするため、地権者への説明会を馬見塚公民館で開いた。調査は明日で一応の発掘作業は終了そうである。
- 9月5日(水) 作業員の方々は今日で発掘作業を終りとし、今後は実測、測量を主体とした作業に移ることとなった。
- 9月12日(水) 溝状遺構と遺物の出土状態の実測をようやく終了した。その後遺物取り上げを層位別に行った。
- 9月13日～22日 住居跡出土遺物を実測した後、床面を掘り下げ柱穴の検出を行う。
- 9月25日(火) 発掘調査完了、本日器材の撤収を行う。
- 9月26日～28日 調査員がブルとユンボを使い現場の埋め戻し作業を実施。

第3節 調査の組織

調査主体 山鹿市農業共同組合

三浦 八水（組合長理事）

藤原 昇（副組合長理事）

岡 英男（参事）

竹下 恒昭（総務部長・昭和59年度）

北原 幸雄（〃・昭和60年度）

中島 正春（管理課課長補佐待遇）

森 健一（〃 管理係長）

福山 英彰（大道支所長）

調査団

団 長 原口 長之（山鹿市立博物館館長）

調査事務 轟木 正斗（〃 副館長）

次木万里子（〃 事務吏員）

専門調査員 大澤 正己（新日鉄中央研究本部八幡技術研究部）

調 査 員 中村幸史郎（山鹿市立博物館学芸員）

倉原 謙治（〃 〃）

補 助 員 坂本 重義（〃 臨時）

木村 元浩（別府大学生）

作 業 員 前川 誠一 吉里 勝正 緒方 泰男 野田 辰起 仲島 実明 松本 定

池田 一子 高森ミサヲ 緒方ひろ子 村上いつえ 村上いつ子 吉井あやめ

坂本 安子 森崎 節子 家入かずよ 吉丸キヌコ 山部タケコ 石橋 朝子

大森よう子

遺物整理 坂本 重義 中村 徹也 大森よう子 緒方久美子 垣田美穂子

第2章 遺跡の環境

山鹿市は熊本県北部に位置した面積87.44km²、人口約34,000人の静かな田園都市で、古くから温泉地として賑わっている。

市内を西に流れる菊池川は、源を阿蘇外輪山西側の菊池溪谷に有し、その長さは61.2km、流域面積996km²は県下では最大級の河川である。



- | | | | |
|----------|------------|--------|-------------|
| ①方保田東原遺跡 | ②大道小学校校庭遺跡 | ③方保田遺跡 | ④白石遺跡 |
| ⑤古閑ノ上遺跡 | ⑥石原遺跡 | ⑦馬見塚遺跡 | ⑧旧大道中学校校庭遺跡 |
| ⑨塚の本道跡 | ⑩馬見塚古墳群 | ⑪神社裏古墳 | ⑫経塚古墳 |
| ⑬方保田古墳 | ⑭端山塚古墳 | ⑮亀塚古墳 | |

第 1 図 周辺遺跡分布図

番号	遺 跡 名	所 在 地	種 類
1	方保田東原遺跡	山鹿市大字方保田字東原	集落跡
2	大道小学校校庭遺跡	山鹿市大字方保田字本村	集落跡、中世城
3	方保田遺跡	山鹿市大字方保田字六田	箱式合棺・散布地
4	白石遺跡	山鹿市大字古閑字白石	散布地
5	古閑ノ上遺跡	山鹿市大字古閑字古閑上	散布地
6	石原遺跡	山鹿市大字方保田字石原	散布地
7	馬見塚遺跡	山鹿市大字方保田字馬見塚	散布地
8	旧大道中学校校庭遺跡	鹿本郡鹿本町大字来民字今古閑	集落跡
9	塚の本遺跡	山鹿市大字方保田字塚の本	甕棺・住居跡
10	馬見塚古墳群	山鹿市大字方保田字辻	円墳 7 基
11	神社裏古墳	山鹿市大字方保田字宮田	前方後円墳
12	経塚古墳	山鹿市大字方保田字本村	前方後円墳
13	方保田古墳	山鹿市大字方保田字本村	円墳
14	端山塚古墳	山鹿市大字方保田字塚の本	円墳
15	亀塚古墳	山鹿市大字方保田字塚の本	前方後円墳

表－1 周辺遺跡一覧

この川の流れは変化に富んだもので、上流域は阿蘇外輪山西麓を刻むように流れ、中流域では広大な氾濫原を蛇行しつつ流れている。さらに、下流域では山鹿市西端部から菊水町にかけて広がる山々の間を縫うように流れ、河口付近では広大なデルタ地帯を形成している。

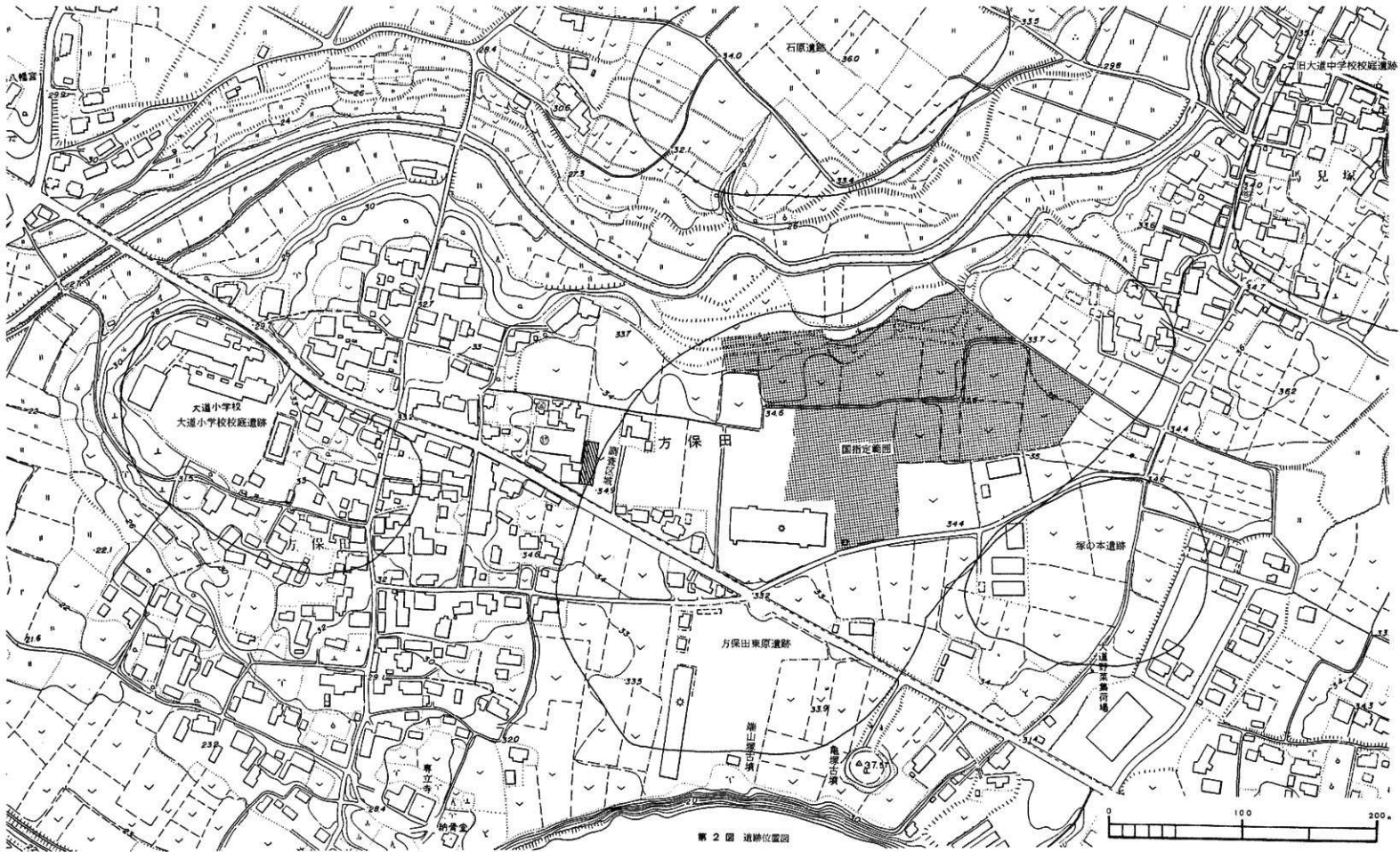
とくに山鹿市が位置する中流域では、支流の多くが集中して流れ込み、水面も僅かに標高21mを測る程度である。さらに、下流域では、山間部を流れるため、毎年のように水害が生じ、広大で肥沃な氾濫原が形成されたといえる。

この広大な氾濫原は東西15km、南北2～3kmの広がりをもって、今日まで県下最大級の穀倉地帯となっている。

方保田東原遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落を主体とする遺跡で、山鹿市大字方保田字東原に存在している。ここは山鹿市街地から東へ約3.5kmの標高35～40mの河岸段丘上に立地しており、南側に菊池川、北側にはその支流の方保田川の流れによって挟まれているため、他の段丘から分離した舌状台地となっている。とくに南側では菊池川が台地を挟るように流れ断崖となっているため、広大な氾濫原を一望のもとに見渡すことができる。台地の北側と西側の裾部には数ヶ所の湧水地が存在しており、古くから地区の重要な生活用水として利用されていた。

方保田地区にはこの他にも弥生時代から古墳時代にかけての遺跡や古墳が数多く存在しており、広がりにおいても、密集度においても県下に類を見ない程である。詳細についてはかつて述べており^{註1}ここでは概略的に個々の遺跡のみについて見てみることにする。

方保田東原遺跡と同じ台地上には東側から旧大道中学校校庭遺跡、塚の本遺跡、大道小学校校庭



遺跡を見ることができる。古墳も台地南端に氾濫原を見守るように東から日置、清水山、亀塚、端山塚、方保田、経塚の古墳群が並んでいた。

旧大道中学校校庭遺跡（鹿本町大字来民字今古閑）

昭和46年3月をもって廃校となり、併せて市町境界変更が行われたため、山鹿市大字方保田字馬見塚の字名であったのが、現在の地名に変更されたものである。以後鹿本町と山鹿市の共有財産で、社会体育施設としての利用が行われている。昭和51年5月、グラウンド整地に際して一部遺構確認調査を実施した結果、弥生時代終末期の住居跡と多数の土器が出土した。

遺跡の広がりとしては現在まで旧学校敷地内を考えていたが、さらに広がる可能性は高い。というのも、遺跡の南西には馬見塚の集落が広がり、さらにその南西方向に方保田東原遺跡が存在している。

方保田東原遺跡自体、馬見塚の集落まで広がるものと考えられるし、恐らく集落の下にも遺構が存在するものと推察される。となればこの遺跡との境界を考えた場合、遺跡間の空白地帯を見出すことの方が困難な作業であろう。

塚の本遺跡（山鹿市大字方保田字塚の本）

方保田東原遺跡の東隣の遺跡で、昭和41年立山広吉氏と徳丸達也氏の指導のもとに県立鹿本農業高校と鹿本高校郷土クラブの合同調査が実施された。その結果弥生時代後期の合せ口甕棺^{註2}2基と箱式石棺1基が検出されている。

この場合も方保田東原遺跡と接するように立地しており、当時の調査においては範囲の確認まで至っていなかったことなどから方保田東原遺跡と重複する形で存在しているものと考えられるべきであろう。

なお、昭和59年5月、この地の南側の県道沿いにおいて倉庫建設が行われたが、それに伴う緊急調査を実施した結果、住居跡や溝状遺構が検出された。なおこの調査を方保田東原遺跡第VI次調査としている。このことから、方保田東原遺跡と塚の本遺跡が今日まで認識されている範囲よりかなり大きくなるものと考えることができよう。

大道小学校校庭遺跡（山鹿市大字方保田字本村）

山鹿市立大道小学校敷地を中心として広がる遺跡である。舌状を呈した台地の先端に存在するこの遺跡は方保田東原遺跡の西側に位置している。これらの遺跡の間には方保田の集落が存在しており、あたかも旧大道中学校校庭遺跡で見られたような関係にある。昭和44年体育館建設に伴って弥生時代後期の甕棺および祭祀遺物として丹塗土器（袋口口縁長頸壺等）が多数出土している。

さらに、昭和56年7月校舍老朽化に伴う改築工事が実施されたが、この際実施した緊急調査^{註4}において弥生時代後期の住居跡、箱式石棺さらに中世方保田城関係の溝状遺構が確認されている。

この他、大道小学校から南へ約200mの民家裏庭の土手に弥生終末期の溝状遺構とその中に土器が包蔵されているのが確認されている。ここは台地南端の斜面に当たり住宅地であるため、他の遺構は今までのところ確認されないが、恐らくもっと広がってくるものと思われ、大道小学校校庭遺跡をさらに範囲を広げる必要が生じてくる。

このように従来考えていた遺跡の範囲外からも遺構が確認されたり、遺物が出土したりしており、

台地全域にわたって分布しているものと推察される。

さて方保田川の北側に目を転じてみよう。方保田東原遺跡から北を望むと台地中央にこんもりとした森が見える。この森の中には現在5基の円墳が残っており、もっとも大きいもので直径40mを越すものが見られる。これが馬見塚古墳群である。昭和40年この古墳群の中で最も北に位置していた辻古墳が発掘調査され、墳丘内より4基の石棺が検出されている。^{註5}

この馬見塚古墳群の立地している所が台地上で最も高くなっており、その東側に土師器を主体として出土する馬見塚遺跡と近年発見された石原遺跡（第6章参照）が存在する。また、西側には古閑白石遺跡、方保田遺跡、古閑の上遺跡等が広がっている。

馬見塚遺跡（山鹿市大字方保田字権現の前）

馬見塚古墳群西隣りの台地上に位置し、その存在は古くから知られていた。しかし遺跡自体の規模については未調査で今後の調査によって確認してゆかなければならない。

石原遺跡（山鹿市大字方保田字石原）

昭和52年初めて確認された遺跡で、馬見塚遺跡との関連も強い。この遺跡については別項で詳細に報告しているので省略する。

方保田遺跡（山鹿市大字方保田字大田）

馬見塚古墳群西側に広がる台地上の南端部に位置している遺跡で、昭和43年の園場整備事業によって破壊された。その際箱式石棺4基が検出され、中から小形仿製内行花文鏡が1点出土した。^{註6}

この他多量の土器も出土しており弥生時代終末から古墳時代前期の遺物が主であった。

白石遺跡（山鹿市大字古閑字白石ノ上）

馬見塚古墳群の西約600mに位置し、方保田遺跡の北約500mにあたる。昭和57年宅地造成に伴って多量の遺物が出土しており、溝状遺構も確認されている。この遺跡については別項で報告を行っているので省略する。

古閑の上遺跡（山鹿市大字古閑字古閑ノ上）

白石遺跡の西側に位置し、土師器を主体として出土する。別項で1点ではあるが要を紹介しているが、遺跡自体の詳細については未調査の部分が多く不明である。

この他に古墳が数多く見られるが、これらについては省略させていただくことにする。（中村）

註1 山鹿市教育委員会『方保田東原遺跡』1982

註2 立山広吉・徳丸達也「塚の本遺跡調査報告」『石人』第8巻2月号1967

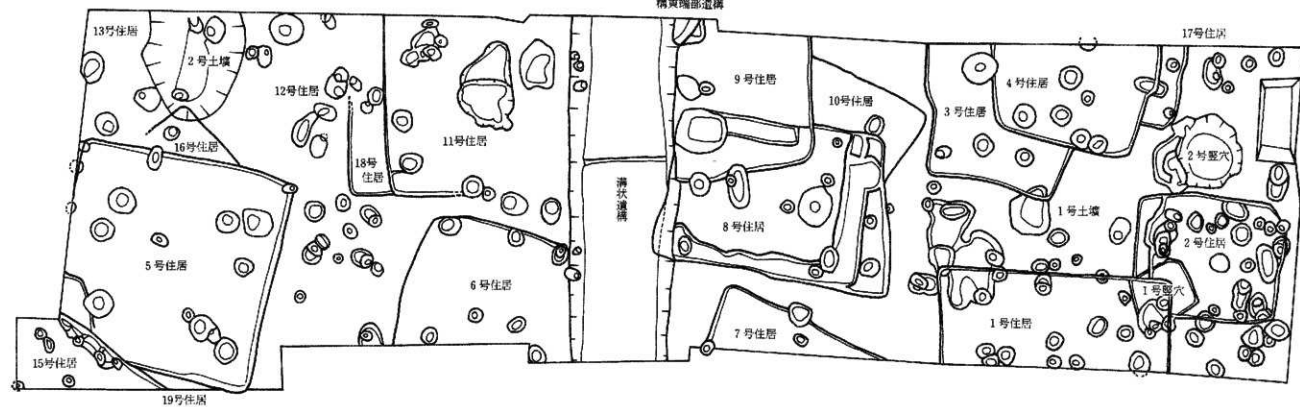
註3 隈昭志「熊本県山鹿市大道小学校出土の弥生式土器」『考古学雑誌』第69巻1号1983

註4 山鹿市教育委員会「大道小学校校庭遺跡」『方保田東原遺跡2』1984

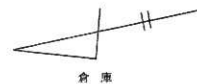
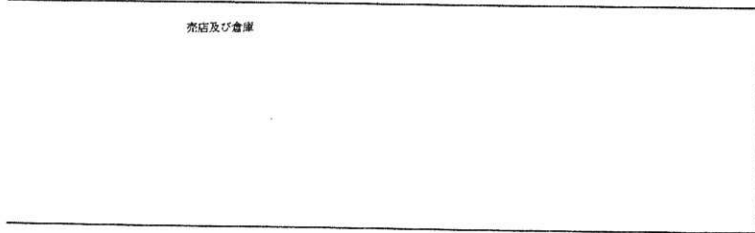
註5 原口長之「原始」『山鹿市史』1985

註6 隈昭志「中九州」『三世紀の考古学』1983

構東端部道碑



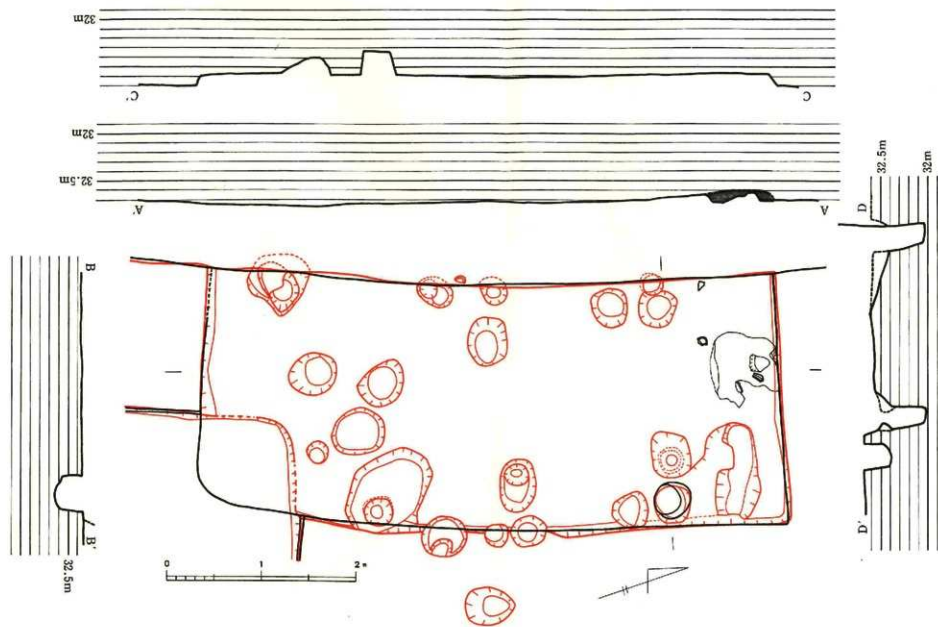
売店及び倉庫



記念碑



第 3 図 遺構配置図 (1/100)



第 4 图 1号住居跡実測図

第3章 遺構と遺物

1. 1号住居跡 (図版3、第4図)

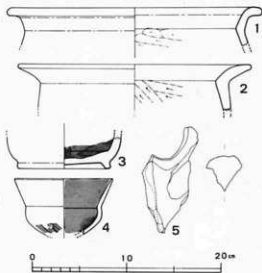
調査区の南西部に位置し、西側半分を調査区外に伸ばす。主軸はほぼ南北に向け、南東コーナーでは2号住居跡を切っている。プランは現状では長方形で、北東コーナーは直角になり、南東コーナーは隅丸となっている。東側壁面はやや湾曲し、一辺620cmを測る。北側と南側壁面は現状でそれぞれ265cmと233cmを測る。床面は上面で堅い面を形成し、北側壁面に沿って焼土の広がりが見られ、長径20cm、短径15cmの煙道部が残っていたが、カマド本体の確認は困難であった。柱穴は床面下より多く検出された。

遺物は焼土内から3点程、土師器が出土している。

遺物

1と5が北側壁面に沿った焼土内より出土し、他はピット内から出土しているが、いずれも細片であった。1は口径26cmを測る甕である。口縁部は「く」字に外反し、頸部内面には稜線を残している。器壁はやや厚手で外面はナデ仕上げで、内面にはヘラケズリを施している。

2は口径24.5cmを測る。口縁部は「L」字状に折れ、外面はナデ仕上げで、内面はヘラ削りを施している。3と4は内面に丹を施しており、外面は共にナデ仕上げである。5は把手だが、周辺を欠き原形を保っていない。

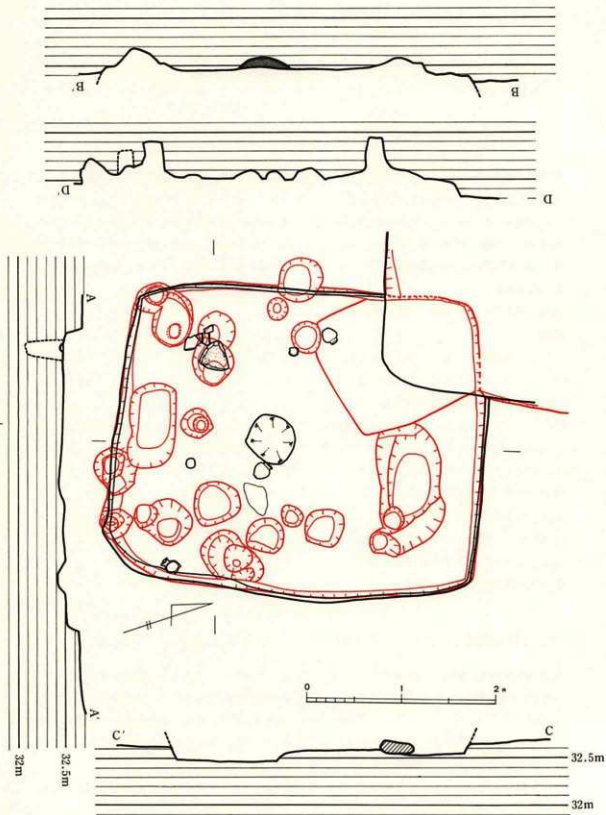


第5図 1号住居跡出土遺物実測図

2. 2号住居跡 (図版4、5、第6図)

調査区南西隅に位置し、主軸はN21°Wに向けている。北側コーナーは1号住居跡によって切られているが、ほぼ隅丸方形のプランを呈している。東側壁面は南側で大きなカーブを描いているため、西側壁面に比べると長くなっており、長軸約400cm、短軸は330cmを測る。床面は堅く、中央に播鉢状の炉を配し、南側壁面中央には長方形の貯蔵穴を造っていた。床面下から主柱穴とともに、1号住居との接合部分で長方形プランを呈した1号竪穴を確認することができた。

遺物は床面上にほぼ完全な形で残っていた。南西コーナー近くでは、安山岩を利用した台石が置かれ、周辺には土器片が散在していた。



第 6 图 2 号住居跡実測図

遺物 (図版22図-1~4、第7、8図)

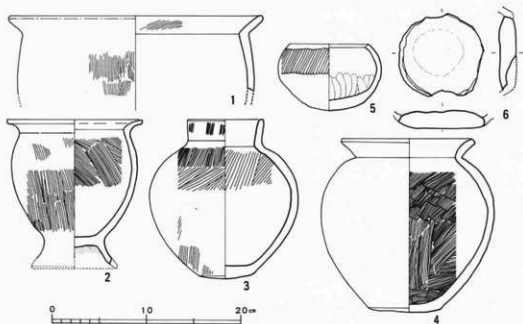
1は甕の破片で口縁部と胴部中位までを残している。口径は26.5cmになるが、器高は不明である。口縁部は「く」字に開き、胴部の脹らみは小さくて直線的であった。器面は一部にハケ目を残している。

2は在地系の小形甕である。口縁部は「く」字に折れて、胴部は、比較的張っている。底部は脚台となり、裾部を欠いている。器面調整は、口縁部は両面ナデ仕上げである。胴部は外面に粗いハケを施し、上部はその後ナデ消している。内面は上部にハケ目を施し、下部はナデ仕上げである。脚台外面はヨコナデ、内面には砂粒が付着している。また、外面上位にはススが付着し、内面は底部から中位よりやや上部まで焦げ付きが見られる。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は褐色を呈している。

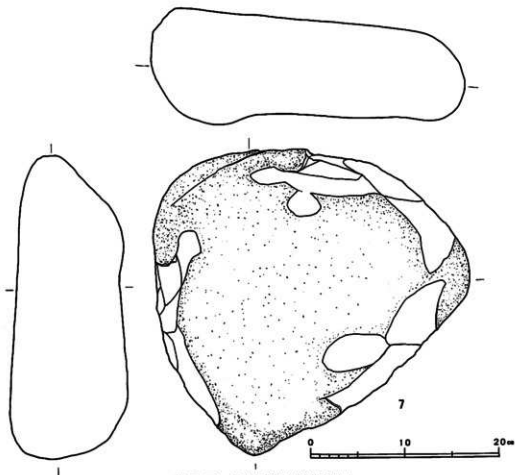
3は短頸甕の完形品である。口縁部は直口し、胴部は張りが大きく、中位に最大径を有している。底部は平底だが、わずかに凸レンズ状を呈している。器壁は厚く仕上げられている。器面調整は外面には2種のハケ目を全面に施し、その後部分的にナデ消している。内面には胴部上位にハケ目を施し、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。器面の縦半分にススが付着している。色調は褐色を呈している。

4は口縁部は外反気味に「く」字に折れていて、胴部は張りが大きく、中位に最大径を有し、底部は平底になっている。器壁は厚く、外面は全面ナデ調整で、内面は口縁部から頸部上はヨコナデで、それ以下はハケ目を施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黄褐色を呈している。

5は無頸の壺と鉢の中間的なものである。口縁部は直線的に内向し、胴部の張りが大きい。底部



第7図 2号住居跡出土遺物実測図



第 8 図 2号住居跡出土遺物実測図

は丸底となっているが、全体的に不整形に仕上がっている。器壁はやや厚手である。器面調整は、外面上位はヘラ研磨、下位をナデ。内面は上位をナデ、下位は指頭によるナデの痕が見られる。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。

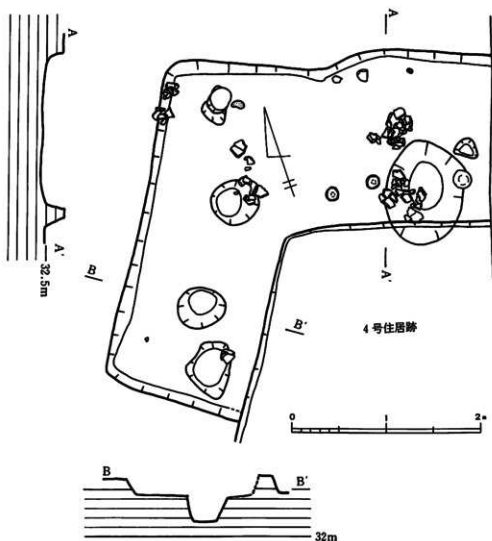
6は底部の周辺を打欠いた再利用品である。壺の底部で、中央が肉厚で、周辺は多少磨減が認められる。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良い。色調は褐色を呈している。

7は安山岩の礫を利用した台石である。周囲は熱を受けたため剝離が著しいが、上面においては表面が光沢をおびるほどに使用されている。(中村)

3. 3号住居跡 (図版6、第9図)

調査区南東部に位置し、東側半分を調査区外に伸ばし、4号住居跡からも切られている。主軸はN60°Wに向けた長方形プランの住居跡で、西側壁面は330cmを測り、北側壁面では現長340cmになっている。床面の状態は不明瞭で、炉跡も見られなかった。柱穴も5個ほど検出されたが、主柱穴の確認までは至らなかった。

遺物は破碎された状態で出土しているものも見られた。なお中央北側の柱穴より須恵器1点も出土し、明らかに後で掘り込まれた柱穴と判断された。

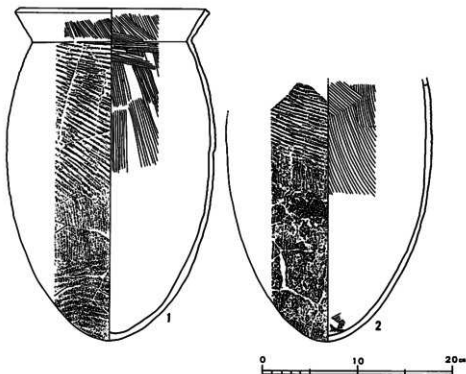


第 9 図 3号住居跡実測図

遺物 (図版22-5~11、23-1~4、10、第10~12図)

1は在地系の甕である。口径19.5cm、器高35cmを測る。口縁部は「く」字に折れ、胴部は張りが少なく長胴丸底となっている。器面は、口縁部は両面ハケ目で、胴部外面は、上位でハケ目の後右下り方向のタタキ、中位は右下り方向のタタキ、やや下位では粗いハケ目で掻き消して、底部では右上りのタタキ目を施している。胴部内面は上位にハケ目を施し、下位はナデ調整である。外面は胴部全面にススの付着が見られ、内面は中位以下に焦げ付きが残されている。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は褐色を呈している。(中村)

2は長胴丸底の甕で上半分を欠く。外面胴部中位に右下りのタタキ目を施す。下位はハケ目を付しているが器面が荒れていてほとんど残らない。胴部下半はススがふっ切れている。内面はほとんど汚れていない。(坂本)



第 10 図 3号住居跡出土遺物実測図

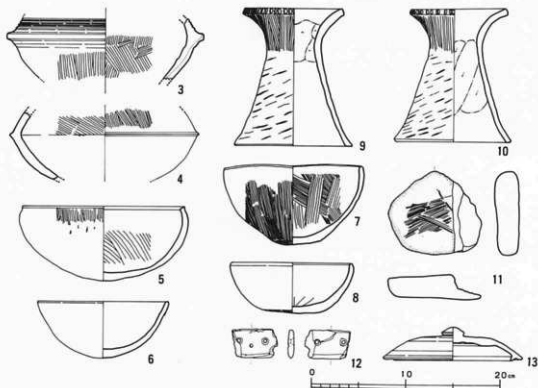
3は算盤玉形を呈する甗である。胴部には四角形の断面をした凸帯をめぐらし、上位には凹線文をめぐらしている。口縁部と底部を欠き、長頸か無頸かは不明。底部は平底になる。器面調整は、外面では、凸帯ナデの部分と直下はナデ、その下はハケ目。内面上位はナデ、下位はハケ目。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。凸帯より下にはススが附着している。

4は算盤玉形を呈した甗である。上部および底部を欠く。そのため長頸になるか無頸になるのかは不明。底部は小さな平底になると思われる。胴部には三角凸帯をめぐらしている。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。器面調整は外面上位はナデ、下位はハケ目。内面も上位はナデ、下位は粗いハケ目を施している。

5は完形品の鉢である。口唇部は平坦で内側に傾斜し、口縁部は上端はナデのためわずかに反っているが、全体には内行している。底部は尖り気味で安定性がない。底部内面には亀裂が「Y」字状に入っていて、補修のための粘土を詰めている。水もれが生じるため、固形物を入れたものと思われる。器面調整は、外面上部はハケ目、下部はナデ調整。内面は全面に粗いハケ目、底部はその後ナデ調整を行っている。なお内面は全面褐色を呈し、底部は幅2cmで、直径12cmのリング状に色があせている。胎土には砂粒を含み、焼成はきわめて良い。外面は黄褐色を呈している。

6は口縁部が直線的に開く鉢で、底部は丸底となる。器面は全面ナデ調整で、胎土には砂粒を含んでいる。焼成は良く、色調は黄白色を呈している。

7は口縁部が波形を呈し、さらに正円にならない鉢である。底部は小さな平底となり、レンズ状を呈するため安定性を欠く。器面調整は全面ハケ目を施し、口縁部は両面ヨコナデで消している。



第 11 図 3号住居跡出土遺物実測図

胎土には靫を含んでいて、砂粒も含んでいる。焼成は良い。色調は褐色を呈している。

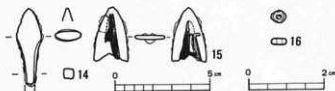
8は完形品の鉢である。口唇部は山形を呈している。口縁部は直口し、底部外面はその後ハケ目を施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黄白色を呈している。

9は10と技法も寸法もほぼ同じで、工人は同一人物と思われる器台である口縁部には刻目を施し、頸部のくびれをやや上位に有している。器面調整は外面上位はハケ目、下位は右上りのタキの後ナデ消している。内面は上部にハケ目とヘラケズリ、下位はナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は褐色を呈している。

10はくびれを上位に有し、裾部は直線的に開いて、器壁は薄い。器面調整は、口縁部心刻目、胴部外面はくびれより上位にハケ目、下位にタキ目の後ナデ調整。内面はヘラケズリとナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は褐色を呈している。

11は扁平な礫の一面に条痕を残し、裏面も多少研磨されている。条痕は二種類あり、太めの線と細い線が見られる。

12は両端部を欠く石庖丁で、現長4.8 cm、幅3 cm、厚さ0.6 cmを測る。この石庖丁は2個の穿孔のほかにもう1個穿孔しかけた痕が残っている。直径3.5 mmで深さ1 mmの小さなものであるが、明



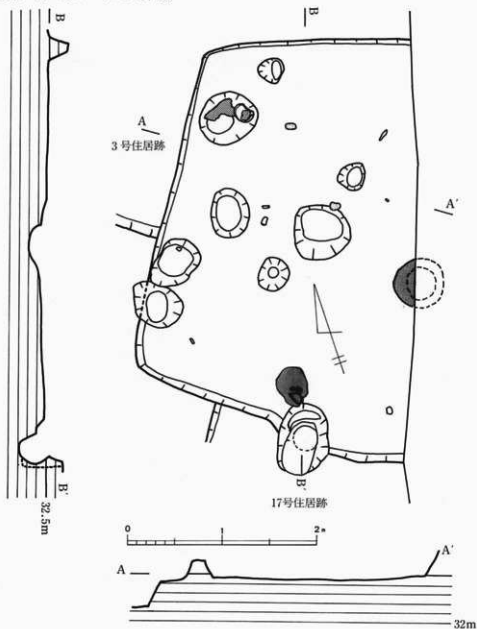
第 12 図 3号住居跡出土遺物実測図

らかに穿孔途中の段階で留めているものである。なお孔上部において表面の磨滅が見られた。

13は須恵器の蓋である。宝珠形つまみで、口縁部は短く内側に向かっている。色調は白灰色を呈している。

14、15は鉄鏝である。13は有径で茎基部を欠いているが現長4.2cm、重さ4.7gを測る。14は無茎の腸袂式である。長さは2.8cmで表面には矢の木質が付着している。重さは2.9gを測る。

16はガラス小玉である。直径8mm、孔径2.5mm、厚さ3mmを測る。色調は青色である。形状としては多少菱形に近い感じである。(中村)



第13図 4号住居跡実測図

4. 4号住居跡 (図版7、第13図)

調査区南東部に位置し、東側半分を調査区外に伸ばしている。主軸はN58°Wに向け、3号住居跡と17号住居跡を切っている。プランは長方形に近くなるものと思われる。西側壁面では340cmを測り、南側壁面で現長300cmになっている。床面は堅く締まっており、摺鉢形をした炉が東側で顔をのぞかせており、南側壁面に沿っても焼土の広がりが見られる。炉の状態から住居跡はさらに東側に伸びると判断された。柱穴は数個検出したが、主柱穴の確認には至らなかった。

遺物は床面上に散在する形で出土した。

遺物 (図版23-5~9、11~12、第14~16図)

1は口縁部は短く直口する壺で、胴部の張りが大きい。外面にはススが付着している。器面調整は、外面と内面、口縁部にはハケ目、胴部内面はナデ仕上げである。胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良い。色調は暗褐色を呈している。

2は口縁部は内向し、最大径を口縁部直下に有する鉢である。胴部は丸味を呈し、丸底となっている。器壁は薄く、胎土には小さな砂粒を含んでいる。焼成はあまり良くない。色調は黄白色を呈している。

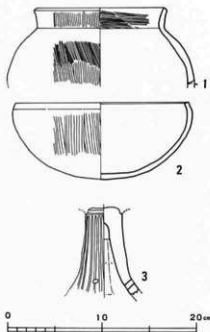
3は坏部と脚部を欠く高坏である。柱状部のみで高さ等不明である。裾部には3個の孔を穿っている。器面は、外面にヘラ研磨、内面はヘラケズリを施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良くない。色調は暗褐色を呈している。

4は壺の口縁部片である。内面には2列にわたり口唇部に沿って竹管文を施している。器面はハケ目を内外面に施し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。

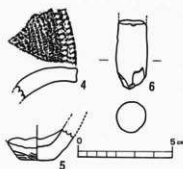
5はミニチュアの甕の破片である。底部のみで器高等不明である。器壁は厚く、器面は外面にハケ目、内面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黒色を呈している。

6は棒状を呈した土製品の破片である。一端は折れているが、もう一端は両側から欠けている。断面は丸い。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は赤褐色を呈している。(中村)

7は鉄鏃である。有茎の柳葉式で全長6.8cm、重さ7.2gを測る。8は断面形より直刀の破片と思われる。重さは28



第14図 4号住居跡出土遺物実測図



第15図 4号住居跡出土遺物実測図

gを測る。9は器種不明の鉄器で両端を欠いている。そのため現長4cm、重さ6gを測る。10も同じく器種不明で現長2.8cm、重さ2.7gを測る。11は扁平な鉄片で四角い周辺の3辺には刃部も形成されておらず利器には成り得ないと思われるが、器種としては断定されなかった。現長3.5cm、幅3.4cm、厚さ6mm、重さ21.1gを測る。(板本)



第16図 4号住居跡出土鉄器実測図

5. 5号住居跡 (図版8、第17図)

調査区北側に位置する正方形の住居跡である。そのため主軸をどのように見るか問題となるが、東西方向を主軸と仮定し、N62°Wをとる。北側では調査区外に僅かに広がり、15号住居跡からもコーナーを切られていた。一辺572cmの正方形で、壁面の残りも良く、床面からの立上りも20cm程度を測る。床面は非常に堅く、焼土等を見ることができない。柱穴は主柱穴4個と他に6個の柱穴を検出した。

この住居跡は、他の住居跡と比較しても規格性に富んだ住居跡で、焼土等炉跡の検出も見られないところから生活の跡が薄く、公共的施設もしくは祭祀的色彩の濃い住居跡と考えられた。

遺物 (図版24-1~3、第18、19図)

ミニチュア土器を主として、数点が床面上より検出された。

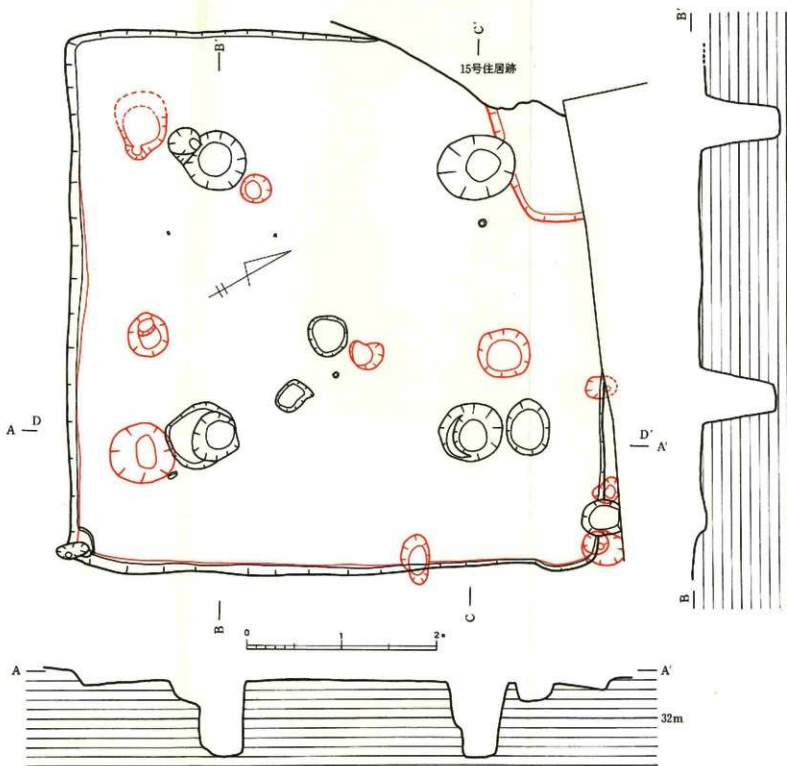
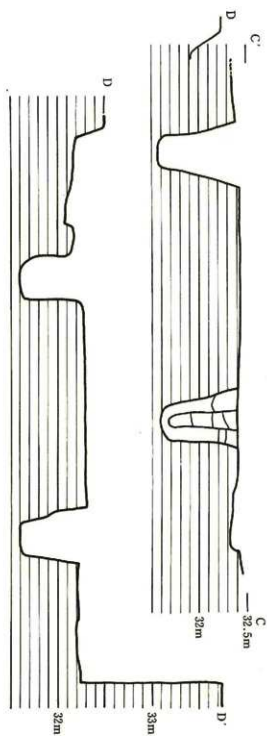
I期……床面から地山層まで

1は在地系甕の破片である。口縁部は「く」字形に折れ、外反しつつ開いている。胴部は張り小さく直線的に向い、底部は脚台になると思われる。器面は口縁部をヨコナデ、胴部は全面ハケ目を施している。外面はススの付着が著しい。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は暗灰色を呈している。

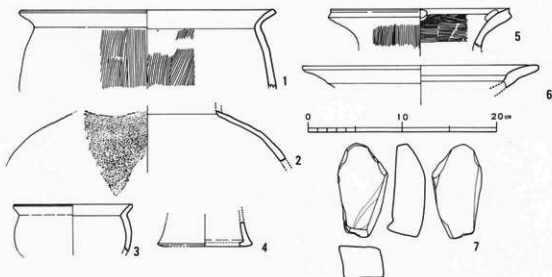
2は壺の肩部片である。口縁部、胴部を欠くため全体の大きさは不明。肩部には櫛描きによる乱れた波状文が描かれている。櫛は、11本で2.7cm幅である。器壁は薄く、器面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は暗茶褐色を呈している。

3は小形鉢の破片で、口径11.4cmになる。口縁部は「く」字形に折れ、胴部の張りは小さく、中位に最大径を有している。器面は全面ナデ調整である。胎土には小さい砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黄褐色を呈している。

4はジョッキ形土器の破片である。底面の径は10cmで比較的小さい。器面は全面ナデ調整で、器壁は薄い。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黄白色を呈している。



第 17 图 5 号住居跡実測図



第 18 図 5 号住居跡出土遺物実測図

II 期……床面より上の埋土層まで

5 は壺の口縁部片である。朝顔状に開く口縁部の内側には、円形貼文を配しているが、破片が小さいため全体に何個配しているかは不明。器面は口唇部でヨコナデ、他の面は全てハケ目である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黄白色を呈している。

6 は高杯の口縁部だけの破片である。復元口径25cmを測る。器面はナデ調整で、胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黄褐色を呈している。

7 は陶石製砥石で四面を使用している。岩質はやわらかく、ザラザラとしている。

祭祀遺物

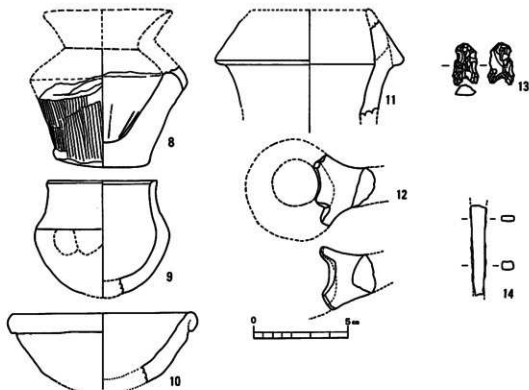
8 は手捏の壺で、口縁部を欠いている。器壁は肉厚で、形は不整形である。胴部から肩部にかけて大きくくびれ、底部は平底となる。器面調整は、外面ではハケ目の後ナデいて、内面はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、焼成もあまり良くない。色調は灰褐色を呈している。

9 はミニチュア壺の破片である。口縁部は僅かに反り気味に直口し、胴部の張りを上位に有している。器面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は褐色を呈している。

10 は床面より埋土層までに（II 期）出土した手捏の鉢の破片である。口縁部は折り返しており、朝鮮系土器の特徴を備えている土器である。器壁は比較的厚く、底部を欠いている。器面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黄白色を呈している。

11 は床面から地山層までに（I 期）出土した複合口縁部をもつ壺の破片である。袋状口縁部にも近く、頸部との境には段を有している。器壁は比較的厚く、全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は橙灰色を呈している。

12 も 10 と同様、I 期から出土した土製柄杓の破片である。柄との接合部分のみで、全体の大きさ等は不明。器面は全面ナデ仕上げで、胎土にはあまり砂粒を含んでいない。焼成は比較的良い。色調は黄白色を呈している。



第 19 図 5号住居跡出土遺物実測図

13は黒曜石製縁である。粗末な作りで、不整形になっている。離面には横割ぎの主要剥離を残している。果たして住居跡の時期のものかは不明。

14も住居跡埋土上面より出土しており、住居跡に伴うとは考えにくい鉄縁の茎である。両端を欠くため現長4.7cm、重さ3.8gを測る。(中村)

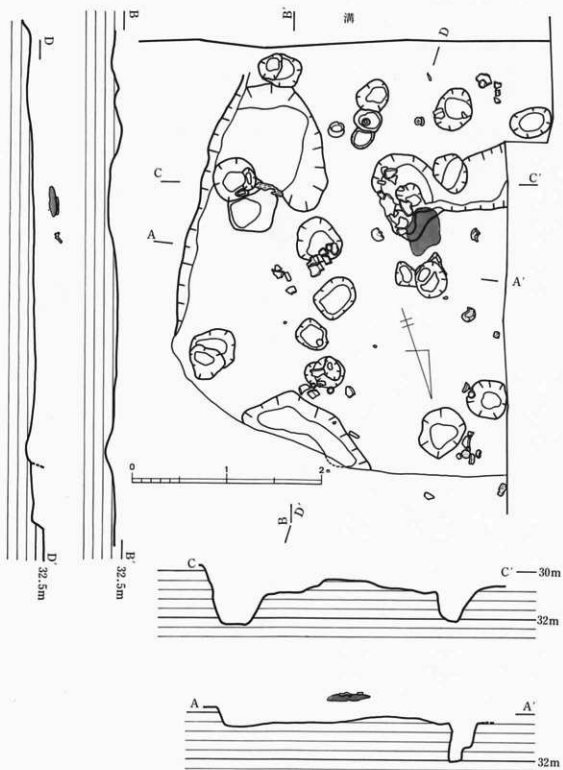
6. 6号住居跡 (図版9、第20図)

調査区中央を東西に伸びる溝の北側に位置し、西側半分を調査区外に伸ばし、南側も溝によって切られている。不整形な隅丸方形で、主軸をN59°Wに向ける形をとっている。現状では住居跡の規模については不明である。床面の状態は部分的に堅い所も見られたが、全体に不明瞭である。さらに焼土も上に在り、炉の確認まで至らなかった。

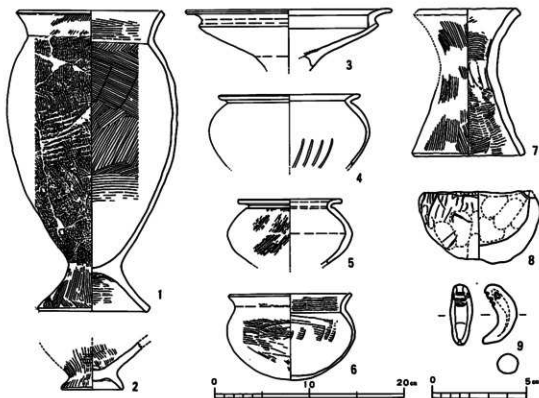
遺物は破砕し、散在する状態で出土した。(中村)

遺物 (図版24-4~13、25、第21~23図)

1は完形の脚台付甕である。口径15.1cm、器高31.7cm。口縁部はやや外湾して立ち上り、端部は角ばり、外側に少し突出気味となる。また端部の中程が凹む部分も見られる。肩部は張り出し、下位に行くに従ってすばまっていく。外面は左下りのタタキ目のあと全面にわたってハケ目を施している。口縁部、脚部はヨコナデを施している。内面は口縁部から胴部下位に至るまでハケ目で調整



第 20 图 6 号住居跡実測図



第 21 図 6号住居跡出土遺物実測図

している。ススの付着や、火熱による変色状況を見ると、それは全体の半数程の破片に限られ、他の破片との接合面でその色調が明瞭に異なることから、おそらく、この甕が破砕後、数片の破片が火を受けたものであろう。また、このことから察すると、ほとんどが未使用のまま破砕したものと考えられる。

2は鉢の脚であろう。成形も調整も大変雑である。

3は高坏の坏部片である。内外面ともナデ調整である。

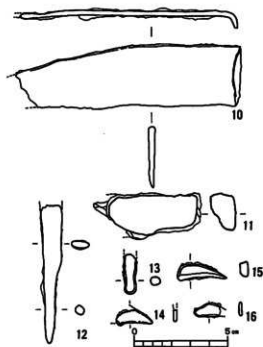
4は鉢の破片である。口縁部極端に寝かせられ、端部はヨコナデにより水平方向へ尖がる。外面はハケ目をナデ潰し、内面にはヘラ描きの暗文を放射状に施している。外面にススが付着し、内面も変色が見られる。

5は鉢の破片である。口縁部はほぼ水平方向にまで反り返っている。外面はハケ目のあとナデ、内面はナデである。

6は完形の鉢である。内外面ともハケ目のあとうすくナデているが、外面のハケ目は乱雑で、内面は右下から左上へ規則的に引き上げている。

7はほぼ完形の甕台で器高15.5cm。内外面ともハケ目を施しているが、調整は大変雑である。スス等の付着は見られない。

8は手捏の鉢である。口径5.6cm、高さ3.8cmの不整形な土器である。器面には指圧痕やシワが多



第 22 図 6号住居跡出土鉄器実測図

17は棒状を呈した磁石である。一端を欠くため現長8cmを測り、断面は菱形をしている。研磨は四面にわたり使用の度合も高いようである。砂岩製。(中村)

7. 7号住居跡 (図版10、第24図)

調査区中央西側に位置し、その大半を調査区外に残し、僅かに東側壁面をのぞかせている。主軸はN45°Wで長方形に近い形をとり、東側壁面は450cmを測り東西方向においては、さらに長くなると思われる。床面は不明瞭だが、僅かに確認することができた。遺物 (図版26-1、第25図)

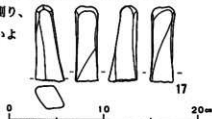
床面よりやや上に散在する形で出土した。

1は口径19cmを測り、底部を欠く壺の破片である。口縁部は外反気味に「く」字に折れ、口唇部は平坦にナデており、両端部では摘み上げたようにしている。胴部の張り直線的だが、最大径を中位に有していると思われる。底部を欠いているが、恐らく長胴丸底の壺であろう。器面調整は口縁部では両面ハケ目、胴部では外面をハケ目の後タタキを施し、内面ではハケ目のみの調整である。2も壺であるが、口縁部と底部を欠くため口径、器高等不明。胴部の中位よりやや上に最大径をもち18.2cmを測る。器面は外面上部にタタキ目とハケ目、内面にはハケ目を施していた。恐らくこれも1と同様、在地系壺で丸底になるものと思われる。3と4は外来系の壺である。3は口径17cmを

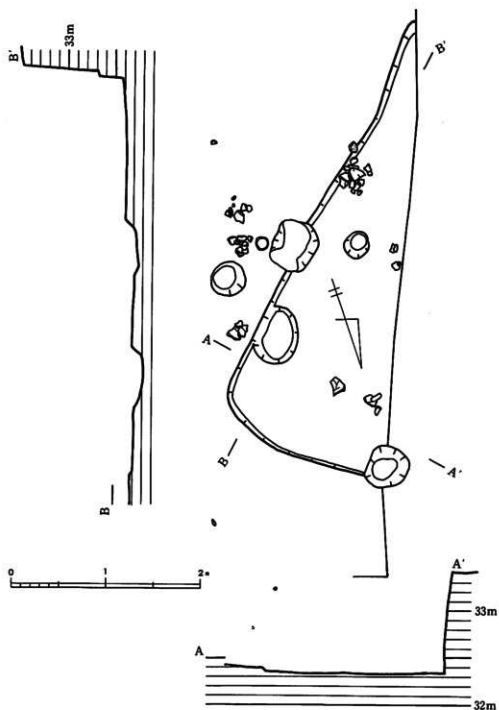
く見られる。器壁は厚く、胎土には砂粒を含まず、焼成は良い。色調は底部では黒色を呈し、他は褐色を呈している。

9は土製勾玉である。頭部内側には丁子頭のごとく3本の刻目を施している。上位は比較的太いが、下位は細い感じがする。孔は半管状工具で穿孔したため、一か所が盛り上っている。胎土は良く、砂粒を含まない。焼成も良い。色調は茶褐色を呈している。(坂本)

10は鉄鏃である。基部を折り返し、保存状態は良いが僅かに先端部を欠いている。表面には図化していないが、不規則な方向をもった植物繊維が付着していた。現長12cm、幅3.3cm、厚さ2mm、重さ41.2gを測る。11は器種不明の鉄片で現長5.7cm、重さ39.3gを測る。12は鉄鏃の茎部分であろう。先端部を欠くが現長7.3cm、重さ4.6gを測る。13~16も器種不明の鉄片であるが、これらは刃部を形成していなかった。



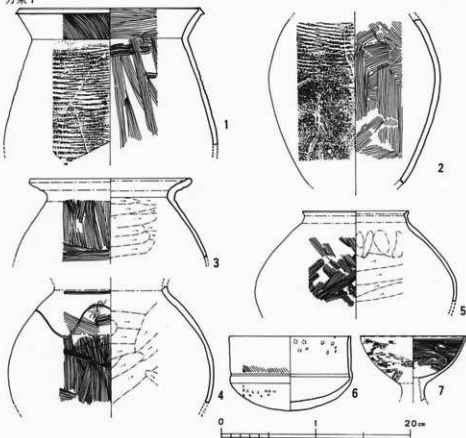
第 23 図 6号住居跡出土石器実測図



第 24 図 7号住居跡実測図

測り、胴部中位以下を欠いているため最大径、器高は不明。口縁部は「く」字に折れているが、中位では外側に僅かに稜線を描いている。器面調整は胴部外面はハケ目、内面をヘラ削りを施している。4 は口縁部と底部を欠いており、僅かに最大径21.8cmを測ることができる。胴部中位に最大径をもち底部は尖り気味になるもので、肩部には波状文を描いている。器面調整は外面にハケ目、内

方東7



第 25 図 7号住居跡出土遺物実測図

面をヘラ削りを施していた。5は短頸壺である。口径11cmで口縁部は小さいが「く」字に折れている。胴部は大きく張り最大径22.4cmをほぼ中位に有している。器面調整は外面にハケ目、内面には指頭圧痕とヘラ削りが施されていた。

6は完形の鉢である。口縁部は直口し高い。胴部は張りが無く浅い。器面調整は全面ナデ調整で、外面の頸部に僅かにハケ目を施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。7は脚部を欠いているため口径11.1cmのみを測ることができる。坏部は口径に比べ深くなっており、埴形を呈している。器面調整は外面ではハケ目の後一部ナデ消しており、内面にはハケ目を施していた。(中村)

8. 8号住居跡 (図版10、第26図)

調査区中央部に位置し、主軸をN25°Eに向けている。この住居跡は9号・10号住居跡を切り、さらに溝状遺構が埋没した後に築かれていることが判明した。また、住居南側壁では増築を行っており、本来は南側と西側壁面さらに東側壁面の一部に沿って浅い溝をめぐるしていたことが判る。床面はあまり堅くならず、炉も中央からやや北に寄った所に残っていた。柱穴は長軸上に2本、棟持

柱が立ち、南側にもう1個、増築した時の様持柱を立てている。

遺物（図版26-2～8、第27、28図）

勾玉等土製品をはじめとした遺物が床面および埋土中より出土した。

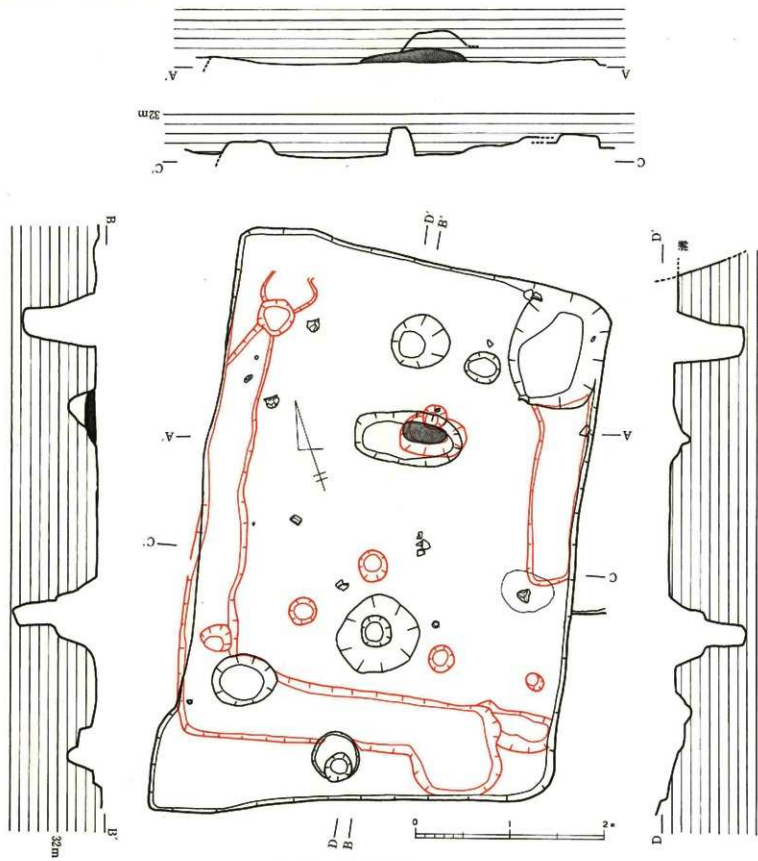
1は在地系甕の破片で胴部以下を欠いている。そのため口径31cmを測るのみである。口縁部は短く「く」字に折れている。器壁は厚手で内外両面はハケ目調整を行っている。2も在地系甕の破片で胴部以下を欠いている。口径22cmで口縁部は「く」字に鋭く折れ外反気味に口唇部に続いている。口唇部では両端を僅かに摘み上げている。3も在地系甕の破片で口径15.5cmを測る。口縁部は外反気味に「く」字に折れていて、器面はハケ目を施している。4は在地系甕の脚台である。裾部径10cmを測り、内面には砂粒の付着が著しい。なお2～4は西側壁に沿った溝から出土している。

5～9は外来系の甕で、5は口径14.7cmを測り、口縁部は「く」字に開き、僅かに内向気味に口唇部へと向かっており、口唇部は丸味を呈していた。器面調整は胴部外面にはハケ目と一部ナデ調整、内面は指頭によるナデ調整を行っている。6は口径14.5cmを測り、口縁部は中位で肉厚となりながら「く」字に開いており、口唇部は摘み上げていた。胴部は中位に最大径を有し、肩部には乱れた波状文を描いている。器面調整は胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りを行っていた。7は口径14.8cmを測り、口縁部は内向しながら「く」字に開いている。口唇部は両端を摘み上げている。肩部には大きな波状文を描きハケ目を施し、内面はヘラ削りで調整を行っている。8は頸部から胴部中位までを残す破片である。胴部上位には櫛描波状文を縦方向に描いている。焼成が悪く内面は器面剝離が著しい。（中村）9は小型の甕でほぼ完形である。口縁部は外湾して立ち上り、のち逆に内湾気味となり端部は丸まる。胴部は口縁径とほぼ同じ程度まで膨らみ、急にすぼまって底部に至る。外面は斜位及び横位のハケ目、内面はヘラ削りで調整を施している。外面には部分によっては口縁端にまでススが付着し、内面にも煮炊きによる変色が見られる。（坂本）

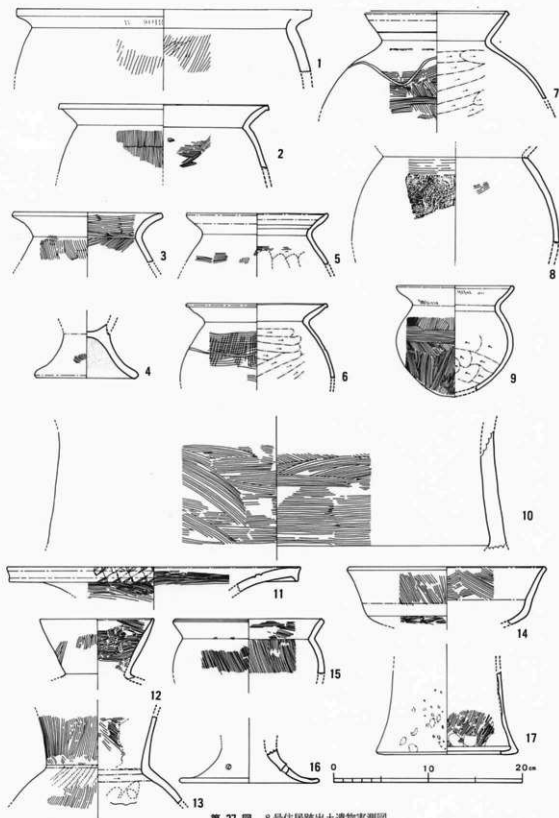
10は最大径48.7cmを測る大型甕の破片である。部位としては複合口縁部に当たると思われた。器面はハケ目調整で、両面にはススの付着が見られた。これは甕が破損した後に付着したものと推察される。焼成は非常に良く堅牢な感じである。11は口径31.1cmを測る甕である。口縁部は大きく外反しつつ開き、口唇部は両端を摘み上げ、刻目を斜格子状に施していた。さらに、口縁部上位の内面においても竹管文2個を並べている。器面調整は全面ハケ目を行っていた。12は口縁部が直口気味に開く甕で、口径12cmを測る。口唇部は僅かに内側へ摘み出しているのが判る。器面調整は外面をハケ目の後ナデ仕上げ、内面は細いハケ目で調整を行っている。13は口唇部と胴部以下を欠いているため器高等不明である。口縁部は僅かに外反しているが、直口気味に開き、肩部においては小さな刺突文による斜文を描いていた。あまりに小さいため拓本でも表われなかった。器面調整は外面ではハケ目、内面は口縁部はハケ目で肩部は指頭による調整痕が残っていた。なお口縁部内面では器面剝離が見られた。

14は口径20.6cmを測る鉢である。口縁部は僅かに外反して開いており、口唇部では内側で小さく摘み上げている。胴部は浅く底部へと続いている。器面調整は全面ハケ目を行っている。

15は口径15.5cmの鉢で胴部以下を欠いているため器高は不明。口縁部は「く」字に折れ胴部の張りも小さいようである。器面は全面ハケ目調整である。16は脚台付鉢の脚部である。裾部は直径14.9



第 26 图 8 号住居跡実測図



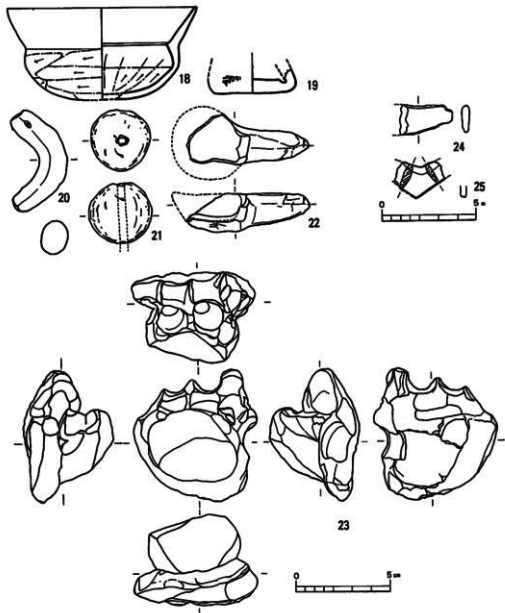
第 27 图 8 号住居跡出土遺物実測図

cmを測り、中位には3個の孔を穿っていた。17はジョッキ形土器の破片である。底部径15cmを測るが、口縁部を欠くため器高不明。器面は両面で剥離が著しく、ハケ目調整を行っていた。

18は口径10cm、器高は約5cmになる罎である。口縁部は直線的に大きく開き、頸部内面には段をめぐらせている。口縁部は両面ナデ仕上げ、胴部は両面ヘラ削りを施していた。

19～23は手捏土器である。19は平底のミニチュア土器で器形は不明、底部径4.6cmを測る。

20は勾玉である。この勾玉は土製のものでは比較的大きく、高さ5.4cm、直径1.7cmを測る。頭部は平坦で先端部も丸味が少なかった。さらに体部の曲がりも少なく大まかな造りであった。胎土に



第 28 図 8号住居跡出土遺物実測図

は砂粒を含まず、焼成も良かった。褐色を呈している。なお、これは9号住居跡との重複部分から2個に割れて出土しており約10cmの間隔があった。

21は直径3.3cmを測る球形土製品で中心に直径3.5mmの孔を穿っている。器面はナデ調整であるが、不正円で表面には凹凸を見ることができる。

22は土製柄杓である。口縁部を欠くため現長6.4cmを測るのみである。柄は短く小形の柄杓である。胎土には砂粒を含まず焼成も良い。赤褐色をしている。

23は異様な形状をなす土製品である。粘土塊を右手で握り締めたもので、指の痕を歴然と残している。粘土塊はドーナツ状の粘土の中に、球状の粘土を右手で握り締めて接合しようとしている。

さらに球状の粘土の表面には剝離面が見られ、ここに他の粘土が付着していたことを物語っている。指痕はドーナツ状の粘土に親指、人差し指、中指、薬指の内側のスタンプが残り、球状の粘土には人差し指、中指、薬指の先端が食い込んだ形で残っている。

用途について考える場合、この遺物に関しては遊び心で作ったのではという疑問も生じる。しかし単なる遊び心であれば、わざわざ焼成する必要もないのではなかろうか。指圧痕の状態から、ドーナツ状の粘土を掌に入れ、球状の粘土を上下に押し当てた様になっている。このことから土器製作における当板の可能性が強い。胎土には砂粒を含むが、焼成も良く褐色を呈している。

24、25は鉄器片であるが両端を欠いているため、器種は不明。24は現長2.8cm、重さ2.9g。25は現長2.7cm、重さ2gを測る。(中村)

9. 9号住居跡(図版10、第29図)

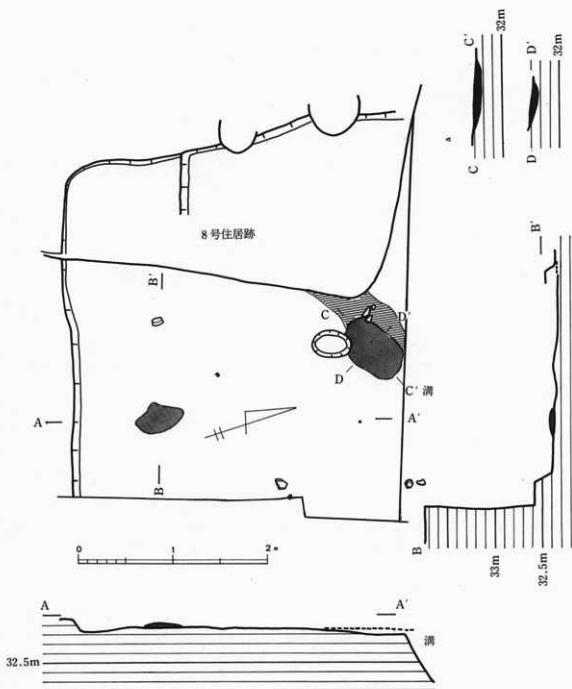
調査区中央東側に位置し、東側半分を調査区外に伸ばしている。さらに溝状遺構から北側を、8号住居跡から西側を、それぞれ切られており、南側においては10号住居跡を切っている。そのため南側壁面を残すのみで、僅かに8号住居跡下より西側壁面が確認された。プランは隅丸方形になり、主軸はN15°Eに向けている。周囲を切られているため規模は不明である。床は堅く、北側には摺鉢形の炉を作っている。

遺物(図版27-1~4、第30、31図)

勾玉、土製玉等が床面上より検出された。1は外来系甕である。口縁部を「く」字に開き、口唇部では僅かに摘み上げている。肩部は直線的に伸び、胴部中位に最大径22.1cmを有している。底部は尖り気味の丸底で胴部全面にススの付着が見られる。器面調整は口縁部では全面ナデ。胴部は外面にハケ目、内面にはヘラ削りを施している。

2は壺の破片で、胴部下位と底部の一部を残して他は欠いている。そのため器形や大きさは不明である。胴部の張り大きく、底部は平底となっている。器面調整は、外面に粗いハケ目とナデ調整、内面は全面粗いハケ目を施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。底部には黒斑が見られる。

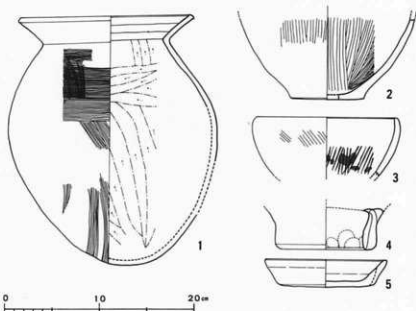
3は底部を欠いた鉢である。口縁部は内湾し、口径に対し深い鉢となる。底部は平底か丸底かは判断できない。内面は赤色顔料が付着している。外面の器面調整は口縁部をヨコナデ、胴部上位に



第 29 図 9号住居跡実測図

ハケ目、その下はナデ消している。内面は口縁部近くはヨコナデ、下位は粗いハケ目である。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。

4は肉厚な土器で、脚部であろう。作りは雑であるが、脚台としては特異な形をしている。脚は短く直立している。器面は全面ナデ調整で、胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黄褐色を呈している。



第 30 図 9号住居跡出土遺物実測図

る。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は暗灰色を呈している。

土製品

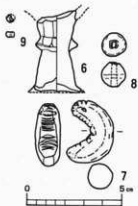
6は鼓形を呈した土製品で、くびれた部には三角凸帯をめぐらしている。両端は僅かに凹んでおり、裾部を欠いている。そのため全体的にどのような器形になるかは断定しにくい。今のところ、高環のような形を呈している。胎土には砂粒をあまり含まず、焼成も良い。色調は茶褐色を呈している。

7は土製勾玉である。全体に芋虫のような感じを受ける資料で、頭部と腹部には刻目が施されている。あたかも丁子頭の特例のような例である。胎土には砂粒を含んでいるが、焼成は良い。色調は暗灰褐色を呈している。

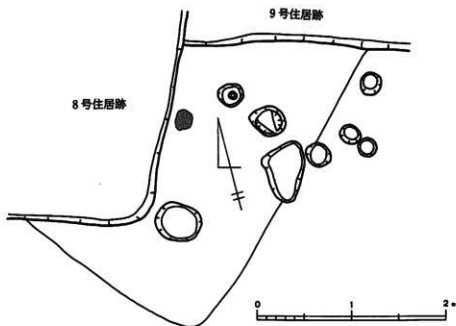
8は土製丸玉である。直径1.2cm程度の玉で、中央には直径3.5mm～3mmの孔を穿っている。土師質で、胎土には砂粒をあまり含まず、焼成も良い。色調は赤褐色を呈している。

玉類

9はガラス小玉の破片である。中心から半欠の状態だが、直径は約4mm程度になると思われた。色はブルーである。(中村)



第 31 図 9号住居跡出土遺物実測図



第 32 図 10号住居跡実測図

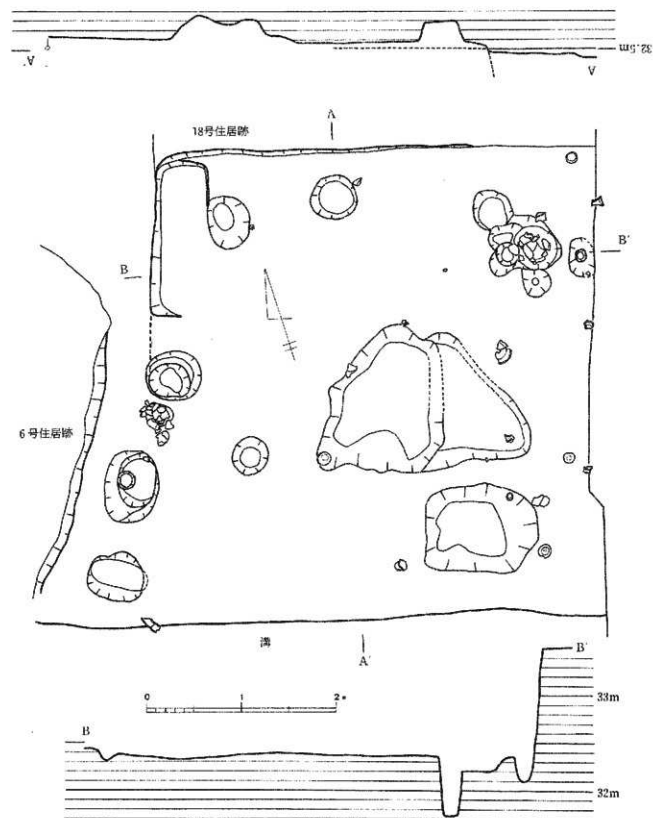
10. 10号住居跡 (図版11、第32図)

調査区中央部に位置し、 $N46^{\circ}E$ に主軸を向けている。しかし北側と西側を9号住居跡と8号住居跡によって切られており、残っている部分は僅かに南側壁と東側壁の一部であった。そのため、プランは隅丸方形になるが、規模については不明である。壁もほとんど立上りが見られず、僅かに床面が堅いところから確認できた。焼土は8号住居跡東側壁面に沿った位置で検出された。

遺物は出土していない。

11. 11号住居跡 (第33図)

調査区中央部に横たわる溝状遺構の北側に位置する。北側壁面の一部と西側壁面は北側の一部が確認されただけで、さらに東側壁面は調査区外に存在するものと思われた。また、南側壁面は溝状遺構によって切られていると思われたが、遺物の検討を行い、住居跡が新しいと判明した。そのため溝状遺構の上まで達すると思われたが、現場では確認できなかった。主軸は $N17^{\circ}E$ にとり、北側では18号住居跡を切り、先の結果から溝状遺構を南側で切っていることが判明した。18号住居跡については当初11号住居跡のベッド状遺構ではとも考えたが、遺物に時間的な差が認められるところから、別の住居跡であると判断した。形は隅丸方形で、北側壁面は現長480cmを測り、さらに長くなることが考えられるところから、約550cm程度になるものと思われる。床面は堅く、部分的には不明瞭な所も見られ、炉跡についても確認できなかった。中央部には長さ220cmの不整形なピットが見られた。柱穴は壁面に沿って見られるが、主柱穴は不明。柱穴附近に遺物が見られ、南側では溝状遺構の上でも見ることができ、住居跡が新しいことを物語っていた。



第 33 图 11号住居跡実測図

遺物 (図版27-5~13、28-1~7、第34~37図)

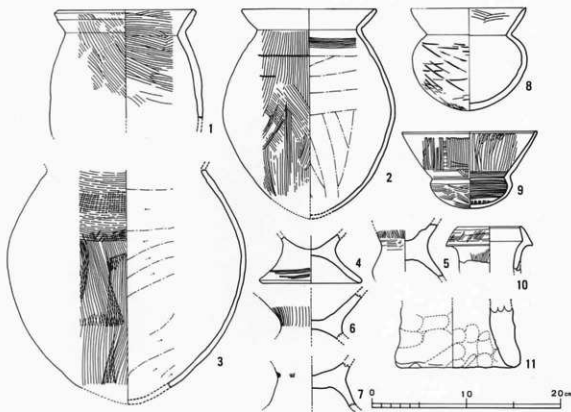
1は在地系甕の破片で底部を欠いており、口径は14.3cmを測る。口縁部は中位で肉厚になり、外反気味に開いている。胴部は直線的で張りが小さく最大径は約16.2cmとなっている。器面は全面ハケ目を行っている。

2は外来系の甕である。口縁部は「く」字に開き、口径14cmを測る。胴部は中位に最大径18cmを有しており、底部は欠けているが尖り気味の丸底になる。そのため器高は約22.3cm程度になろう。器面調整は、口縁部では両面ナデ調整。胴部では外面はハケ目、内面は肩部でハケ目、以下はヘラ削りを行っている。なお肩部外面は波状文が変形して一条の横線を描いている。

3も外来系の甕である。口縁部と底部を欠くため最大径25.3cmを測るのみである。なお最大径は胴部中位よりやや上に位置しているようである。器面は外面をハケ目、内面はヘラ削りで調整を行っている。

4~7は脚台である。4のみ裾部径10.3cmを測るのみである。

8は甕と壺の中間タイプであるが、ここでは壺と扱っておく。口径12.2cm、胴部最大径も同じく12.2cmを測り、器高は10.9cmである。口縁部は直線的に開き、胴部も上位に最大径を有しているため、肩の張った感じがする。器面には胴部外面にヘラ研磨の痕を残し、口縁部内面にハケ目を残し、他はナデ調整であった。



第34図 11号住居跡出土遺物実測図

9は口径14.3cm、器高7.1cmを測る丁寧な造りの埴である。口縁部は長く直線に大きく開き、胴部は浅くて小さい。器面は全面ヘラ研磨による調整を行っている。

10は複合口縁をもつ壺で、口縁部のみの破片である。口径6.7cmを測り、口縁部は内向しながら立ち上っている。頸部は比較的細く、長頸壺になるものと思われる。

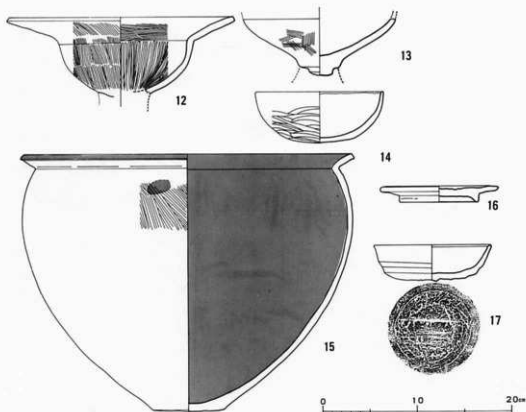
11は器台の破片である。裾部では12cmの直径をもち、器壁が厚く全面に指の痕を残した粗製品と言えよう。

12は脚部を欠いた高坏である。口縁部は長く外反気味に開き、坏部は丸味を帯びている。器面調整は外面は全面ハケ目、内面は口縁部はハケ目、坏部はヘラ研磨である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黄白色を呈している。

13も脚部を欠いた高坏だが、さらに口縁部まで欠いているため全体の形は不明。坏部は脚を差し込む形をとっており、接合面から欠けている。

14は鉢である。口径13.5cm、器高5.4cmを測る。口縁部は直口し、底部は比較的平坦になって安定が良い。器面調整は外面にヘラ研磨、内面と外面上部はナデ調整を行っている。器壁は均一でなく多少左右で差異が認められた。

15は大型の鉢である。口縁部は「く」字に鋭く折れ、胴部は上位に張りをもっている。底部は平底で円径に比べ小さい。内面は全面に赤色顔料を塗っており、外面は口唇部のみ塗られている。器



第 35 図 11号住居跡出土遺物実測図

面調整は、口縁部は全面ナデ、胴部は外面上位にハケ目、下位はハケ目の後ナデ消している。内面は全面ナデの後ヘラ研磨を行っている。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黒斑を胴部に残し、暗褐色を呈している。

16は時期的には異なる土師器の托である。直径12.5cmの大きさに高台を付けて、器高は1.7cmになる。この資料はⅢ次調査の段階でも出土しており、一連のものであろう。今回の調査でも一括資料として他に1点出土している。

托は扁平な皿に高台が付いた形で、今日の茶托の原形とも言えるもので、時期的には10世紀前半^{Ⅱ2}頃と推定されており、溝上から出土した土師器との関連性も深いところから興味深い資料と言える。

17も土師器で、口径12.2cm、器高3.8cmの壺である。底部には板目の圧痕を残している。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。

18は脚台付鉢のミニチュアである。口縁部と脚裾部を欠くため大きさは不明。器面調整は外面は全面ヘラ研磨。内面はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黒色を呈している。

19は高坏柱状部である。両端を欠くため器高等不明。

20は口縁部を欠いているが、ミニチュアの壺である。底部は尖り、最大径は胴部上位に有している。器面は全面ナデ調整で、器壁は厚い。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は灰褐色を呈している。

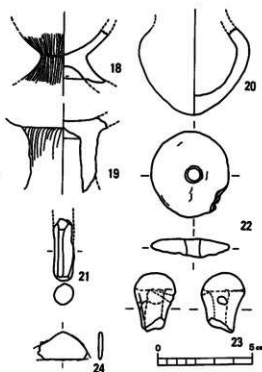
21は棒状を呈した土製品である。直径は1.1cmで、断面はわずかに稜をもっている。現状では器形は断定できかねる。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は褐色を呈している。

22は土製の紡錘車である。直径4.5cm、厚さ0.9cmで、中心部には直径0.8cmの孔を有している。胎土にはあまり砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黄白色を呈している。造りは丁寧に仕上げている。

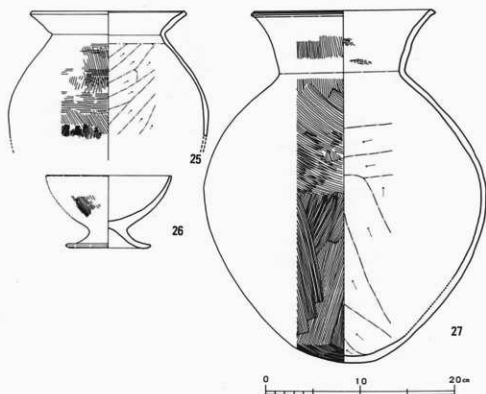
23は頭部が球状を呈した土製品で、下部は棒状を呈する。先端を欠いているが、勾玉のように曲がらず、直線的に先端に向かうと思われる。また、頭部には孔を穿っているが、1.3cmの深さで止まっていて、貫通していない。現段階での器種の断定はできかねる。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黄褐色を呈している。

24は三角形をした鉄片で左右の端部を欠くため現長2.6cm、重さ2gを測る。

25～27の遺物は溝埋没後に住居が築かれたことを物語る資料である。これは溝状遺構上面で処理していたものだが、時間的位置付けの中で他の資料より新しく、11号住居跡出土遺物と共伴するも



第36図 11号住居跡出土遺物実測図



第 37 図 11号住居跡出土遺物実測図

のと判断された。従ってここに記するものである。

25は外来系甕の破片で、胴部下位を欠いている。口縁部は外反しながら「く」字に開き、口唇部は内側に僅かに摘み上げている。器面調整は口縁部は全面ナデ、胴部は外面にハケ目、内面はヘラ削りを行っていた。

26は土師器の台付鉢で口縁部の大半を欠損する。調整はほとんどナデであり、外面のハケ目も大方ナデ消されている。内底に器面の剥落が多く見られる。

27はほぼ完形の甕で、口径18.8cm、器高37.2cm、胴部最大径30cmを測る。口縁部は、外側が水平方向に摘み出され中程が凹む。外面は2種類のハケ目を施し、内面はヘラケズリとナデで仕上げている。底部はやや平たくなる。口縁部内面の器面剥離が著しい。

なおこれらの出土状況は溝状遺構の中を含んでいる。(第55図)(中村)

注1 III次調査では今回の調査の契機となった農協東側トレンチ内より出土している。

注2 「海の中道遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第87集1982

12. 12号住居跡 (第38図)

調査区北側に位置している。床面は堅い状態で、遺物も出土しているが、周囲を18号住居跡や16号住居跡等から切られているため壁面を確認するには至らなかった。この点から見れば、果して住居跡であるか否か疑問が残るところである。

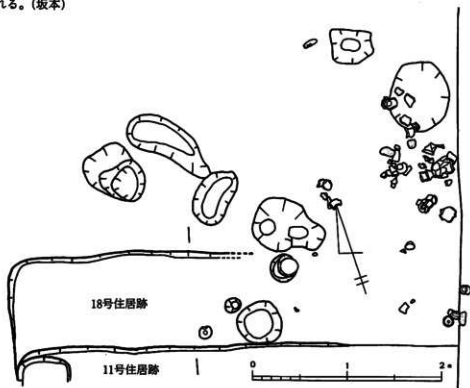
遺物は鉄庖丁を始め、土器が多く出土している。

遺物 (第28-8~12、29、第39~41図)

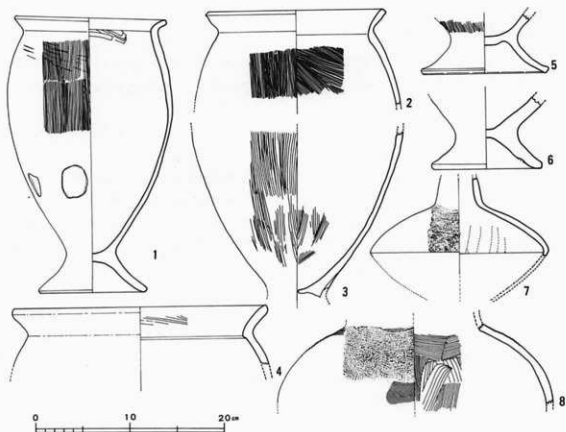
1は在地系の甕で、口縁部は「く」字に外反している。胴部の張り小さく、直線的に底部に向っている。底部は脚台となっている。胴部下位では器面の剝離が生じており、上位には器面が荒れてザラザラしている。外面にはススが付着している。器面調整は、口縁部で両面ヨコナデ、胴部外面は上位にタタキを施し、その後ハケ目を施している。下位はナデ調整である。胴部内面はナデ調整である。脚台は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は黄褐色を呈している。

2は在地系甕の口縁部片である。口縁部は「く」字に外反し、胴部はやや張り気味である。器面調整は、口縁部は全面ナデ、胴部も両面ハケ目を施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は暗灰色を呈している。(中村)

3は脚台付甕の底部片である。内外面ともハケ目で調整する。外面にスス、内面にコゲツキ痕が見られる。(坂本)



第 38 図 12号住居跡実測図



第 39 図 12号住居跡出土遺物実測図

4は在地系甕の口縁部片で口径は26.6cmを測る。口縁部は外反しながら「く」字に開き、胴部との接合面で段を有している。器面は全面ナデ調整だが、口縁部内面に一部ハケ目を残している。

5は在地系甕の脚台である。裾は短かいが大きく開いている。そのため脚台としては低い感じである。器面調整は胴部にハケ面を施し、他面は全てナデ調整である。胎土には小さな砂粒を含むが焼成は良い、色調は褐色を呈している。

6は在地系甕の脚台である。器壁は厚く、全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黄褐色を呈している。

7は口縁部と胴部を欠く壺である。頸部は細く、長頸になると思われる。胴部は算盤玉状を呈し最大径を胴部中位に有し、シャープな稜線をめぐらしている。底部については小さな平底になるものと思われる。肩部には細い櫛描小波状文を二段にめぐらしている。文様は残し部分的に消えていたり、乱れたりしている。器面調整は、外面は全面ナデ調整、内面もナデ調整で、胴部には指圧痕が残っている。胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良い。色調は赤褐色を呈している。

8は肩部に櫛描文を施した壺の破片である。口縁部と胴部下位を欠いているため全体の器形は不明。肩には10本の櫛描横線文をめぐらし、真下には波状文を配している。この波状文は施文具の両端を交互に軸としてコンパスを半転する如く波状文を描いている。また、胴部中位には赤色顔料が円文状に塗られている。器面調整は外面でナデ調整、内面は細いハケ目と粗いハケ目を施している。

胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は灰褐色を呈している。

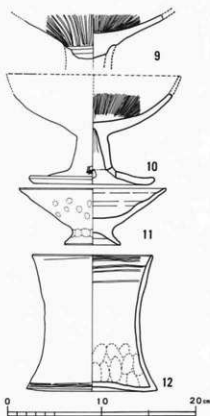
9は高坏であるが、脚部と口縁部を欠いているため器形は不明である。脚部との接合部で剥離していて、粘土栓を残している。器面調整は、坏部全面を縦方向のヘラ研磨を施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は暗灰色を呈している。

10は口縁部を欠いた高坏である。坏部は曲線をもって口縁部に向い、脚台は低く、裾部は大きく開いている。脚裾部と柱状部の間に4個の孔を施している。器面調整は、坏部外面と脚外面はナデ調整、坏部内面はハケ目、脚内面はナデ仕上げである。(11とともにこれまで出土していないタイプの高坏である。) 胎土には小さな砂粒をわずかに含み、焼成も良い。色調は黄白色を呈している。

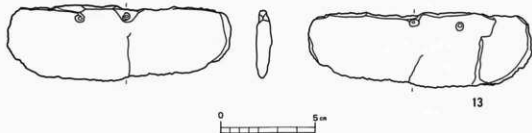
11は脚台を有する鉢で、指圧痕を表面に残している。器面調整は全面ナデを施し、胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黄白色を呈している。特異な器形の鉢である。

12はジョッキ型土器である。口径12.6cm、器高14.4cm、底部径13.8cmを測る。半欠のため把手の有無について断言できない。

13は石庖丁形鉄器(鉄庖丁)である。長さ11.7cm、幅3.8cm、厚さ0.8cm、重さ104.7gを測るもので国内で初の出土である。形状は石庖丁と酷似しており、直線に伸びた背。湾曲した刃部。さらに、全体のほぼ中央に孔を穿ち、約2.5cm離してさらにもう1個の孔を穿っている点は、まさに石庖丁製作の方法と同じであると言わなければならない。さて、全体の観察から細部の観察に目を転じてみると鉄庖丁のほぼ中央部分と孔の外側の2か所で地金を接合したような痕跡が認められる。とくに中央部では接合線に沿って左右の幅が違っており、4cmと3.5cmを測る。さらに図にも示すように孔の外側には明瞭な線が残っており、3枚の地金を貼り合わせたような形で製造されたものと思われる。なお詳細については項を譲ることとする。(中村)



第40図 12号住居跡出土遺物実測図



第41図 12号住居跡出土鉄器実測図

13. 13号住居跡 (第42図)

調査区北東端に位置し、16号住居跡と土壌によって切られ、大半は調査区域外へと広がっている。床面は非常に堅いが、12号住居跡と同様壁面の確認が出来ず、住居跡として取り扱っていいものか疑問が残るところである。

遺物 (図版30、第43図)

1 は在地系甕の破片で胴部中位から下を欠いている。口径は17.5cmになり、口縁部は緩やかに「く」字を呈している。口唇部も丸味があり下方へ僅かに膨らんでいる。胴部は大きく膨らんでいるが最大径は中位に有していると思われた。器面調整としては全面をハケ目で行っていた。

2 は在地系甕の脚台である。胴部とのくびれの径も大きく、比較的大きな脚である。外面の器面調整は、くびれと裾部にタタキ目を施し、その後全体にハケ目を施している。内面は胴部にハケ目、脚部にはハケ目とヨコナデを施している。胎土には砂粒をあまり含まず、焼成も良い。色調は褐色を呈している。

3 も脚台である。2 と比べると脚内側の状態が違っており、砂粒の付着も著しい。器面はハケ目による調整である。

4 は口縁部を欠く壺である。口縁部は直口し、複合口縁になると思われる。胴部中位よりやや下に最大径を有しているため、ずんぐりとした感じを与える。底部は尖り気味の丸底である。胴部内面には、幅5.6cmで帯状に黒色を呈している。これは煤や焦げ付きとは異っているようだ。器面調整は、外面にはタタキ目を全面に施した後、ハケ目によって消しているため、部分的にタタキ目を残している。タタキ方向は、上部は右上り、下部は水平である。内面は全面へう削りを施している。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は茶褐色を呈している。

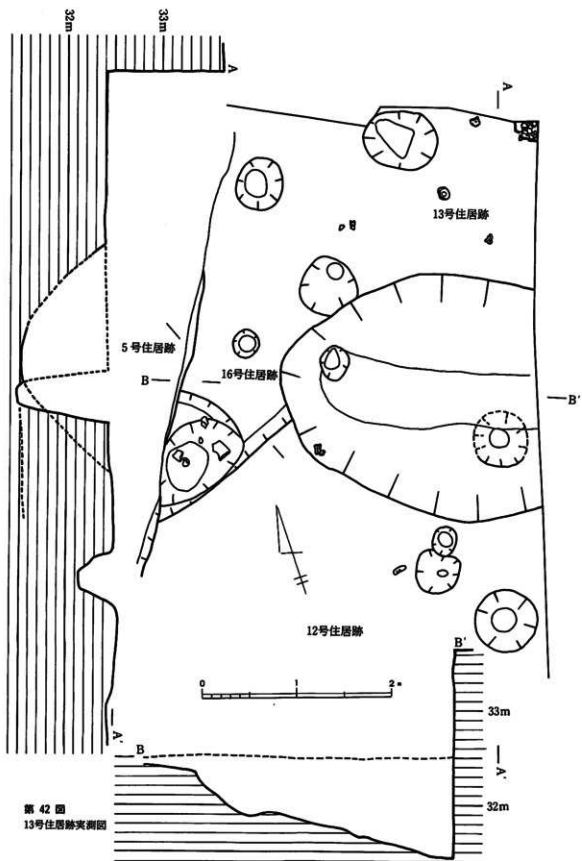
5 は住居内の不明土壌より出土した土器で、小型の壺である。口縁部を欠くため開くのか、複合口縁となるかは不明。胴部は球形に近く、底部は丸底である。器面は全面ナデ調整を施し、その後胴部下位にへう削りを施している。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は赤褐色を呈している。

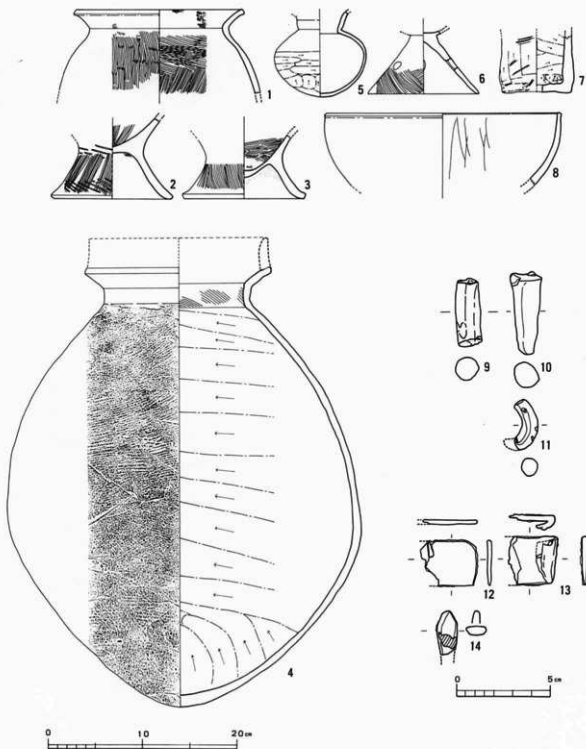
6 は土器高坏の脚である。裾部は直線的に大きく開き、中位に3個の穿孔を有している。器面調整は外面上部はへう研磨、下部はハケ目を施している。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は赤褐色を呈している。外面の一部と内面の一部にはススの付着が見られる。

7 は粗製のジョッキ形土器である。円筒形をしており、平底となっているが口縁部を欠いている。器壁は他のジョッキに比べると極端に厚く、器面もへう削りで調整している。これらの点からジョッキを模造したかの感じのする資料のようである。

8 は底部を欠く鉢である。口径は24.4cmを測る大形の鉢である。口縁部は直口し、口唇部外面に僅かな膨らみが見られる。器面調整は外面を全面ナデ調整。内面は板状の工具を使用し、その端部による条痕が数条残っていた。

9 は両端を欠いた棒状の土製品である。そのため現長3.6cm、直径1.2cmとなっている。直線的に





第 43 圖 13号住居跡出土遺物実測図

なっているところから土製柄杓の柄ではと考えられる。

10は土製柄杓の柄である。端部を欠いていて、全体の大きさは不明。器面はナデ調整で、胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は褐色を呈している。

11は小形の土製勾玉である。頭部内側には丁子頭のごとく3本の刻目を残している。上位は比較的太いが、下位は細い感じがする。孔は半管状工具で穿孔したため、一箇所が盛り上がっている。胎土は良く、砂粒を含まず、焼成も良い。色調は茶褐色を呈している。

図版30-5は特異な形状をなす粘土塊である。そのため図化し得なかった。平坦な2面を有しているが、不規則であるため、全体がどのような形になるのか判断できない。一部分は欠けているが、不整形な面が2箇所あり、これ自体で形を成すものか、部分的なものなのかは判断できない。器面には植物繊維の圧痕を残し、胎土も砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黄白色を呈している。

12は長さ3cm、幅2.4cm、厚さ2mm、重さ5.6gの鉄片で端部を欠いている。下辺には刃部を形成しているが器種は断定できなかった。

13は手鐲の破片である。幅2.6cm、厚さ3mm、重さ7.3gで、端部を欠いているため現長2.6cmを測るが本来10cm程度になるものと思われる。端部は約1cm程折り返しており、形状的には手鐲の特徴を残している。(第6章参照)

14は鉄鐲の破片である。茎を欠くため現長2.3cm、重さ2.2gを測るのみである。

14. 15号住居跡(第44図)

調査区北西部に位置し、僅かに壁面の一部と床面を確認できたに過ぎない。この住居跡は5号住居跡確認の段階で、調査区を拡張した際に検出されたもので、5号住居跡の北西コーナーを切っており、その大半は調査区外へと延びているため規模については不明である。そのため主軸方向も、壁面方向から考えるとN57°Eに向いている以外不明である。南壁に沿って貯蔵穴が掘られ、柱穴も見られる。床面は堅く締まっており、遺物が散在していた。炉は調査段階では確認されず、調査区外に存在するものと思われる。

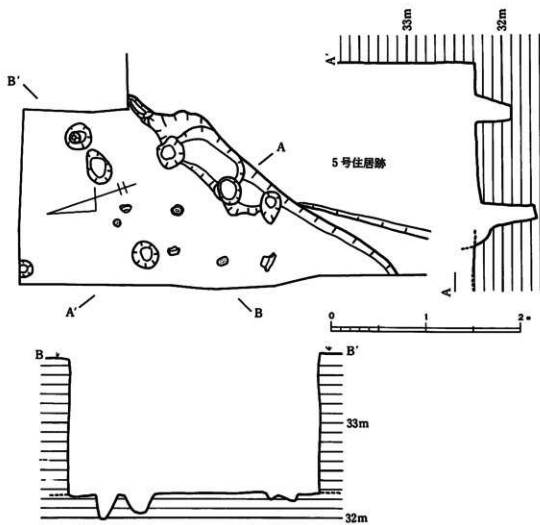
遺物(図版31-1、2、第45図)

1は口縁部は内湾気味に「く」字に開き、直下には三角凸帯をめぐらす黒髪式系の甕である。口縁部から胴部上位にかけての破片である。器壁は薄く、器面は口縁部は両面ナデ調整、胴部は両面ハケ目を施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。

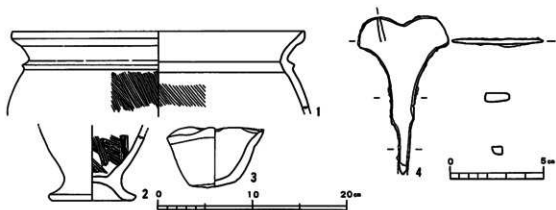
2は甕の脚台で、上部を欠いている。器面調整は、胴部外面はナデ、内面はハケ目を施している。脚台は短かく、全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含み、焼成は良くない。そのため器面の剝離が見られる。色調は赤褐色を呈している。

3は手捏土器で、全体に形が歪んでいる。口縁部は波状を呈し、胴部や底部も不均一に仕上がっている。全面ナデ調整を行っており、胎土には小さな砂粒を含んでいるが、焼成は良い。色調は黄白色を呈している。

4は鉄鐲であるが、この資料は住居跡の上ではあるが床面から約60cm程高い地点からの出土で、



第 44 图 15号住居跡実測図



第 45 图 15号住居跡出土物実測図

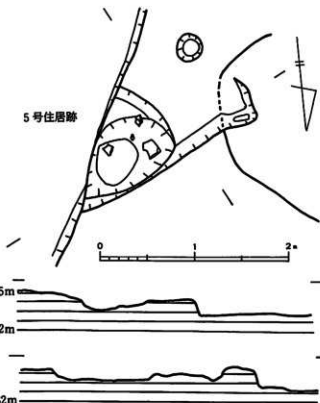
直接この住居跡とは結びつかないが、一応ここで紹介しておく。

この簾は茎先端部を欠くため現長8.4cmを測る。形態は有茎の雁股式で幅4.8cmを測り、重さは20.5gであった。保存状態も極めて良好である。

15. 16号住居跡

(図版12-3、第46図)

調査区北側に位置している。主軸はN27°Wに向け、5号住居跡と土壌から切られている。壁面は南側の一部を残すのみで、13号住居跡との間においては確認できなかった。床面は僅かに堅いが締っていない。5号住居跡の間では落ち込みが見られ、この中から土器片数点が出土しているが細片のため図化し得なかった。

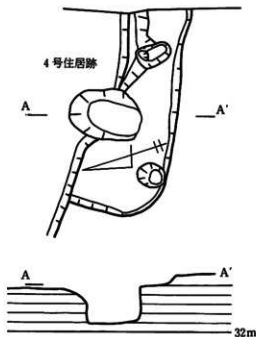


第 46 図 16号住居跡実測図

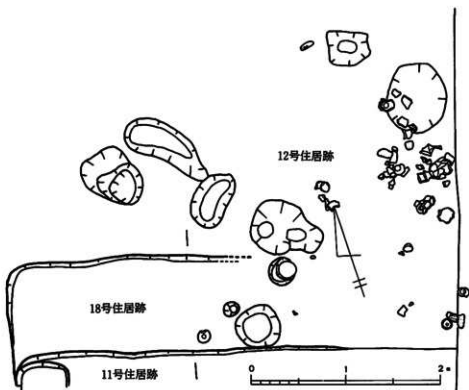
16. 17号住居跡 (第47図)

調査区南東部で4号住居跡南側に位置している。住居跡の大半は4号住居跡に切られており、僅かに南側のみを残している。しかし、その南側も殆んどを調査区外へと延ばしているため、確認できたのはほんの一部にしか過ぎず、規模等は不明である。床面はあまり堅くなく、炉等の確認はできなかった。

遺物も出土していない。



第 47 図 17号住居跡実測図



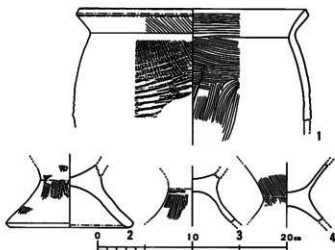
第 48 図 18号住居跡実測図

17. 18号住居跡 (第48図)

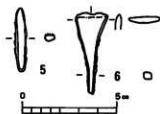
調査区北側に位置し、北側と西側壁面の一部を残すのみで、南側は11号住居跡によって切られている。東側壁面については、北側壁面も途中で消えたような状態であったため、確認できなかった。主軸はN16°Eに向け、11号住居跡とほぼ同一方向である。そのため、11号住居跡の所でも述べたが、11号住居跡のベッド状遺構ではとも考えたのである。現状では方形になるのみで、規模等は不明である。床面は堅く締っていたが、炉の確認はできなかった。

遺物 (図版31-3~4、第49、50図)

少ないが床面に散在していた。1は在地系甕の破片で胴部以下を欠いている。口径24cmを測り、「く」字に折れた口縁部は外



第 49 図 18号住居跡出土遺物実測図



第 50 図 18号住居跡出土鉄器実測図

反しつ開いている。胴部は張りが小さく、直線的に伸びており最大径は中位に有すると思われる。

器面調整は、口縁部では全面ハケ目、胴部外面はタタキの後ハケ目、内面はハケ目を行っていた。

2～4は脚台である。裾部径が測れるのは2のみで13.5cmである。器面はいずれもハケ目調整であった。

5は長さ3.4cm、幅5mmの鉄器である。両端を尖り気味にしているが刃部は形成していない。用途不明の鉄器で重さは1.2gとなっている。6は広根斧箭式の鉄鏃で、現長4.4cm、幅1.7cm、重さ3.5gを測る。

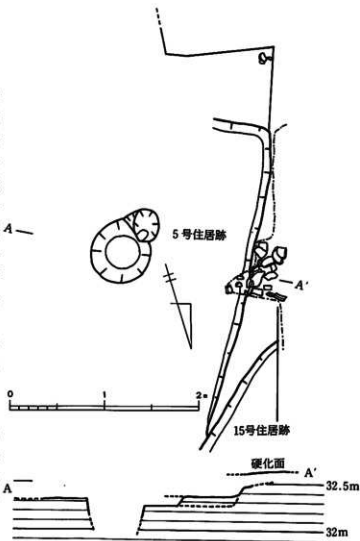
18. 19号住居跡 (第51図)

調査区北西隅拡張部に位置しているが、5号住居跡と15号住居跡の間に僅かに硬化面と遺物が密着する形で検出された。さらに遺物は明らかに5号住居跡の上に覆うような状態で出土しており、5号住居跡床面から約35cmの高さに位置し、15号住居跡床面からも約40cmの高さに位置しているところから、これらの住居跡より新しい住居跡と判断される。ただ、住居跡の規模や形については、あまりにも残存部分が狭く、さらに調査区外に主体部が広がっているため現状では不明である。

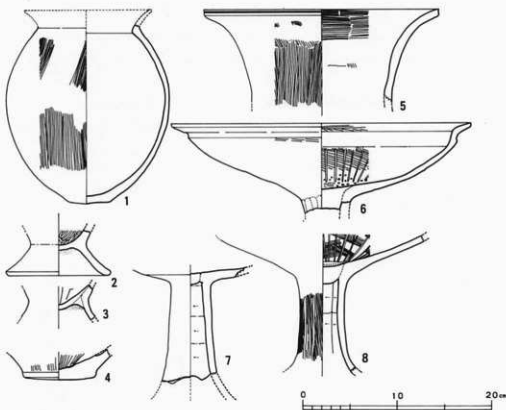
遺物(図版31-5～9、第52、53図)

1は口縁部を欠くが、「く」字に開く小形の甕である。胴部中位に最大径16.8cmを有しており、底部は僅かに凸レンズ状になる小さな平底となっている。器面調整は、外面にはきめ細かなハケを施し、その後部分的にナデ消している。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土にはあまり砂粒を含まず、焼成も良い。色調は2箇所に黒斑があるが、他は茶褐色である。

2は甕の脚台である。裾部径11.1cmを測り、内面では中央部が膨らんで砂粒の付着が著しい。器面調整は外面を全面ナデ、内面はハケ目とナデ調整を行っている。



第51図 19号住居跡実測図



第 52 図 19号住居跡出土遺物実測図

3も甕の脚である。裾を欠き、上部も無い。脚内面は砂粒が付着している。器面調整は胴部では全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は赤褐色を呈している。

4は壺の底部である。上部を欠くため全体の形は不明。底部は平底で、僅かに凸レンズ状を呈している。内面は器面の剥離が見られるが、粗いハケ目を施している。胴部外面にも同様のハケ目が施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は黄褐色を呈している。

5は壺の口縁部である。頸部は立ち上り、口縁部が大きく開いている。器面はハケ目を全面に施している。胎土はきめ細かな土で、焼成も良い。色調は褐色を呈している。

6は脚部を欠く高坏である。全体に歪んでおり、直径も33~32cmとなっている。口縁部は立ち上りが短く、大きく開いている。体部は大きく、口径に比べて浅い。器面調整は、外面は体部上位に僅かにハケ目を残し、他はナデ調整を行っている。内面は口縁部の一部と体部上位にハケ目を施し、体部ではその後へら研磨を施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黒斑が一部にあるが、黄褐色を呈している。

7は坏部上位と脚裾部を欠く高坏である。坏部下位に僅かに段を有している。器面調整は、外面では全面ナデ調整、内面の坏部はハケ目の後へら研磨、脚部はへら削りを施している。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は褐色を呈している。

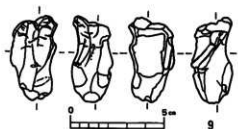
8は坏部上位と、脚裾部を欠く高坏である。坏部は大きく開き、脚は柱状を成して高い。坏部外

面はナデ調整で、内面はハケ目の後へラ研磨を行っている。脚部外面はハケ目を施した後、へラ研磨を行い、内面はへラ削りを施している。坏部と脚部の接合には粘土栓を詰めていて、坏内側では器面の剝離が著しい。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は灰褐色を呈している。

土製品

9は異様な形の土製品である。粘土を左手親指と、人指し指で擠んで振った様な土製品である。

周囲には欠けたところがなく、これで形をなしているが、用途を考えたが、今のところ不明としか言いようのない資料で8号住居跡出土23の資料と共通するようである。(中村)



第53図 19号住居跡出土土製品実測図

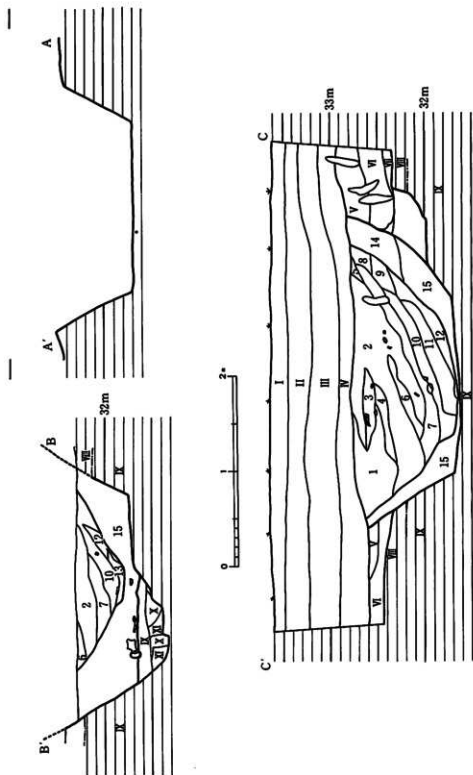
19. 溝状遺構 (図版13、15、17、第54～55図)

調査区の中央を東西に横断する形で検出され、N72°Wに主軸を向けている。この遺構については昭和56年度の第Ⅲ次調査において、その存在を明らかにしていたものであるが、今回の調査では、上部幅256cm～282cm、下部幅220cm～187cm、深さ80cmの逆台形を呈し、長さ920cmにわたって確認することができた。ただし、上部は遺構検出作業中に削っており、実際の規模は調査区東側断面によって、上部幅328cm、深さも116cmに達していたことが判る。床面はほぼ水平だが、東端より約350cmの所に高さ10cm程度の小さな段が見られる。この段の在る部分の南側壁面も、多少掘り込みが残っており、さらに下部幅も幾分広くなっているところから、溝を掘った際における担当区分が行われていたのではと思われた。

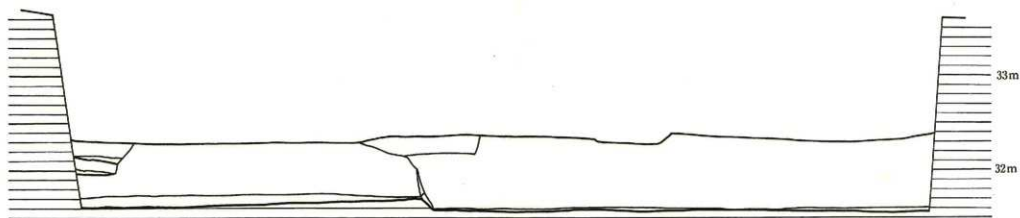
土層については2か所で断面図の作成を行った。層序については基本的には同じで、共通して番号を付している。

層序

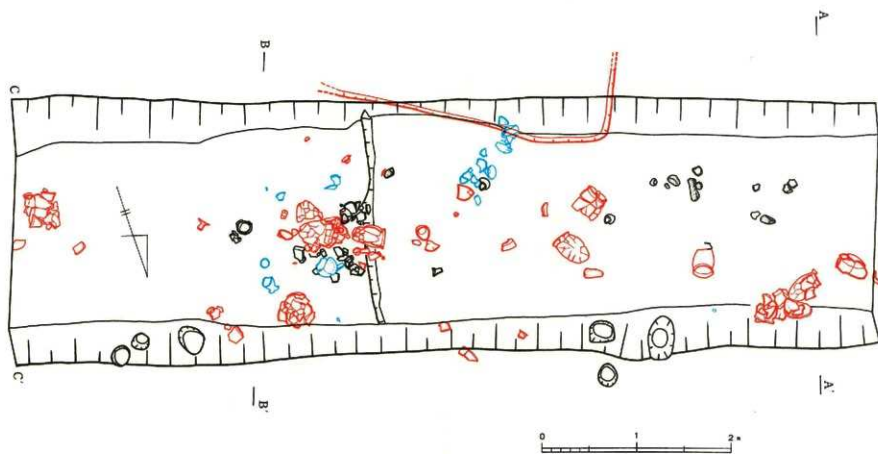
I層 耕作土 (灰色をしている)	1層 黒褐色土
II層 暗褐色土 (堅くボロボロの土)	2層 褐色土 (黄色粘土層を含む)
III層 暗褐色土 (堅く水分を多く含む)	3層 黄褐色粘土 (褐色土を多く含む)
IV層 暗褐色土 (やや堅い)	4層 褐色土 (黄褐色粘土粒を少し含む)
V層 黒褐色土 (粘性が強い)	5層 褐色土 (// を含まない)
VI層 暗褐色土 (サラサラしている)	6層 黄色粘土 (褐色土を多く含む)
VII層 黒色土 (炭化物を含む)	7層 黄色粘土 (褐色土を含む)
VIII層 暗褐色粘質土 (ニガシロ層)	8層 褐色土 (黄色粘土粒を少し含む)
IX層 黄色粘土 (地山)	9層 褐色土 (黄色粘土粒を含む)
X層 明褐色粘土 (褐色土を含む)	10層 褐色土 (//)
XI層 黄色粘土 (砂礫を含む)	11層 褐色土 (黄色粘土粒を多く含む)



第 54 图 海状造槽断面示意图



溝状遺構縦断面図



- 1期 (黒)
- 2期 (青)
- 3、4期 (赤)

第 55 図 溝状遺構平面図

12層	黄色粘土	(7層と同じ)
13層	褐色土	(炭化物・焼土を含む)
14層	褐色土	(黄色粘土粒を少し含む)
15層	褐色土	(水分を含む)

溝状遺構の構築は、層序からV層堆積後行われたことが明らかである。この時点では逆台形の断面を呈した溝であったが、その直後、両側から15層が流れ込んでいるのが確認できる。15層は、底部では10cm内外の厚みにもかかわらず、両側においては溝上面まで堆積していて、その間の層の変化は認められなかった。この点から考えると、一時期に大量の土を人為的に埋め込んだ可能性が高く、さらに13層から1層までは黄色粘土と褐色土が互層をなしており、とくに南側からの流れ込みが注目されるところである。以上のことから、15層が溝を埋めてしまった後、さらに「U」字形に掘り込み、溝として再利用していることが推察され、その後溝南側から大量の土が流れ込んだものと考えられた。溝が埋まっていく過程において、西側の6号住居跡近くでは、溝底から約70cmの高さで堅く締った層が認められた。しかし広がりとしては狭く、6号住居跡の床面とも異なっていた。道路状遺構とも考えたが、遺物が中心部に出土しているところから、性格としては結論を出せなかった。

遺物 (図版32～35、第56～67図)

層位的に4期に分けることができる。1期は溝底密着状態、2期は15層より出土したもの、3期は13層から1層の中に含まれるもの、とした。その他、溝埋没後に溝の上に置かれたものも見られたので、4期として取上げている。(中村)

1期 (図版32-1、第56、57図-12)

1は胴部下半を欠く甕で口径20cm、最大径21.7cmを測る。口縁部は内側がナデによってやや突出気味にされている。外面は右下りのタタキ目、内面は左下りのハケ目を施す。外面は一面にスガが付着し、胴部中位が最も濃い。内面にコグツキ痕が残る。

2は変胴部の破片で、おそらく脚が付くものと思われる。外面タタキ目、内面はハケ目の調整を行っている。外面全体にスガが付着し、下位ではふっ切れている。内面は汚れていない。

3は甕の口縁部片で、内外面ともハケ目を施したのちうすくナデている。スガは付着しない。

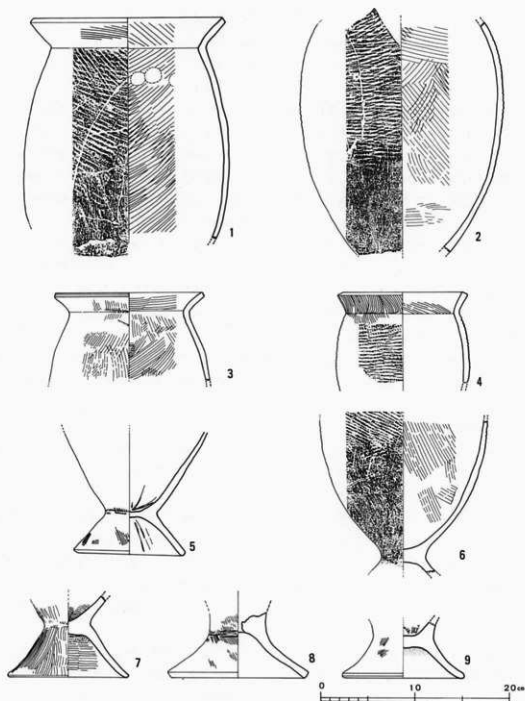
4は胴部中位以下を欠く在地系甕である。口径12.6cm、最大径14.1cmを測る。口縁部は「く」字に折れるがやや立ち気味である。器面調整は、外面胴部にタタキ目、口縁部では両面ハケ目を行っている。

5は脚台付甕の破片である。外面は使用時の火熱で赤く焼け、剝落が著しい。

6は当遺跡では大変めずらしい脚台付で外面にタタキ目を施した甕である。外面胴部下位にまでタタキ目を施したあと下位はナデ潰し中位以上にタタキ目を残している。内面は縦位あるいは斜位のハケ目を施したのちナデでほとんど潰している。スガは胴部中位に濃く付き、下位から脚部にかけてはスガがふっ切れており、その境は極めて明瞭である。内面は汚れていない。

7は砂付土器である。外面は縦位のハケ目、内面は横位のハケ目を施し、うすくナデている。外面に少しスガが付き、くびれ部あたりは赤化している。

8は脚台である。裾部径14.8cmで胴部との接点のくびれが細く、3条のタタキを残している。



第 56 図 溝状遺構出土遺物実測図

9 は砂付土器である。裾部下位に煤が付着している。

10 は壺の口縁部で体部は失われている。ほぼ垂直に口縁部が立ち上がり、急に折れて大きく開く。端部形状はわからない。内外面とも細かいハケ目で調整し、頸部に櫛描簾状文を右から左へ施している。

11は高坏で口縁部と脚台裾部を欠いている。脚部には数条の沈線をめぐらしている。

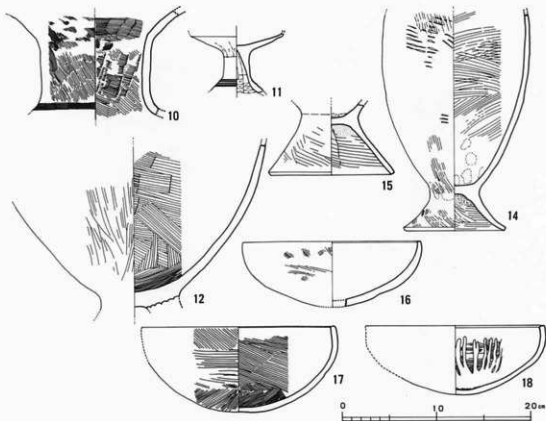
12は大型の台付鉢であろうと思われる。残念ながら口縁部と脚部が失なわれている。外面には縦位に荒くハケ目を、内面には斜位のハケ目を施している。胎土に多量の砂粒が含まれ、焼成があまり良くないので、破片の周囲はくずれ易い。ススやコゲツキの痕は見られない。

2期（図版32-2～6、57図-13～第58図-20）

13は甕で胴部以下を欠いている。口径16.6cmで、口縁部は「く」字に開いている。器面は全面ハケ目調整である。

14は脚台付の甕で口縁部を欠く。いわゆる砂付土器である。胴部はあまり膨らまず、ほっそり仕上っている。脚は高くなく平べったい。胴部中位にかすかにタタキ目を施した痕が残る。脚の裾端部から胴部下位にかけてススがふっ切れて赤く焼けた部分があり、その上位に幅約10cmでススが濃く付着し、変色をきたしている部分がめぐる。内面にはコゲツキ及び変色は見られない。

15は内外面ともハケ目を施しているが、外面はそのあとナ



第 57 図 溝状遺構出土遺物実測図

デている。砂付土器である。

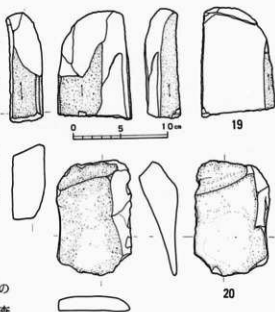
16は半分以上を欠いた鉢で、復元口径18.2cm。全体に肉厚で、口縁端部がやや内傾している。

17はほぼ完形の鉢である。19の口縁端部が内側に傾斜しているのに比べ、こちらは水平である。内外面ともハケ目を施し、そのあと外面はナデでいる。

18は半欠品の鉢である。外面はナデ、内面はハケ目を荒く施したのち、ヘラによって暗文を付けている。色調は外面が橙灰色を呈しているのに対し内面は黒色である。

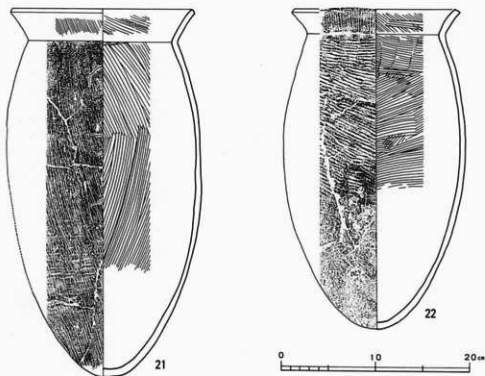
19は砂岩製の砥石である。研磨面は2面のみで、他は剥離面を残している。

20は陶石製の砥石で全面に研磨が見られる。一端の厚みが極端に薄く、このような形の砥石は第Ⅲ次調査で近江工業内第4トレンチと第5トレンチから2点出土しており、使用方法によるものと考えられる。

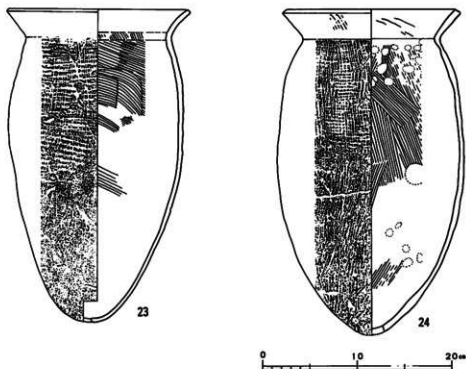


第 58 図 溝状遺構出土石器実測図

3期 (図版32-7、33、34-3、第59図-21~第63図-42)



第 59 図 溝状遺構出土遺物実測図

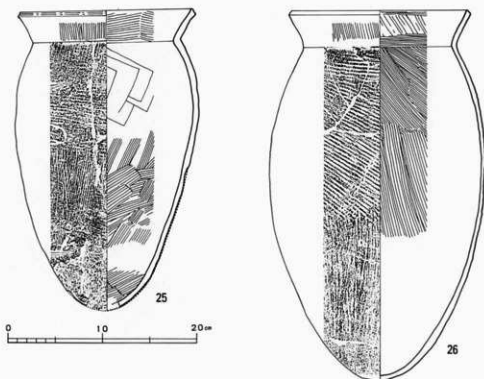


第 60 図 溝状遺構出土遺物実測図

21はほぼ完形の長胴丸底の甕である。口径19.0cm、器高38.9cm、胴部最大径20.5cmを測る。口縁部はやや外湾しながら立ち上り、端部は外側に大きく傾斜する。胴部はほとんど膨らまず、底部へ続く。外面は肩部から胴部中位にかけて、やや左下りのタタキ目を施した後、縦位のハケ目でそれを潰し、ところによってはナデている。内面は斜位のハケ目を施している。外面胴部中位に濃くススが付き、下位では煤がふっ切れている。なお、内面下位には約7.5cm幅で、コゲツキ痕が周回する。

22は黄色土層(第12層)から出土した長胴丸底の甕で、口径17.0cm、器高34.0cm、胴部最大径19.3cmを測る。内面及び外面口縁部にハケ目、外面中位以上にタタキ目を施している。外面には口縁部から胴部下位にかけてススが付着し、その下から底部にかけて幅10cm内外のススのふっ切れた部分がある。この部位は煮沸時に最も火の回りのよかったところであろう。そして、その更に下方には幅2.3cmのススの帯が、底部の頂点を中心に同心円状に周回している。この部分はあまり火があたりなかったであろう。底部の頂点径3cm程は、ほとんど火を受けていない。以上のことから先端が甕を乗せやすいように、やや凹んだ支柱をもったカマドの使用を想定させられるが、現在までのところ当遺跡からは、皿状の炉跡はいくつか検出されたが、カマドも支柱も発見されていない。

23も黄色土層(第12層)より出土した。口縁部の径が胴部最大径より若干大きくなる甕で、完形品である。内外面の調整法は21とほぼ同様で、外面にタタキ目、内面にハケ目を施している。外面のススの付き方も21と酷似しており、口縁部から胴部中位に濃く付着し、下位から底部にかけては



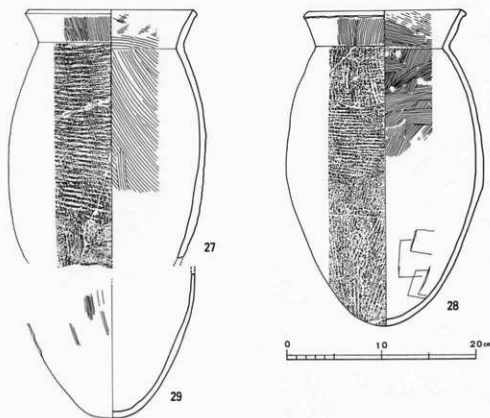
第 61 図 溝状遺構出土遺物実測図

ススがふっ切れて、さらに底部頂点に径5～8cm程のススの付着が見られる。内面はほとんど汚れていない。また、底部に径1.3cm×1.5cm程の孔が穿っており、甕として直接火にかけて使用し、その後穿孔して甕としても使用したものであろう。当遺跡における甕の原形体といえるかもしれない。

24は口縁部から底部にかけて、約半分のみ残った甕である。外面胴部上位にタタキ目を施しているが、ほとんどナデ潰し、その後荒くハケ目を施している。下位はヘラのようなものでナデ上げての調整を行っている。内面はハケ目とナデで仕上げ、指圧痕が多数残っている。ススの付着状況は、他の甕とほぼ同様で、胴部下位の煤のふっ切れた部分と対応して、内面にコゲツキ痕が見られる。

25は肩部が膨らみ、胴部最大径がかなり上の方にくる甕である。外面のタタキ目は、肩部から胴部上位にかけての狭い範囲に施しており、下位は荒くハケ目で消している。胴部下半は火を受けて赤化し、器面の剝落も顕著である。内面には幅15cm内外のコゲツキ痕が周回する。

26は美しい倒卵型をした完形の甕である。口縁端部は内側が鋭角的に尖り、やや内湾する。外面の調整は胴部上位に2方向のタタキ目を施し、その後胴部下半にはヘラ状のもので下から上へナデたような仕上げを施している。内面には2種類のハケ目原体による調整を行っている。外面には全体的にススが付着するが、特に底部に幅2cm程に濃く、同心円状に付着し、その中心には付いていない。胴部中位に最も濃くススが付着し、その下位はススがふっ切れている。ススの付き方やススのふっ切れ方は他の甕とほぼ同様である。



第 62 図 溝状遺構出土遺物実測図

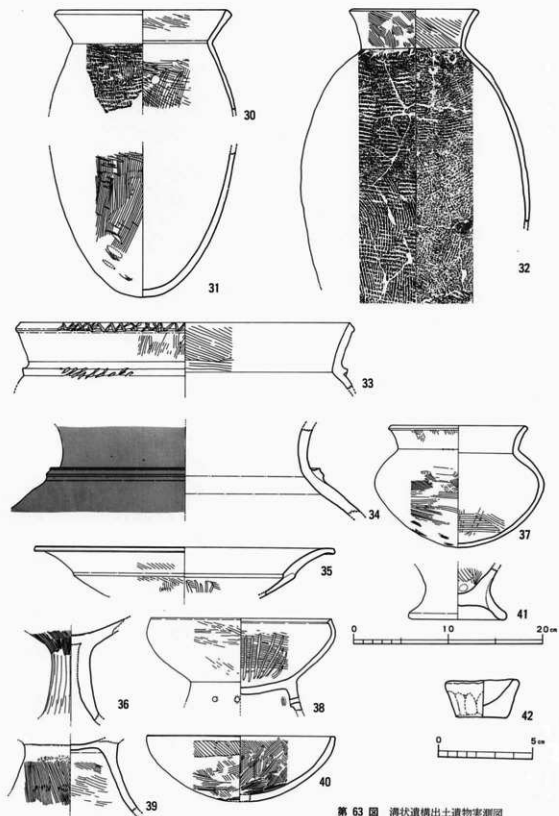
27は胴部下半を欠失する甕である。外面はタタキ目の後、ナデ潰し、さらにハケ目を施している。内面は、外面とは異なる原体によるハケ目を施して、それを軽くナデで調整を行っている。外面胴部中位にススの付着が顕著で、下位はススがふっ切れている。また半面のみに火の当る回数が多かったものと見て、広範囲にわたって器面の剥落が見られ、その部分の内面にコゲツキ痕が認められる。

28は完形の甕である。第4期の43と比べると、胴部の張り出しが大きく、器壁も厚く、重量がある。口縁端部は外側にめくれた状態のままになっており、仕上げは雑である。底部に径5cm内外の光沢のあるススが付着し、その上位に幅11cm～15cm程で煤のふっ切れた部分がある。最も強く火を受けたのであろう。また半面のみ、底部から頸部に至るまで器面の剥落や荒れが目立ち、一方向から再三火を受けたことが判る。外面に反して内面はコゲツキや変色等の汚れは見られない。専ら湯を沸すのに用いたものであろうか、あるいは、甕と併用して使われたのかもしれない。

29は長胴丸底の甕で、底部から胴部にかけて残っている。外面の荒れが著しい。

30は、甕の口縁部片である。外面はタタキ目とハケ目、内面はハケ目で仕上げている。外面にススが薄く付いている。

31は丸底甕の底部片である。内面に縦方向にコゲツキ痕が見られ、使用の際、甕を横に寝かせて



第 63 图 潯状遺構出土遺物実測図

火にかけたことが考えられる。

32は胴部下半を欠損する単純口縁の甕であるが、胴部片側にススが付着している。外面はタタキ目、ナデ、ハケ目の順に調整を施しており、タタキ目は、肩部では水平方向だが胴部下位になるに従って右下りが顕著になっていく。ハケ目は、おおよそ下から上へ引き上げている。内面は外面とは異なる原体によってハケ目を施している。

33は口径35cmを測る、大きめの甕である。肩部以下を欠くため器高等不明だが、口縁部は直口気味に開き、口唇部には刻目を施している。頸部にも断面台形の凸帯をめぐらし、その上に刻目を行っているが一部消えかかっている。器面は両面ともハケ目調整を行っている。

34は口縁部と胴部以下を欠く甕である。頸部には凸帯を1条めぐらしており、外面は全面に丹を塗っていた。

35は高坏の口縁部片で、体部内面に放射状にヘラ描き暗文を施している。

36は高坏の柱状部で、体部及び裾部を欠く。体部外面に細かいハケ目を施している。柱状部は絞り込んでやや掬っている。

37は溝状造構東側端内黄色土層から出土した完形の鉢で、器高12.9cmを測る。口縁部は外湾しながら立ち上り、端部は外側がやや突出気味となる。胴部は大きく張り出し、最大径は17.9cmを測る。外面は2種類の原体によりハケ目を施し、その後薄くナデている。内面は底部近くにハケ目を施している外は、ナデ調整を行っている。仕上げは入念で、焼成も極めて良好である。

38は脚台付鉢だが、脚の先端部が欠損している。口径19.0cm、内底までの深さ7.4cm。脚に2個対になった孔を3箇所、計6個穿っている。内面にはハケ目の後、ヘラ描きの暗文を施す。内外面共器面に光沢がある。破碎後、いくつかの破片は火を受けたらしい。

39は脚台付鉢の脚部である。内外面共ハケ目だが、内面は薄くナデている。体部底面はナデ仕上げである。二次的な火によって赤く焼けている部分もある。

40は鉢の半欠品である。外面はハケ目、ヘラ削り、ハケ目の順に調整し、内面はハケ目を施す。外面全体ススが付き、内面にはコゲツキによる変色が見られる。

41は甕の脚で、肉厚で平たい。外面にススが付き、また赤く焼けている。

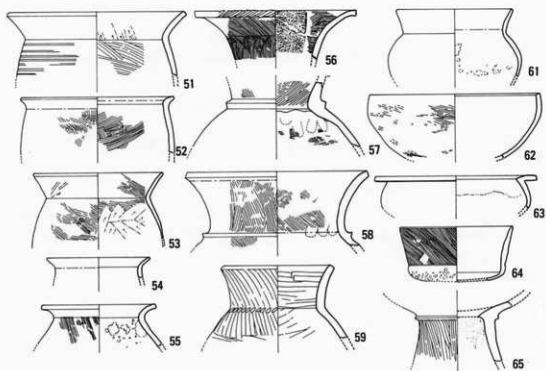
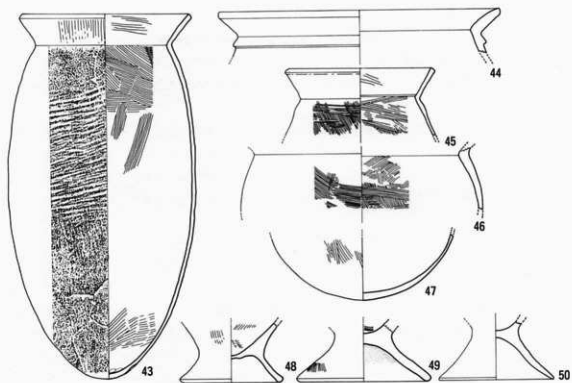
42は手捏のミニチュア土器で、鉢を模したものであろう。

4期（図版34-4～9、第64図-43～第66図-72）

43・60・66の3点は先にも述べたように溝が埋没していく過程において、堅く締った面が確認されたが、その面に置かれていたものであった。甕をみると3期の甕とほぼ同形式を保っており、時間的にはあまり開きのない時期の所産と考えられた。

他の遺物については溝埋没後のものであり、直接溝とは結びつかないが、一応ここで取り扱った。

43は完形の長胴丸底甕である。外面の肩部から胴部中位にやや左下りのタタキ目を施し、その下位は縦位のナデ調整である。内面は肩部にハケ目を施し、全体にうすくナデ仕上げている。底部に径5cm内外の光沢のあるススが付着し、その上位に幅13cm内外でススのふっ切れた部分が帯状に周回する。ススの付着状態から、一方方向からの火熱を受けることが多かったものと思われ、たとえば、炉での使用の場合、その中央に立てたのではなく、炉の端に立てて煮沸の用に共したものであ



第 64 图 沟状遺構出土遺物実測図

0 10 20 cm

ろう。外面の最も強く火の当たった部分に対応して、内面にコゲツキ痕が帯状に廻っている。

44は壺の口縁部片で口径29.6cmを測る。頸部には断面三角形の凸帯を1条めぐらしていた。

45は在地系壺の破片である。胴部は長くなり底部は丸底になると思われる。口縁部はやや内湾気味に長く伸び、口唇部では内側に僅かに摘み上げている。胴部外面にはタタキ目を施し、その後ハケ目を行っていた。内面では全面にハケ目を行っている。

46は口縁部と胴部中位以下を欠くが、壺の破片であろう。器面調整は全面にハケ目を施している。

47は器種は断定できないが、底部である。外面に若干ハケ目が見られる他はナデで調整している。外面底部に丸くススが付く。

48は壺の脚台である。脚自体は短くて大きく開いた感じがする。

49も壺の脚部である。いわゆる砂付土器で、砂粒は極めて細かい。

50も壺の脚部で、裾部は直径12.1cmを測り、脚台としては器壁が薄いようである。胴部内面には焦げつきが見られた。

51は在地系壺の破片で底部は丸底になると思われる。口径18.5cmで胴部の張り小さい。器面調整は外面にタタキ目、内面にはハケ目を施しており、口縁部内面では一部ヘラ削りを行っている。

52は口径16cmを測る壺で、口縁部は極端に短かく、「く」字形に折れている。器面調整は全面ハケ目を行っている。

53は口径13.6cmを測り、口縁部は外反しつつ「く」におれて長い。器面調整は外面を全面ハケ目、内面は口縁部でハケ目、胴部ではヘラ削りを施している。

54は口径10.8cmの小形の壺である。口縁部のみで全体の形は不明。

55は口径12cmの壺で外来系のものである。外面にはハケ目を施し、内面はナデ調整である。なお胴部内側で器面剝離が見られる。

56は口径17.1cmを測る壺の口縁部である。頸部から大きく開き、口唇部には刻目を施し、口縁部内面には縦方向に帯描波状文を描いている。このような例は第IV次調査でも遺構に伴わない遺物の中に見ることができた。器面調整は全面にハケ目を施している。

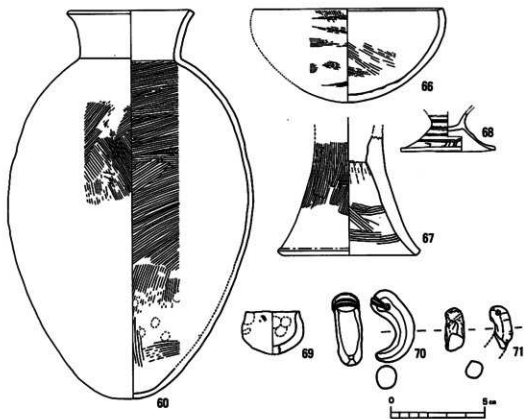
57は頸部から肩部にかけて残す壺である。口縁部は55のようになるとと思われる。頸部には三角形の貼付け凸帯をめぐらしている。頸部にはハケ目を施し、肩部内面には指頭圧痕が見られた。

58は肩部以下を欠く壺で口径19cmを測る。口縁部は外反しながら大きく開くか、頸部の直径が大きいためあまり長く見えない。頸部には三角形の貼付け凸帯をめぐらし、器面調整は全面にハケ目を施している。

59は口径11.2cmを測る壺で、胴部上位以下を欠いている。口縁部はやや直口気味に外反し短い。頸部には刻目をめぐらしている。器面は全面にヘラ研磨を行っている。

60は完形の単純口縁壺で、胴部は美しい倒卵形を呈し、底部は丸底である。外面調整はタタキ目、ハケ目、ナデの順序で行われているが、タタキ目は、ほんの数箇所にその痕跡が残るところまで潰されている。内面は左下りのハケ目を施しており、胴部下位には指頭痕が顕著に残る。

61は口径12.1cmで口縁部は僅かに外反しつつ開いている。胴部は最大径14.2cmを中位に有している。底部は欠いているため不明、器面は全面ナデ調整で、内面では器面剝離が見られる。



第 65 図 溝状遺構出土遺物実測図

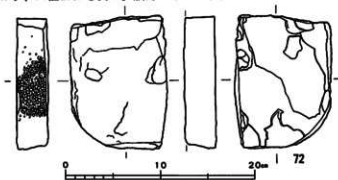
62は底部を欠く鉢で口径18cmを測る。口縁部はやや内向しており、最大径18.5cmをやや上位に有している。外面にハケ目、内面をナデ調整を行っている。

63は口縁部を「逆L」字形に折れる鉢である。底部を欠くため器高は不明だが最大径17.2cmを口唇部で測ることができた。

64は口縁部が長く直線的に開いており、口径12cmを測る。胴部は小さく、偏平となっている。

65は脚台付鉢である。上部と脚裾部を欠いているが鉢と脚との接合部には三角形の凸帯をめぐらしている。

66は半欠品の鉢で復元口径19cm、器高9.8cm。内外面ともハケ目をナデ消している。内底の器面の剝離が顕著である。欠落している割れ口に沿うようにスズが付着し、赤



第 66 図 溝状遺構出土石器実測図

化しており、一方向から火を受ける様にして使用されたものであろう。

67は器台である。上部を欠くため器高は不明であるが、裾部では直径15.1cmを測る。くびれ部内面では稜を形成し、器面調整は外面にハケ目、内面はナデとハケ目を施している。

68は脚台のみで上部を欠いた資料である。裾部は大きく開き、胴部とのくびれ部分には沈線文を4条めぐらし、その直下には2本の小波状文をめぐらしている。さらに中位にも2本の沈線をめぐらしている。さらに直下にも2本の沈線をめぐらしている。最下段の沈線は右廻りにめぐり、一周したところから下部に向っている。またその左側にも同じ方向で沈線が3本施されている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は白黄色を呈している。

69は手捏土器である。口縁部は短く、僅かに外反している。口径は2.8cm、器高は2.3cm程度になる。

70は丁子頭をもつ土製勾玉である。他の土製勾玉に比べると丁寧な造りである。頭部は大きく下端に向って細くなっている。

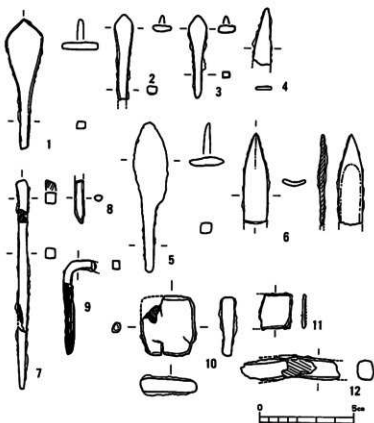
71は土製勾玉である。先端を欠いているが、小形の勾玉である。粗成のため頭が潰れたようになり孔も斜めに穿っている。胎土には砂粒を含み、焼成も良くない。色調は赤褐色を呈している。

72は上面に研磨面を有し、側面には敲打痕を残している。砥石と敲打器の二種類の使用を行っている石器である。

鉄器（図版35、第67図）

溝状遺構から出土したもので、10が底から出土し、9が溝埋没後土師器に伴なっている。他は全て第3期のものである。

1～3は鉄鏃である。1は茎先端を欠くが現長6.9cm、重さ11.5gを測る。2も茎先端を欠き現長4.6cm、重さ2.8gである。3は長さ4.4cm、重さ2.9gである。4は先端部のみで現長3cm、重さ1.3gの刀子であろう。5は鉄鏃で長さ8cm、重さ8.9gの完形品である。6は鏃で現長4.7cm、重さ4.2gで側面の磨耗が著しい。7は鉄鏃の茎で現長11.1cm、重さ8gである。8も茎で現長2.3cm、重さ0.6gである。9は

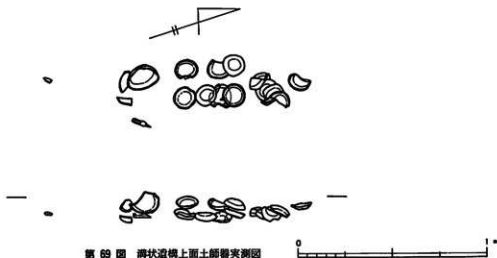
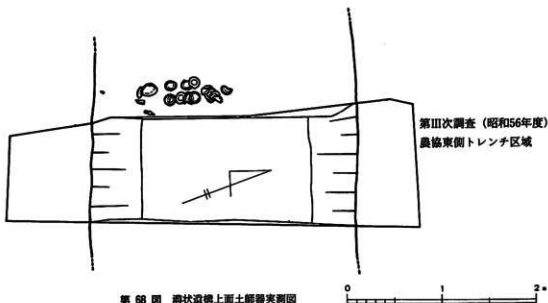


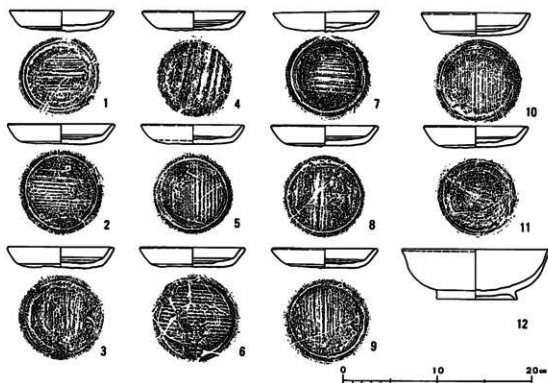
第67図 溝状遺構出土鉄器実測図

釘で頭部を「L」字状に曲げている。先端には木質を残している。長さ5cm、重さ2.4gである。10は四角形をした鉄製品で長さ3.2cm、重さ16.5gを測る。用途不明。11は手鎌であろう。長さ1.8cm、重さ1.2gである。12は棒状を呈した鉄器で現長5.2cm、重さ10.3gを測る。(坂本)

20. 溝状遺構上面土師器(祭祀遺構)(図版18、第68、69図)

溝状遺構の上に土師器皿が並べられた状態で出土した。ここは昭和56年6月第三次調査の際、トレンチを入れて溝状遺構の存在を明らかにしたが、このトレンチに隣接する形で土師器が出土した。遺物は明らかに溝状遺構埋没後のもので、昭和56年の際にも托が出土しており、今回出土した遺物





第 70 図 溝状遺構上面出土遺物実測図

との関連も十分考えられる。出土状況は、高台付椀を南端に置き、北に向って皿を西側に 3 枚、東側に 4 枚を置き、さらに先に 4 枚を重ねるようにしてしていた。このような出土状況は昭和 56 年 8 月大道小学校改築工事に伴う発掘調査を実施した際にも見ることができた。ここは、今回調査した地点から東へ僅か約 300m しか離れておらず、須恵器壺と土師器皿 5 枚を 2 列に並べていたのである。

溝の上に位置しているため、溝埋土第 7 層の上面に乗った形で検出され、別段遺構らしい施設は検出されなかった。(中村)

遺物 (図版 36-1~12、第 70 図)

1 は完形の小皿で、口径 11cm、器高 2.2cm。内外面共に、回転させてヨコナデを施し、内底は指頭によってナデ、外面底部にヘラ切りを施した痕と強く押さえた板目が残る。

2 は完形の小皿。口径 11.4cm、器高 2.2cm。で底部に板目を残している。

3 は完形の小皿。口径 11.3cm、器高 2.3cm。底部に板目を残している。

4 は完形の小皿。口径 10.9cm、器高 2.0cm。底部に板目を残している。

5 は完形の小皿。口径 10.9cm、器高 2.05cm。底部に板目を残している。

6 は 3 片に割れていたが、1 個体となったもので、口径 11.2cm、器高 2.1cm を測る。底部に板目を残す。

7は口径11.2cm、器高2.1cmを測る。底部には板目を残している。

8は完形の小皿で、口径11.4cm、器高2.1cmを測る。調整その他は他と同様である。

9は4片に割れていたもので、口径11.6cm、器高2.1cmを測る。底部に板目が残っている。

10は完形の小皿。口径11.6cm、器高2.4cm。底部に板目を残している。

11は完形の小皿。口径11.6cm、器高2.3cm。底部の板目は薄い。

12は黒色土器の高台付碗である。口径15.7cm、器高5.3cmを測る。口縁部は膨らみをもちながら開いており、口唇部でやや肉厚になる。高台は高さ9mm、直径8.5cmを測る。内外面をヘラ研磨している。(坂本)

註1 「方保田東原遺跡」山鹿市立博物館調査報告書第2集 1982

註2 「方保田東原遺跡2」山鹿市立博物館調査報告書第3・4集 1984

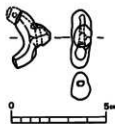
21. 溝状遺構東端部遺構 (図版19、36-13、第71、72図)

この遺構は溝状遺構の東端部南側に存在しており、北側を溝状遺構によって切られ、東側は調査区域外へと伸びている。また9号住居跡を切っていて、残存部分が極めて狭かった。そのため遺構の性格については断定できなかった。現長は西側が70cm、南側が45cmを測り、斜め方向にステップ状の段が見られた。遺物は数点出土したが、殆ど細片のため図化したのは1点であった。

1は土製の手持勾玉である。背につまみ状の突起を有し、さらに本体と平行して長径3.8mm、短径2.2mmの扁平な孔を穿っていて、あたかも紐の如き付きかたである。(中村)



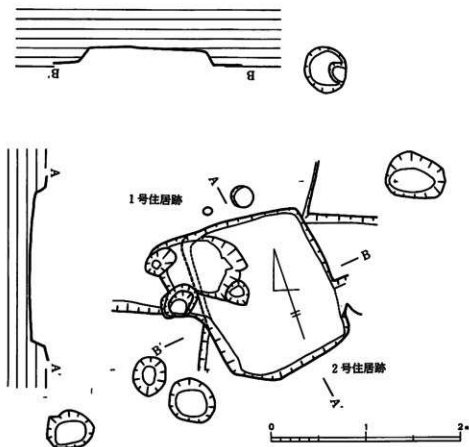
第71図 溝状遺構東端部遺構実測図



第72図 溝状遺構東端部出土遺物実測図

22. 1号竪穴 (図版20-1、2、第73図)

調査区域の南西部にあたり、1・2号住居跡の切合部分の下から検出された遺構である。上部の住居跡の床面まで掘り下げた段階で初めて確認されたもので、明らかに住居跡より古いものと判断できる。主軸はN5°Wとほぼ南北に向けており、長軸180cm、短軸142cmとやや長方形に近づいている。北西コーナーでは、張り出した様にピットが掘られている。また、中央部近くの柱穴は明らかに2号住居跡の主柱穴であった。床面は比較的堅いが、焼土も無く、炉跡も見られないところから、住居跡とは考えられなかった。さらに、これを埋葬施設と考えるにも遺構の残りが浅過ぎ、ま



第 73 図 1号竪穴実測図

た特別に掘り込んだ痕も見られず、苦慮する遺構である。

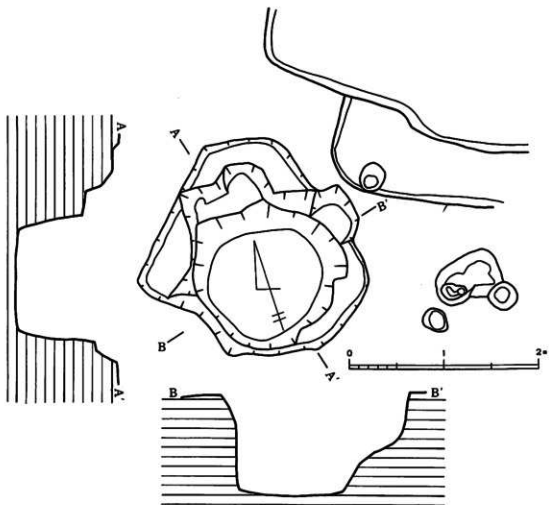
23. 2号竪穴 (図版20-3、第74図)

調査区南端に位置し、2号住居跡の東隣りにあたる。上部は不整形だが、下は直径約120cm程度の円形をなし、深さも100cmに達している。内部からは遺物の出土が見られなかったが、竪穴の上面に、焼土と土師器片が散在していた。これは明らかに埋没後のもので、時期としてはこれより古くなるものと推察された。用途としては貯蔵穴の可能性が強いが他に例がなく断定しかねている。

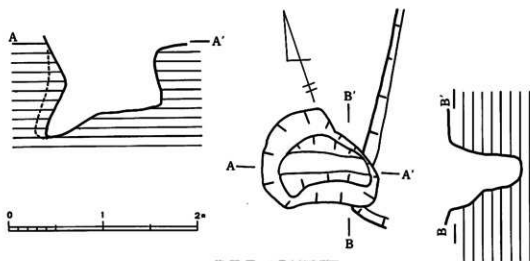
24. 1号土壌 (第75図)

調査区南部に位置し、1号住居跡と3号住居跡との間に存在している。層位的には3号住居跡より下層に掘り込んでいた。上部は不整形で、長径124cm、短径100cmとなり、下部では長さ98cm、幅21cmの長方形の掘り込みとなっていて、最深107cmを測った。土壌墓と考えられる。

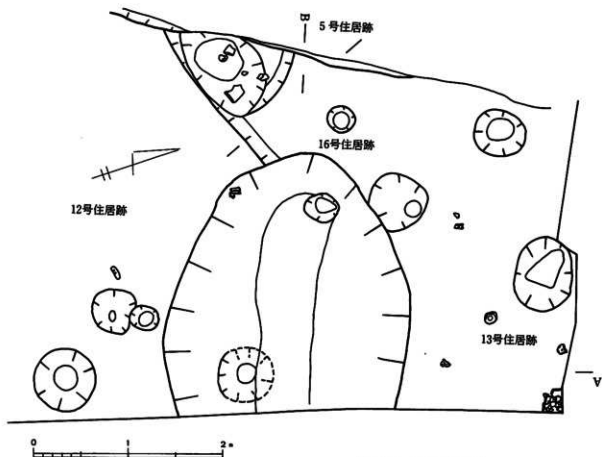
遺物の出土は無かった。



第 74 图 2号竖穴实测图



第 75 图 1号土坑实测图



第 76 図 2号土坑実測図

25. 2号土坑 (第76図)

調査区北東部に位置し、16号住居跡を切り、12・13号住居跡も合せて切っている。土坑東端は調査区域外に伸びるため、全体の規模は不明であるが、現長は272cm、幅260cmを測る。上部ではこのように楕円形をしているが、下部においては現長230cm、幅57cmを測り、深さは107cmであった。撚鉢状を呈したこの土坑については墓になる可能性が高い。遺物の出土は見られなかった。

26. その他の遺物 (図版37-1~7、第77、79~81図)

ここに取り上げた遺物は遺構の外側に存在していたもので、出土地点の明確なものに限っている。

1は1号住居跡東側1mの地点から出土した土師器である。口縁部は短く、外反しながら大きく開いているため最大径25cmを口唇部に有している。胴部の張り小さく直線的に底部へと向う。

器面調整は胴部外面はハケ目、内面はヘラ削り。口縁部は全面ナデ調整で、内面に一部ハケ目を残している。頸部内面はヘラ削りのため明瞭な稜線を残している。

2も同じく1号住居跡東側から出土した土師器である。口縁部は大きく開き短かい。器壁も全体

に厚手で胴部内面にヘラ削りを行い、他は全てナデ調整である。

3は1号住居跡北側1mの地点から出土した脚付鉢である。脚部は欠いているが最大径21.7cmを口縁部に有している。内外面ともナデ調整で、外面に若干ハケ目を残している。内面は極めて丁寧に仕上げている。

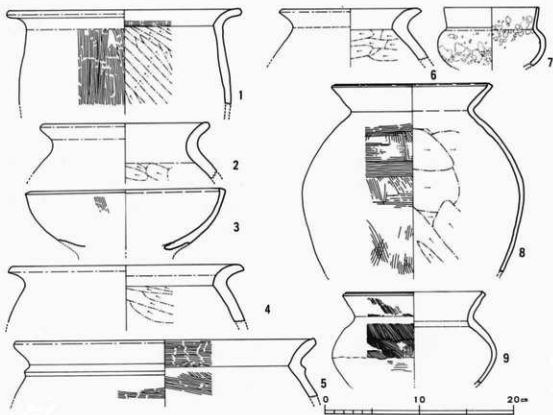
5は弥生後期の甕である。口縁部は「く」字に開き、頸部直下に三角形の貼付凸帯をめぐらしている。口径は31.4cmを測り、最大径は胴部に有している。器面調整ハケ目を主として行っている。

4-6は2号住居跡東側から出土したものである。4と6は土師器で共に口縁部が短かく、大きく外反している。器面調整も外面はナデ、内面はヘラ削りを行っている。

7は2号住居跡と4号住居跡の間から出土したもので、4-6が出土した地点のやや北寄りのところであった。口縁部は直口し、胴部が大きく張った鉢である。口径10cm、最大径11.4cmで器面剝離が著しい。

8は6号住居跡東側から出土した外来系甕である。口縁部は内湾気味に「く」字に開き、口唇部内側を摘み上げている。胴部は中位よりやや上方に最大径23.5cmを有している。胴部外面にはハケ目、内面にヘラ削りを行っていて、ススの付着は見られなかった。

9は溝状遺構の北側より出土した鉢である。口縁部が外反気味に開き、胴部は中位で最大径17.4cmを有している。外面胴部に目の細かいハケ目を施し、その上にハケ目原体の端部を押さえつけて



第 77 図 その他の遺物実測図

水平方向に断続的な沈線となし、これを2条施している。また胴部下半はハケ目をナデ消しており、その境目は稜をなす。内面はナデ調整である。外面にうすくススが付着する。

10～12は7号住居跡と8号住居跡の間から出土している。いずれも甕で口縁部や底部を欠いている。10は脚台を有し、器面はハケ目を行っている。外面にはススの付着が見られる。11は上げ底で外面にハケ目、内面にはへら削りを行っている。12は外来系甕でハケ目と内面へら削りを行っている。

土器捨て場（図版21-1、第78図）

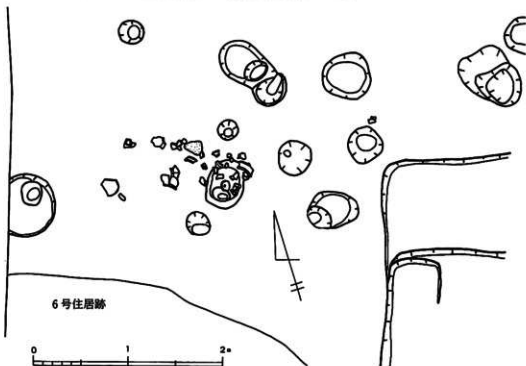
5号住居跡と6号住居跡の間に散在する形で土器が見られた。遺構としてはピットが数個見られるが、列をなすような配置にはなっておらず、また土器の周りに掘り込みがみられる様な状態ではなかった。しかし、土器溜めとまでは言えないにしろ意識的に捨てていると考えられたのでここに取り上げた。

出土した遺物の殆どが破損しており、広がりとしても140cm×60cm程度のものであった。

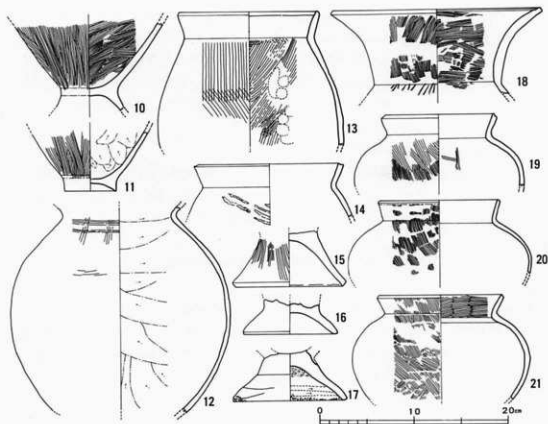
遺物（13・21・26・36）

甕（13・17・26）と甕（18）と鉢（19・21）と高坏（36）が見られる。

13は口縁部が短く外反気味に立ち上がり、口径14.5cmを測る。胴部は長胴だが底部を欠いているため器高は不明。最大径19.4cmをほぼ中位に有している。器面調整は口縁部はナデ調整、胴部ではハケ目を行っており、胴部内面では指頭圧痕を残している。



第78図 土器捨て場実測図



第 79 図 その他の遺物実測図

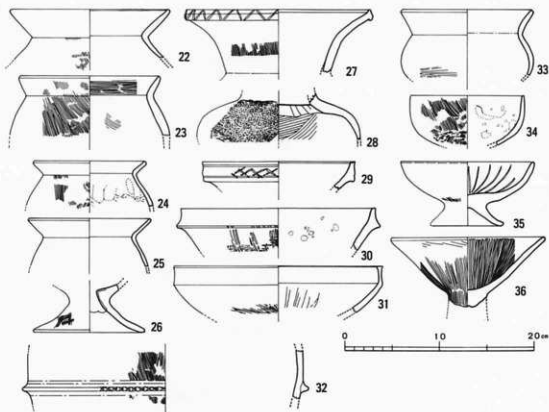
14は在地系長胴甕である。底部は欠いているため脚台を有するが丸底かは不明。口縁部は内湾気味に開き、口唇部では僅かに凹んだように調整している。口径は15.7cmを測る。胴部外面にはタタキ目を行っている。

15～17は甕の脚台である。18は肩部以下を欠く壺である。頸部から大きく開いた口縁部は口径22cmを測る。口唇部は平坦になり、内側では僅かに凹んで一条めぐっている。頸部にはヘラによる刻目が条痕のように切られているが、他は全てハケ目を施している。

19～21は鉢である。口縁部は短かく直口気味に僅かに開いており、胴部が大きく張り出している。

19は口径10.4cm、最大径18cmを測る。器面調整はハケ目とナデによっている。20は口径12.4cm、最大径19.4cmを測る。器面は外面にハケ目、内面は全面ナデ調整を行っている。21は口径13cm、最大径18.8cmを測る。器面調整は口縁部の両面と胴部外面にハケ目、胴部内面をナデ調整を行っている。36は特異な形の高坏である。坏部が脚台部か迷うような資料で、ここでは坏部と考えた。直線的に口縁部に続き、口縁部と体部との接点が見られなかった。器面調整は外面にハケ目、内面にはヘラ研磨を施しており、内面を主として調整している点から脚台ではないと判断したのである。

22～25は溝状遺構の周辺から出土している甕であるが、外来系の甕が主である。26は4号住居跡南側から出土した壺である。口縁部が大きく開き、口唇部には連続三角文の刻目を施している。28



第 80 図 その他の遺物実測図

は溝状遺構周辺から出土した肩部のみの壺の破片である。肩は大きく張るが、頸部以上を欠くため全体の形は不明。肩部には粗末な波状文と刺突文を施している。内面には粗いハケ目を施し、胎土には砂粒を含んでいる。

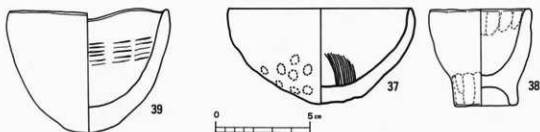
29・30も溝状遺構周辺から出土した壺の破片である。共に口縁部で29は刻目による斜格子文を施している。30は刻目のみを施し、頸部近くではタタキ目を残している。

31は11号住居跡北側から出土している。直口する口縁部をもつ高坏で、口唇部は平坦となっている。32は溝状遺構周辺からの出土で壺の胴部である。中位には凸帯を1条めぐらし、刻目を施していた。33～35も同じく溝状遺構周辺出土の鉢である。とくに35は溝状遺構埋設後のもので内面には放射状のヘラ描き暗文を施している。

37は5号住居跡南側から出土した小形の鉢である。口縁部はやや内湾気味に直口し、胴部は直線的で小さな平底となっている。器面調整は口縁部では両面ナデ調整。胴部は外面に指頭圧痕、内面にハケ目を施している。

38は5号住居跡東側から出土した鉢のミニチュアである。口縁部は直口し、胴部の張りが小さくなっている。底部には脚台が高台状に付いていて、器壁も全体的に厚手である。口径5.4cm、器高5.1cmを測る。

39は18号住居跡北側から出土したミニチュアの鉢である。口縁部は不整形で、僅かに波状を呈し



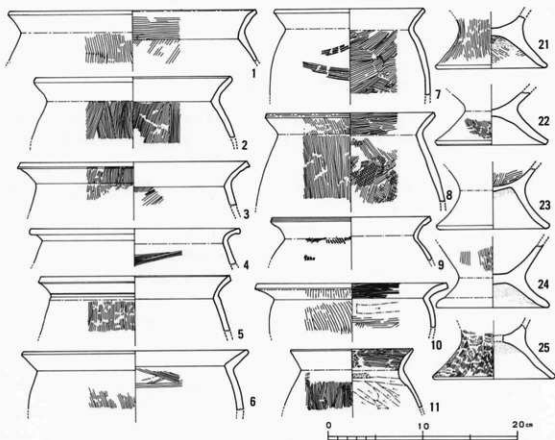
第 81 図 ミニチュア土器実測図

ている。底部は小さく、凸レンズ状をしている。器面調整は口縁部は両面ヨコナデ、胴部中位外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目を行っている。

27. 遺構に伴わない遺物 (図版37-8~11、38、39、第82~93図)

甕 (1~27) は在地系が殆どで僅かに外来系として16・18が見られる。

1 は口縁部が外反しつ「く」字に開き、口唇部内側を僅かに摘み上げている。口径は26cmを測り、



第 82 図 遺構に伴わない遺物実測図

器面調整はハケ目を行っている。

2は口縁部が外反しつつ開いており、口唇部内側を積み上げている。口径20.6cmを測り、口縁部は全面ナデ、胴部はハケ目を行っている。3は口径24cmを測り、口唇部下端を積み出している。口縁部外面にハケ目を施し、内面はナデている。胴部は両面ともハケ目である。4は口縁部が大きく反り返り、口唇部も丸味をもっている。口径は22cmである。5は口径20cmで口唇部内側が山形になっており、頸部においても浅い凹線をめぐらしたようにしている。胴部外面にハケ目を施し、他はナデ仕上げである。6は口縁部が直線的に「く」字に折れ、口唇部は丸味をもっている。頸部内面には明瞭な稜線を残している。口径23.6cmを測り、胴部にはハケ目を残している。

7は口縁部が僅かに外反し口径15.8cmを測る。胴部の張りは小さく、頸部もゆるやかな曲線を描いている。胴部内面を中心にハケ目を行っている。8も僅かに外反する口縁部をもち、口唇部は浅く凹んでいる。器面全面にハケ目調整を行っている。口径は17.8cmである。9は口唇部近くが肉厚となり、端部は凹線をめぐらしている。口径16.6cmである。10は鉢の可能性の残る資料であるが、壺としてここで取り扱った。口縁部は「L」字形に外反しつつ開いており、口径20cmを測る。器面には全面にハケ目を行っていた。

11は口径13cmを測り、口縁部は内側においては曲線を描きながら先端へと向っている。口縁部内面と胴部外面においてハケ目、胴部内面においてはヘラケズリを行っている。

12は口径25cmを測り、口縁部は短かく外反し頸部には三角形の貼付凸帯をめぐらしている。器面にはハケ目を施しており、形式的には古い壺である。

13は内面に丹を塗った壺である。口縁部は外反し、口径22.6cmを測る。頸部は鋭く折れ胴部の張りが小さい。14は口径13.8cmで口縁部は外反し、頸部もゆるやかな曲線を描いている。器面調整は口縁部はナデ、胴部はハケ目を行っている。15は口縁部が僅かに反り返り「く」字に折れて短い。胴部は直線的で長胴になるものと思われる。器面調整は全面にハケ目を行っているが、胴部中位に僅かにタタキ目を残している。口径は15.6cmを測る。

16は外來系壺で口径13cmを測る。胴部は倒卵形になり、最大径は胴部中位に有し17cmを測る。口縁部は内湾気味に開いており、全面ナデ調整である。胴部においては外面をハケ目、内面はヘラ削りを行い、外面においてはススの付着が著しい。

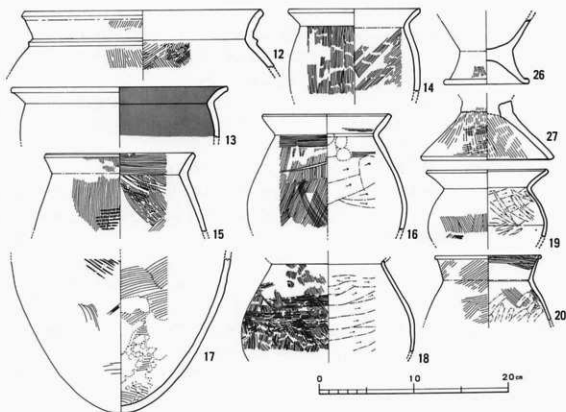
17は底部であるが、壺か壺かの判断に迷うところである。外面の一部にはタタキ目を残し、内面にはハケ目を行っている。また内面では器面剝離も見られる。

18も外來系壺で口縁部と底部を欠いている。胴部にはヘラ描きによる波状文を有し、全面にハケ目を施している。しかし一部ではタタキ目を残していた。内面はヘラ削りを行っていた。

19は口径12.5cmの比較的小形の壺である。口縁部は胴部に比べると長く直線的に伸びている。口唇部内側は積み上げている。胴部中位にハケ目を有し、内面はヘラ削りであった。

20は口縁部が直口気味に開き、口唇部は丸味を有していた。胴部は長胴となり、外面にはハケ目、内面にはハケ目とヘラ削りを行っている。

21～27は脚台部で内側に砂粒が付着しているもの（21・23～25）とそうでないもの（22・26・27）とに分けることができる。



第 83 図 遺構に伴わない遺物実測図

壺 (28~73)

28は口径22.4cmを測り、口唇部内側に浅い凹線をめぐらしている。器面調整は全面にハケ目を行っている。29は口径11.7cmで、口唇部内側に円形貼文を2個ずつ8箇所に配している。器面はナデ調整だが、全面にススの付着が見られる。

30は口径16cmを測る小さな破片であるが、口唇部内側には刺突文を口唇部に沿って列状に配している。

31は口縁部から頸部にかけての破片で口径22cmを測る。頸部には刻目を2列にめぐらしている。器面調整は全面ハケ目を行っている。

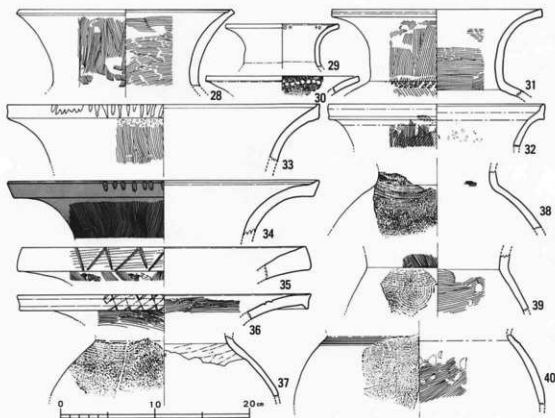
32~36は口縁部が大きく開き、口唇部において肥厚する壺である。

32は口縁部が複合口縁気味に立ち上がっていて口径22.8cmを測る。外面にはハケ目を行い、内面はナデ調整だが、器面剥離が見られる。

33は口径33cmを測り、口唇部には粗い刻目を行っている。器面は外面にハケ目、内面をナデ調整しているが、外面では器面剥離が著しい。

34は外面に丹を塗っていて、口縁部が僅かに立ち上がっている。口径32.8cmで、口唇部外面には粗い刻目を施している。外面にハケ目を行い、内面にはナデ調整である。

35も口唇部に連続山形に刻目を施している。口径は30cmである。



第 84 図 遺構に伴わない遺物実測図

36は口径31.1cmを測り、口唇部には斜格子状の刻目を行い、内側には2個の竹管文を配していた。

37～44は頸部および肩部に櫛描文を有している甕である。いずれも口縁部と胴部中位以下を欠いているため、その大きさについては不明。

37は頸部に僅かに小波状気味の横線を描き、そこから直下に伸びる櫛描文を描いている。内面はへら削りである。38も頸部に横線をめぐらし、直下には不規則な波状文をめぐらしている。

39は頸部に横線文、その下に接するように重弧文を描いている。

40は横線文と直下に不規則な小波状文をめぐらしている。39、40共に内面で器面の剝離が見られる。41は肩部に波状文をめぐらしている。42は上下2段にわたり横線文をめぐらしている。

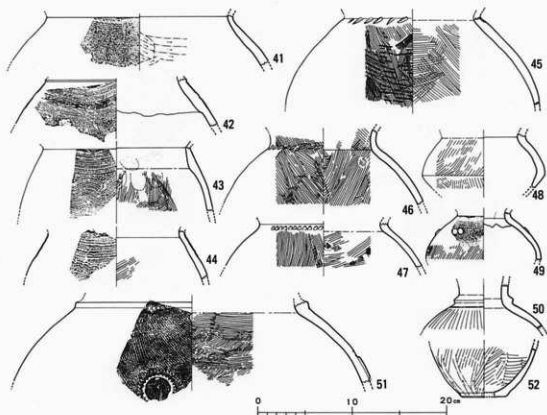
43は横線文の直下に櫛の両端を軸にして反転させる様にして波状文を描いている。

44も頸部に粗い横線文をめぐらし、直下には櫛の中心を軸に反転させた波状文を描いていた。

45～47は頸部に刻目を行っていて、器面調整は45の外面にタタキ目を残すのみで、他の面は全てハケ目を行っている。

48～50は比較的小形の甕である。49は肩部に円形貼文2個を6箇所有しており、あわせて小さな櫛による小波状文をめぐらしていた。

50は長頸甕になろう。頸部には三角形の貼付凸帯が一条めぐらされている。



第 85 図 道構に伴わない遺物実測図

51は大形の壺で、頸部には三角形の貼付凸帯をめぐらし、直下に小さな竹管文を配している。胴部中位にも直径2.7cmの円形貼文を有し、周囲には頸部と同じ竹管文を2重にめぐらしている。

52は底部である。上位を欠くため器形は不明。

53は最大径42.2cmを測る。胴部には2本の貼付凸帯をめぐらし、凸帯には刻目も残っている。

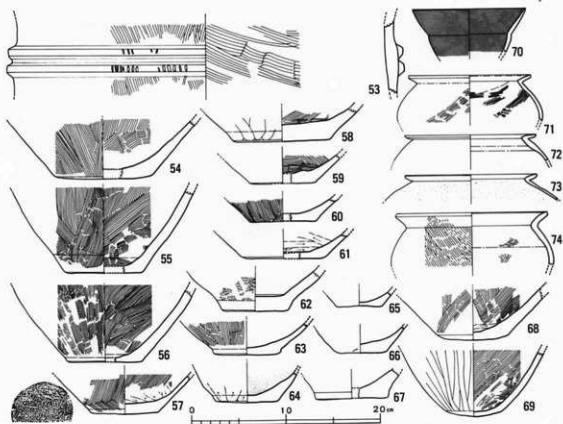
54～67は底部である。全て平底で、62・63が僅かに隆起した形となっている。57では底部にまでハケ目を丁寧に行っていた。また68・69が丸底気味の平底と言える。

70は全面に丹を施した埴である。口径12cmで器面には全てヘラ研磨を行っている。

71～73は短頸壺である。いずれも口縁部が鋭く折れて短かく、胴部の張りが極めて大きくなる。これらは底部を欠くため器高等不明である。71は口唇部内側が僅かに立ち上がっており、口径12.8cmを測る。器面調整は一部にハケ目を残すが、基本的にはナデ調整を行っている。72も口唇部が上に向って立ち上がろうとしている。口径14cmを測る。73も口径14cmを測り、胎土に多くの砂粒を含んでいる。

74は鉢である。口縁部を「く」字に開き、口径16cm、最大径17.3cmを胴部中位に有している。外面にはハケ目を行っている。

75～79は高坏である。75は口縁部を内向気味に立ち上り、口径26.8cmを測る。76は坏部が浅く、



第 86 図 遺構に伴わない遺物実測図

口縁部との間に立ち上がりが見られる。口径は34cmになる。77にも同じく立ち上がりが見られ口径28.6cmになる。

78は脚部のみで、柱状部から裾部にかけては内湾気味に開き、中位には2個の円孔を穿っている。坏部との接合はソケット状に差し込むようになっている。79は坏部と脚部の接合部分である。

80は小形丸底埴で口径8.5cm、器高は約5.2cm程高になるう。

81～104は鉢であるが、大まかに2種類見ることができる。

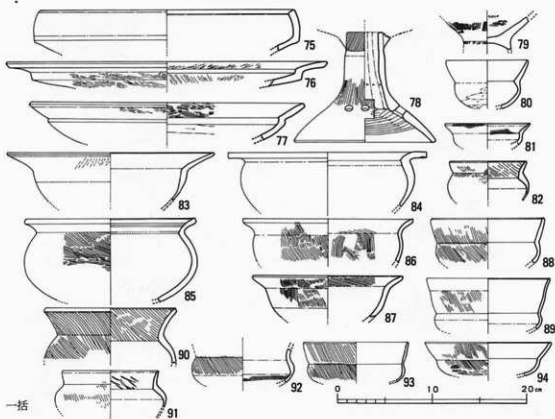
81～94は口縁部と胴部が明確に分れている鉢である。

81は小形で口径9cmを測る。口縁部は「く」字に折れ、内湾しつつ口唇部へと向っている。器面の一部に丹が認められる。

82は口縁部が外反しつつ直口気味に開いており、口径8cm、最大径8.6cmを胴部に有している小形の鉢である。

83は口縁部が最も大きく、「く」字に折れて直線的に口唇部へと開いている。胴部は小さく浅い。最大径は22cmとなっている。84は口縁部が「逆L」字状に折れ、口縁部に最大径21cmを有している。

85も口縁部が「逆L」字状になっているが、胴部の張り方が84に比べ大きく、最大径18.4cmを胴部中位に有し、口径は17.8cmになっている。86は口縁部に最大径18cmを有している。口縁部は外反し



第 87 図 遺構に伴わない遺物実測図

つつ「く」字に折れ、胴部の張りが小さい。87も口縁部に最大径16cmを有し、胴部は小さく浅い。胴部外面に僅かに稜線を残している。

88は口縁部が胴部より長く、直口するタイプである。口径12cmが最大径となっていて胴部は浅い。

89も口縁部に最大径を有し13cmを測り、胴部に比べて極端に長くなっている。90は口縁部と胴部の径が等しく14cmを測る。口縁部は外反しながら「く」字に折れ、胴部の張りも大きい。

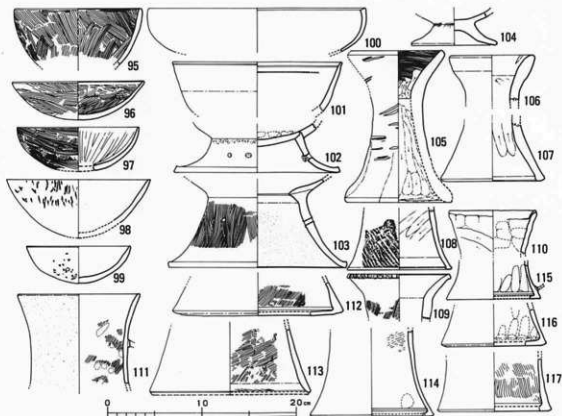
91は口縁部が直口し口径10cmを測る。胴部の張りは大きく最大径11.8cmを中位に有している。

92は胴部のみで最大径等不明だが、内部に丹を残している。93は口縁部が長く、直口するタイプで最大径12cmを口縁部に有している。94は口縁部が大きく開き、最大径13.4cmを口縁部に有している。胴部は浅くて小さい。

95～103は口縁部と胴部の区別がつかない鉢である。また最大径も口縁部に有するものが主である。

95は口縁部は直口気味に開き、最大径13.6cmを有している。胴部は直線的で張りが少なく、底部は欠いているが丸底になろう。器面にはハケ目を全面に行っている。

96は口径に比べ器高が低い鉢である。口径は14cm、器高4cmで口が大きく開いた形をとっていて、全面にハケ目を行っている。97は口径13cmを測り、器高は5cm程度になろう。外面にはハケ目、内面はナデ調整である。98は口縁部が直線的に大きく開き最大径15.3cmを有している。器面は全面ナデ調整だが、外面には粘土のシワが多く見られた。99は最大径11cmを口縁部に有し、器高4cmを測



第 88 図 遺構に伴わない遺物実測図

る。外面には器面剥離が見られる。100は口縁部が直口気味で胴部は浅い。そのため口径は23cmで器高は7cm程度になろう。101は口縁部に対し器高が比較的高くなっている。口径18cmで口唇部近くでは浅い沈線がめぐっている。102は脚付鉢の脚部である。裾部が大きく直径17.7cmを測り、端部は僅かに擠み上げている。中位には2個の円孔を3箇所に通っていた。103も同じく脚付鉢である。これは裾部径18.6cmで、胴部との接合点まで7.4cmを測り、102に比べると高くなっている。中位には2個の円孔を3箇所に通っていた。104も小形の脚付鉢で裾部径9cmを測る。

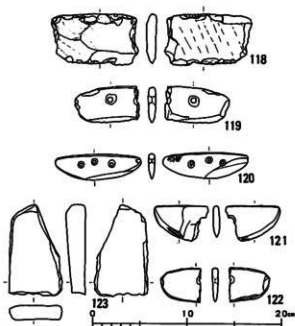
105～109までは器台である。105は器高16cmで中位にくびれを有している。器壁は厚く外面にはタキ目を残して、内面はハケ目とヘラ削りを行っている。106は口縁部のみで、107は脚部のみである。108は外面にタキ目を行い、内面はヘラ削りで、109は口唇部に刻目を施している。

110は手捏土器で指の圧痕が残されている。器種としては器台と考えられるが、口縁部が直口している点で疑問が残る。

111～117まではジョッキ形土器である。いずれも破片であるが、111と115においては把手接合部分が残されている。

石器 (図版38-1～7、第89、90図)

118は石庖丁の未完成品である。安山岩を短冊状に粗く形を整えており、周辺には小さく加工を施し刃部と背部の区別が明確に表われている。



第 89 図 遺構に伴わない石器実測図



第 90 図 遺構に伴わない石器実測図

119は輝緑凝灰岩製の石庖丁で端部を孔の部分から欠いている。また周辺にも剝離面が見られるところから、使用段階での取り扱いが乱雑であったために生じたものと考えられた。

120は3個の穿孔を有する石庖丁である。かなり使用されたとみえ、身幅も狭くなって柳葉形に近くなっている。粘板岩製でほぼ完全な姿をしていた。

121も輝緑凝灰岩製の石庖丁で穿孔部から折れて端部のみである。外湾刃半月形を呈しており、背は一直線になる様である。

122は粘板岩製の石庖丁で、やはり穿孔部から折れて端部のみである。

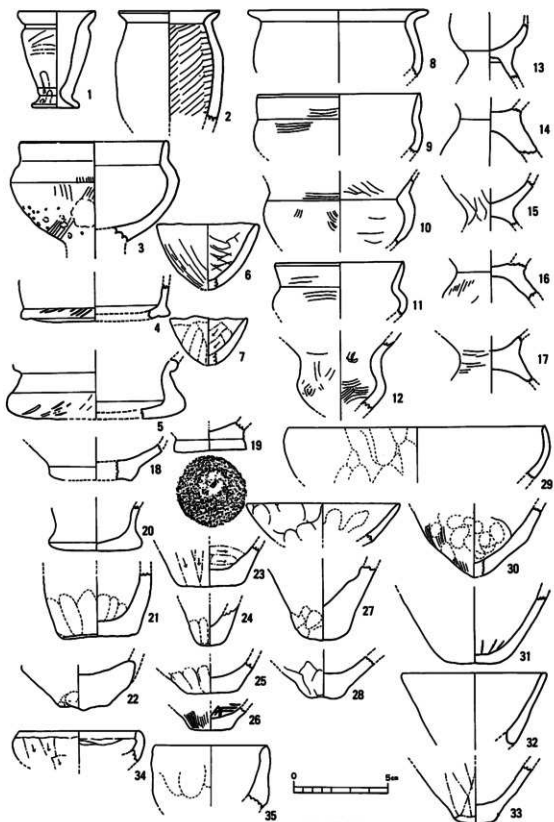
123は砂岩製の砥石である。使用面は2面で、下端部が折れている。使用の度合いとしては平坦面を維持しているところから、比較的初期の段階と言える。

124は安山岩製の石鏃である。柳葉形を呈しているが、全面に剝離の痕を残している。これまで方保田東原遺跡から出土した石鏃は全て無柄で、柳葉形石鏃としてはこれが最初である。

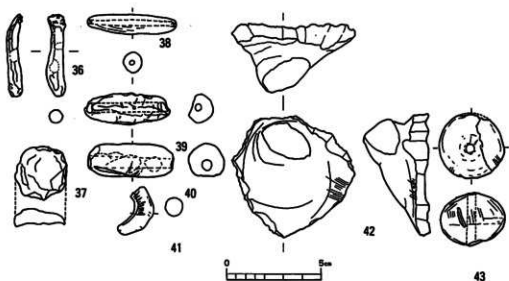
祭祀遺物（図版38-8～11、39-1～6、第91、92図）

1～35まではミニチュア土器で、その殆どが甕と鉢である。36～43は土製品で勾玉、土鏃が主である。1は脚台を有した甕の破片である。口縁部直下に凹線を一条めぐらしている。2も甕である。口縁部を「く」字に開き、長胴の在地系で底部を欠いている。3は脚付鉢で脚部を欠いている。口縁部は直口し、肩が張った胴部である。

4は鉢になると思われる。口縁部より欠いているが、直口気味に立ち上がり、底部はやや丸味をもった平底になる。底部近くには凸帯をめぐらしている。なおこの資料と同種のものが第IV次調査においても出土している。



第 91 図 遺構に伴わない祭祀遺物実測図



第 92 図 遺構に伴わない祭祀遺物実測図

5 もやや丸味をもった底部で、胴部には段をめぐらし、器形がどのようになるのか判断しかねている。6 と 7 は尖底の鉢である。口縁部は不整形で波状をなしている。8 は口縁部を「逆 L」字状に開いた鉢である。9 は口縁部が直口し胴部が張った鉢である。10 は口縁部と底部を欠いているが、口縁部は直線的に開いている。11 も口縁部が直線的に開いた鉢で、底部を欠いている。12 は口縁部が大きく胴部が小さい鉢で、底部は尖底になるものと思われる。13～17 は脚台の破片である。18～21 は平底で、とくに 19 の底には僅かに織物のスタンプを残している。21 は円筒状を呈する鉢である。22～28 も平底だが、胴部に比べ小さな底部となっている。29 は鉢で口縁部は内湾しつつ立ち上がっている。30 は尖底の鉢で指頭圧痕を器面に多く残している。31～33 も尖底気味の鉢である。34 は口縁部が内向した鉢で外面をへら削で調整している。35 は口縁部が直口する鉢で器壁が厚い。器面に指頭圧痕が残っている。

35 は棒状をした土製品である。上端を欠くが、下部の断面が丸であるのに対し、上端部近くでは僅かに偏平となって曲線を描いている。用途については不明と言わざるを得ない。

37 は円盤状をしたもので、高坏の一部で、坏部と脚部との接合部の可能性が高い。38～40 は土鉢である。41 は土製勾玉で頭部を欠いている。側面には刻目を行っている。42 は把手の基部と思われる。

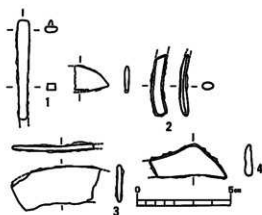
この把手は半球状をなし、口縁部と水平方向に付着するもので畿内地方で多く見られる。なお第 IV 次調査においてこの種の把手が 1 点出土している。

43 は算盤玉形土製品で調査区の東南コーナーから出土している。

鉄器 (図版 39-7～9、第 93 図)

1 は 1 号住居跡南側から出土したもので先端部は平坦で刀部を形成している。現長 5.2cm、重さ 4.4g である。2 は 6 号住居跡北側から出土しており、僅かに曲線を描いている。現長 3.2cm、重さ 1.7g で器種は不明。3 は 3 号住居跡西側から出土した鎌で現長 4.7cm、重さ 6.5g を測る。4 は三角形の鉄片で現長 4cm、重さ 5.7g を測る。(中村)

註1 「方保田東原遺跡」『山鹿市立博物館調査報告書』第2集 1982



第 93 図 遺構に伴わない鉄器実測図

第4章 考 察

第1節 溝状遺構出土の甕について

方保田東原遺跡出土土器の編年については、かつて作業を進めた事がある。^{II1}その際、甕の形態を中心に大まかにⅠ期からⅤ期まで分けることができたが、Ⅰ期とⅢ期については資料的に不十分であったと言わざるを得なかった。とくにⅢ期の甕の形態としては、長胴で脚台を有し、さらに胴部外面にタタキ目を施しているものを考えていたが、これまでに完全な姿を留めている甕は1点も見られなかった。以来、Ⅲ期の甕の存在を信じつつ調査の機会を待っていたと言っても過言ではない。

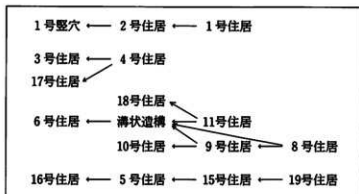
この様な状況において、今回の調査でⅢ期の甕が出土した事は私にとってこのうえもない喜びであった。さらに加えて、Ⅲ期の甕とⅣ期の長胴丸底の甕を層位的に捉えることができたのは望外の喜びであった。

ここで方保田東原遺跡におけるⅠ期からⅤ期までの甕を主体として概略述べてみることにする。

- Ⅰ期 これまで甕の出土を見ていないが、鋤先形口縁を有する甕と高坏が特徴である。甕は頸部および胴部に数条の貼付凸帯をめぐらし、刻目を配しているものも見られる。高坏は大型で口縁部は水平を呈している。資料的に最も不足している部分で、今後補足しなければなるまい。
- Ⅱ期 基本的には在地系の長胴の甕で、脚台を有し器面全面にハケ目を施しているのが特徴である。胴部の張りによって2期に細分できる。甕は数種類見られるが、いずれも頸部に貼付凸帯や沈線をめぐらしている。後にはこれが櫛描による直線文や波状文、さらに縋状文を施して、胴部に円形浮文を有するものも見られた。高坏は完形品に乏しいが口縁部が短かく直線的に開き、胴部も浅い。脚部は柱状部が高く裾部が内湾気味に開いている。なお、この時期は津袋Ⅰ、Ⅱ期に比定される。^{II2}
- Ⅲ期 在地系の長胴の甕にハケ目とタタキ目を施し、底部は脚台を有する。未だ外来系の甕の出現を見ない時期である。口縁部が外反しながら「く」字に開くものと、僅かに内湾しながら開くものと見られ2期に分けることができる。甕は頸部に刺突文や竹管文を施しているものと、東九州的要素の強い櫛描文を施しているものが存在している。高坏は完形品が無いが、口縁部が短く開き、胴部が浅いものと僅かに深いものが見られる。
- Ⅳ期 在地系の長胴の甕でタタキ目を施し、底部は丸底となる。また後半外来系甕(庄内系)の出現を見る。外来系の甕は在地系の甕に比較すると小さく、口縁部は外反し、胴部は倒卵形で外面にタタキ目、内面にハケ目とヘラ削りを施している。甕は器種が少なくなり、口縁部が直口したり、開いたりしているが概して短くなる。なお、この時期も2期に細分化できる。
- Ⅴ期 在地系甕が完全に姿を消し、外来系(布留系)の甕が主体となる。甕は口縁部が僅かに内湾しながら「く」字形に開き、胴部は球状をなしている。また外面にはハケ目、内面にはヘラ削りを行っている。これらはその形式によって4期に細分している。

この分類に際しては遺構に伴う資料を中心に取り扱い、さらにそれらの先後関係を基礎に作成したものである。従って今回の第Ⅷ次調査においても遺構の先後関係を明確にしておく必要がある。

表-2 第Ⅷ次調査 遺構重複一覧 (古←新)



むろんこの中には同一時期における先後関係も含まれており、この関係が即土器の形式差として現われるものでないことは言うまでもない。この事を踏まえて遺構ごとに出土遺物を検討し、先の分類と対比させると次の様になる。

表-3 第Ⅷ次調査 遺構編年表

時 期	遺 構 名
I 期	2号住居
II 期	5号住居、19号住居
III 期	6号住居、12号住居、溝（1、2期）
IV 期	3号住居、7号住居、18号住居、溝（3期）
V 期	8号住居、9号住居、11号住居

なお、遺構の中には出土遺物が少なく、時期の決定が困難なものもあり、切り合い関係では明らかに古い、具体的な位置付けが出来なかった遺構も見られた。

さて、溝については本文中にも述べている様に、堆積層から出土遺物を次の様に分類することができる。

- 1期 溝底密着状態
- 2期 最下層（15・14層）出土
- 3期 13層から1層にかけて出土
- 4期 溝埋没後に置かれたもの

また、これらの層位は堆積の過程から1、2期をほぼ同時期と見なすことができ、3期と4期に分けることができる。4期は一部を除いて直接溝と結びつかず、ここでは1、2期と3期について考えてみることにする。

1、2期（Ⅲ期）

壱は在地系の長胴で脚台を有し、胴部外面においてタタキ目を行いその後ハケ目を施している。

内面は全面ハケ目である。なお、この期では胴部外面が全面ハケ目の甕(Ⅱ期)は1点も出土しておらず、外面タタキ目の丸底甕(Ⅳ期)も出土していない。その意味ではⅢ期の単純層と見なすことができる。さらに6号住居は切り合い関係から溝より古く築かれたものである。従って時期としては溝より古く考えねばならないが、甕の形態としてはⅢ期の所産と見なすことができ、補足的資料として考えることができる。

甕は口縁部が大きく開き朝顔状をなし、頸部には櫛描きの簾状文をめぐらしている。鉢は口縁部が僅かに内向しながら立ち上り、器高に比べ口径が大きい。

3期(Ⅳ期)

甕は在地系の長胴で丸底となり、胴部外面にはタタキ目とハケ目を施している。内面においてはハケ目を全面に施していた。甕の中でも口縁部が反り気味に開いて、胴部上位に最大径を有するタイプと口縁部が僅かに内湾しながら開き、胴部中位に最大径を有するタイプが見られた。とくに4期の中に含めた甕は後者のもので、胴部自体あまり張りやを有しないタイプであった。このことから前者と後者では多少時間差が認められよう。なお、この層において外来系の甕は1点も見出す事が出来なかったし、また2期の脚台を有した甕も見られなかった。従って3期における段階では外来系甕の出現を見ず、脚台を欠いた在地系甕が主体となす単純層と見る事ができる。

さらに、昭和59年に実施した第Ⅶ次調査において溝中より多量の土器が出土した。これらは外来系甕が主体で、在地系の甕は含まれていなかった。^{註3} このことから、かつてⅣ-a期において在地系と外来系の甕が共存すると考えていたが、この段階での共存は考えることが出来なくなった。従ってⅣ-b期で外来系甕の出現を見るものと考えられた。

甕は口縁部が短かく反り気味に開き、胴部が大きく外面にはタタキ目とハケ目を施していた。鉢は脚台を有するものと丸底のものが見られた。

以上が溝内における1、2期と3期の甕を中心とした概観である。これらは明らかに甕の特徴が異なっており、さらに各々の甕が単純層となって出土している点が注目される点である。

これまで脚台を有している甕と丸底の甕の変遷については層位的に捉えられた事がなく、今回の調査において確実に捉えられた事は重要な成果と言えよう。

この他Ⅳ期の長胴丸底の在地系の甕には外来系の甕が伴わない事実も明らかとなった。さらに古閑白石遺跡の例から長胴で脚台を有するⅡ期とⅢ期の甕にはⅣ期の長胴丸底の甕が伴わないという事実も明らかとなった。^{註4} これらの点を考えるとⅡ期～Ⅳ期までの在地系甕の変化は次の様に考えられる。(第94図参照)

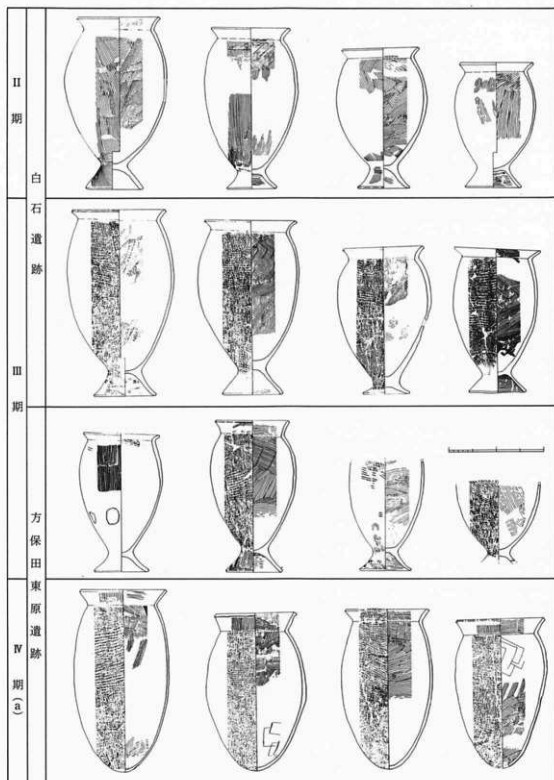
Ⅱ期 脚台を有した長胴の甕で、表面にはハケ目のみを施している。

Ⅲ期 脚台を有した長胴の甕で、表面にハケ目とタタキ目を施している。

Ⅳ期 丸底で長胴の甕で、表面にタタキ目を施している。後半に外来系甕(庄内系)が出現する。

Ⅴ期 外来系(布留系)の甕が主体となり、在地系甕が見られなくなる。

基本的には従来考えていたものと大差ないが、細かい所では訂正を余儀なくされそうであり、具体的な点については近く整理してみたいと考えている。(中村)



第 94 図 在地系墓の編年

第2節 石庖丁形鉄器について

縄文時代晩期に大陸よりもたらされた稲作技術は、弥生時代になると急速な勢いで日本列島を北上していった。当時の人々の生活の中において、稲作は安定した食糧の確保を行うために貴重な存在であった。そして、20世紀の今日に至るまでその重要性は変わることなく続いている。

また、農具についても基本的には今日のものと同様なものがすでに存在している。

農具の中でも収穫具については、穂摘具として磨製石庖丁が伝えられている。その後地域によっては打製石庖丁や貝庖丁、木製穂摘具、鉄製手鎌等へ用材や形態を変化させていったことが明らかになってきた。また、石鎌は鉄鎌へと変化したと併せて使用されていたと考えられている。

このような状況において、12号住居跡から磨製石庖丁を忠実に模した鉄製品が出土したことは、収穫具の変遷を考えるうえにおいて重要な意味をもつものである。

石庖丁形鉄器については、かつて福岡県北古賀遺跡と宮崎県穂積遺跡出土の資料が知られていた。^{図5}しかし、これらの資料が近代製の床金を誤認したものとして撤回された事は周知のとおりである。

以後石庖丁形鉄器の存在を論ずる事もなく、ましてや資料の発見すらないままに今日まで至っていると言えよう。

今回出土した石庖丁形鉄器については本文で述べた如くであるが、地金の貼り合わせ等から鍛造品であろうと推察されるが、加えて金属学的調査によっても同様の結果が得られ、鍛造品であることが裏付けられたのである（第6章参照）

石庖丁形鉄器の時期については、共存土器が在地系甕で器面に僅かにタタキ目を残しているところからⅢ期に属するものと判断された。さらに、口縁部の特徴からⅢ期の中でも古式のⅢ-a期に含まれる。

さて、方保田東原遺跡ではこれまで7次に亘り発掘調査を行った。（このうちⅥ次調査については未整理）これらの調査で検出された遺構に時間的位置付けを行い、かつ出土した鉄器を記したのが次の表である。

調査した面積は遺跡の1割にも満たない広さである。ここで得られた成果で全体を推察するには、かなりの危険性が伴うが、あえて論を進める意味から私見を述べることにする。

遺跡内における鉄器の出現

当遺跡内で鉄器を出す遺構のうち、最も古いものはⅠ次調査15号住居とⅡ次調査A-4号住居で、これらはⅡ-a期に比定できる。さらにⅡ-b期と考えられるものにⅠ次調査12号住居とⅦ次調査5号住居がある。鉄器の数は破片まで加えてⅡ-a期が10点、Ⅱ-b期2点であった。また器種別に見ても、Ⅱ-a期は鎌1点、刀子1点、不明8点となっており、Ⅱ-b期は鎌2本であった。

鎌については、結晶片岩製石鎌が数点出土しているが、時間的な位置付けが困難であった。しかし、少なくともⅡ期の段階ではすでに鉄器化が進んでいたものと理解することができる。

またこれらの鉄器は外部から製品として持ち込まれたものであろう。武器としての鎌と考えた場

表-4 方保田東原遺跡における鉄器および石器出土一覧

I		II	III	IV	V	VI
I			北側トレンチ 黒色ピット	土器層		2住
II	a	22住 15住(刀子、不明)	A-4住 (砥石、鉄鏃他7)	中央ブリッド4住	#	
	b	2住(石庖丁) 6住(# 未製品) 12住(鉄鏃)	A-1住(砥石) A-3住 西側土器層	近江2号溝底	#	13住 5住(鉄鏃) 15住 19住
III	a	1住(石庖丁) 14住	A-2住(砥石、石庖丁、鏃、鉄鏃、他22) B-2住(砥石、三角鉄片他19) B-4土版(鉄鏃) 東側土器層	近江2号溝中 # 1号溝内		6住(鏃) 12住 (石庖丁形鉄器)
	b	7住(石庖丁未製品、手鏃、他2) 20住(刀子) 23住	B-1住	最狭溝底 近江2号溝上 # 2住 # 4住	12住	溝(1, 2期)
IV	a	9住		最狭溝中 No1ピット	6住 7住	4住 5住 8住 18住 3住 (石庖丁、鉄鏃2) 7住 18住 溝(3期)
	b	3住 4住 5住(鏃、その他) 17住	D-1住 D-2住	中央グリッド1住 No2ピット		1住(刀子、鉄鏃) 9住 3号溝
V		8住(石庖丁2、鉄斧、鉄鏃) 10住(鉄鏃、刀子) 13住 18住(鉄斧、手鏃、他2)	B-3土版	近江2号溝上 No3ピット No2ピット土器層	1住(手鏃他3) 3住(鏃) 4住(鉄鏃) 5住 8住(鉄鏃)	10住 21住 3号土版 3号溝 8住(不明鉄片2) 9住 11住(三角鉄片)
時期不明の遺構		11住 (石包丁、鏃、他1)		土器層(石庖丁未製品2、鉄鏃2、砥石、鉄斧)		4住(鉄鏃他4) 13住(手鏃)
遺構に伴わない遺物		手鏃		手鏃		

合、より強大な殺傷力を持つ鉄鏃の出現は集落内における武力強化へと発展していくものであろう。

その後、他の器種の道具類が鉄器化へと進んでいったものと考えられる。

遺跡内における収獲具の鉄器化

収獲具としての石庖丁(磨製)はI期からV期まで普遍的に見られ、未製品も含めて33点が確認されている。これらは遺跡内で加工していたことも明らかになっている。この様な状態で鉄製収獲具として鏃がIII-a期に2点出現している。さらに加えて石庖丁形鉄器もこの時期であった。

III-b期としてI次調査7号住居が存在するが、ここにおいては石庖丁未製品2点と共に手鏃が出土している。さらにI次調査8号住居はV期に属するが、石庖丁2点と共に鉄斧、鉄鏃、銅鏃が各1点出土している。

この様に鉄製の鏃や手鏃が出現したにもかかわらず、依然として石庖丁が使用されていたということは、収獲具の鉄器化とその普及が遅れていたことを如実に物語っていると云えよう。

遺跡内における小鍛冶の存在

昭和49年度の第Ⅱ次調査において三角形や板状、棒状といった鉄片が集中して出土した住居跡2軒が存在している。これらはかつて鉄素材の可能性が高いと述べたことがある。^{註7}

玉名郡菊水町の諏訪原遺跡においても同様の鉄片が多数検出され、小鍛冶の存在を示唆するものとして注目されている。^{註8}

方保田東原遺跡で集中して鉄片を出土した住居はA-2号住居とB-2号住居で、とくに前者は不整形な竪穴のほぼ中央に長さ5.8m、幅1m、深さ40cmの土坑を掘っていた。住居全体に炭化物が被っており、土坑内においても多量の炭化物を検出した。調査当時は火災による焼失であると考えていたが、今から考えてみれば土坑内の炭化物の状態から小鍛冶の施設と考えるべきであったと反省している。さらに、住居内からは鉄錆が付着した砥石も出土しており、多量の鉄器を砥いだものと理解することができる。なお共伴土器からこれらの住居は共にⅢ-a期に比定される。

以上の成果から石廬丁形鉄器について考えてみることにする。

当遺跡で最初の鉄器は鎌であった。これは先に述べた如く武力の強化といった意味から、外部からもたらされたものと理解される。石廬丁形鉄器は次の段階で出現し、同時に鎌も現れている。さらに、Ⅲ-b期では手鎌も見ることができる。数量的には遺構に伴わない遺物まで含み、石廬丁形鉄器1点、鎌5点、手鎌6点を数える。

小鍛冶施設がⅢ-a期に存在するところから石廬丁形鉄器および鎌の製作段階には、すでに遺跡内で生産加工が可能であったと思われる。従ってこれら鉄製収穫具の製作について考えた場合、石廬丁形鉄器は数量が僅か1点しかなく、穿孔をもたない例は存在するが、完全に石廬丁を模した例は国内では見られない。だが鎌は36遺跡52例、手鎌は23遺跡95例^{註9}となっていて、石廬丁形鉄器の稀少性から見ても、石廬丁形鉄器は当遺跡における生産と考えられ、同時期に見られる鎌は搬入したと考えるべきであろう。さらに、手鎌についても、同時期に石廬丁の生産や使用も当遺跡で行われているところから、搬入したものと考えられる。

今後の課題として、素材を含めた全ての鉄器について今後金属学的分析を実施し、今まで述べた点について検証することが残されている。(中村)

註1 拙考「方保田東原遺跡出土の土器の編年(案)」『方保田東原遺跡』1982

註2 高木正文「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集 1979

註3 中村幸史郎・坂本重義「方保田東原遺跡2」1984

註4 第5章第1節において詳細に述べている。

註5 原田大六・森貞次郎「九州出土石廬丁形鉄器の推定」『考古学研究』第7巻4号1961

註6 拙考「方保田東原遺跡の石廬丁について」『方保田東原遺跡』1982

註7 坂本重義「方保田東原遺跡の鉄器について」『方保田東原遺跡』1982

註8 緒方勉「まとめ」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報』1971

註9 「三雲遺跡Ⅰ」『福岡県文化財調査報告書』第58集1980

註10 松井和幸「鉄鎌」『弥生文化の研究』5。雄山閣1985

註11 寺沢知子「鉄製穂摘具」『弥生文化の研究』5。雄山閣1985

第5章 周辺遺跡の調査

第1節 古閑白石遺跡

1. 調査の経過

昭和57年11月28日、山鹿市議会議員池田幸一氏より博物館へ「古閑白石において宅地造成を行っている最中に、土器類が出土した」との連絡があり、早速倉原謙治学芸員と筆者が現地に赴いた。

現地は、市営白石住宅の東南端に位置する、野満久雄氏所有の畑地で、重機によって造成が進められているところであった。

二人で手分けして土器等の採集を始めたが、土器片が集中している地点があり、地主の了解を得て一部掘ってみると、下からぞくぞくと弥生終末期の土器片が出土した。さらに掘り進む段階で遺構が断面逆台形状をした溝状遺構で、ほぼ南北に長さ12mまでは直線で伸びていることを確認できた。溝は幅約145cm、検出面からの深さは約57cm程であった。時間的な制約もあって長さ約3m程度しか掘り進めることができず、またメモ程度の記録しかとどめることができなかったが、コンテナにして7杯分の一括資料を採集した。(坂本)

2. 遺跡の位置 (第95図)

白石遺跡は山鹿市大字古閑字白石に存在する弥生時代終末期の遺跡で、山鹿市の東部に位置し、国道325号線を挟んで県立鹿本高校の南側に広がっている。

今回遺物が出土した地点は、山鹿市大字古閑字白石1312-1番地の畑地である。この地は鹿本高校から南東方向約500mにある白石住宅の南端部に位置し、南側500mには内行花文鏡を出土した方保田遺跡が存在する。また東側約600mには馬見塚古墳群。西側300mには土師器を主体として出土する古閑の上遺跡が存在する。さらに方保田東原遺跡とは1kmの距離にある。

この遺跡に関する調査は、これまで表面採集が行われていたに過ぎず、今回このような形でも遺構の確認が行われたのは初めてのことである。今後遺跡の規模等詳細な調査が必要とされるが、近年この地区における宅地造成が盛んに行われており、文化財行政上、常に目を光らせておく必要があろう。(中村)

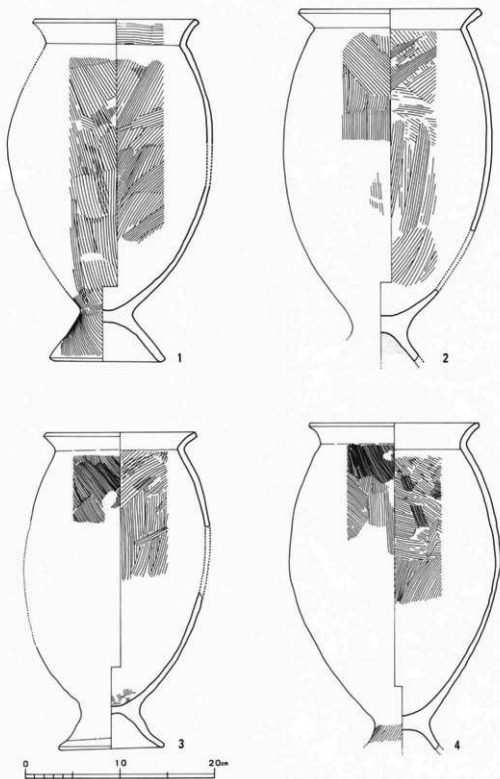
3. 遺物 (図版40～46-3、第96～117図)

遺構については先に述べた如く、溝状遺構が長さ12mにわたって確認された。今回出土した遺物

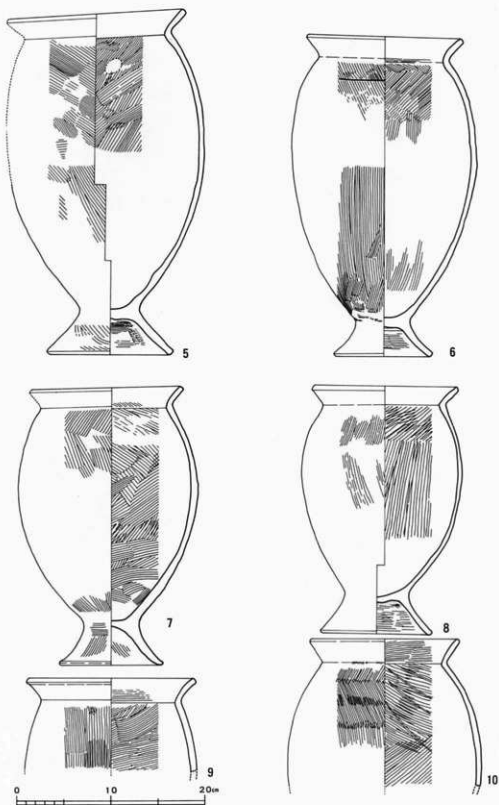


- | | | | |
|----------|------------|--------|-------------|
| ①方保田東原遺跡 | ②大道小学校校庭遺跡 | ③方保田遺跡 | ④白石遺跡 |
| ⑤古岡ノ上遺跡 | ⑥石原遺跡 | ⑦馬見塚遺跡 | ⑧旧大道中学校校庭遺跡 |
| ⑨塚の本遺跡 | ⑩馬見塚古墳群 | ⑪神社裏古墳 | ⑫経塚古墳 |
| ⑬方保田古墳 | ⑭端山塚古墳 | ⑮亀塚古墳 | |

第 95 図 周辺遺跡分布図



第 96 图 白石遺跡出土遺物実測図



第 97 圖 白石遺跡出土遺物実測図

は全てこの溝状遺構から出土したものである。その出土状態は、土器が廃棄されたようにして出土しており、破損したものがその殆どを占めていた。

遺物は甕、壺、高坏、鉢、器台が、出土しており、甕と壺が量的に最も多かった。

甕 在地系の甕ばかりで外来系は1点も見出せなかった。とくに在地系甕のうち脚台を有するものが殆どで、僅かに平底が1点出土していた(59)。さらに、脚を有する甕のうち器面にハケ目を施したものと(1~42)、さらにタタキ目を施したもの(43~55)に分類できた。(中村)

1. 口縁部の大半と、胴部の一部を欠く。内外面ともハケ目仕上げで、外面に左下がりのタタキ目の痕跡がうすく窺える。ススの付き方は一方向から火を受けたことを示すそれである。脚部はススの付着及び器面の荒れもなく、火が当たっていないことを示すものではないだろうか。

2. 脚台の端部を欠くがほぼ完形の甕である。脚部内面に砂粒が付く。内外面ともハケ目調整を施しているが、外面胴部下位は丁寧にナデている。また、外面には、タタキ目の痕跡も窺える。ススの付着状況は他のものと同じであり、内面には黒斑状のコゲツキ痕が3箇所見られる

3. 脚台付きの甕である。外面胴部上半に右下がりのハケ目、内面には原体の異なるハケ目を施している。外面は口縁部から胴部下位にかけてススが付着し、その下が赤化している。また脚台部分にはススも赤化も見られないので、灰か土に脚部を埋めて使用したのかも知れない。内面には幅約8cmのコゲツキ痕が周回する。

4. 脚台付の甕でほぼ完形である。口縁部は丸く外湾して広がり、端部はややまるまる。体部は、倒卵形を呈し、脚台が付く。内外面ともハケ目をしているが、下位ではナデ消している。外面胴部上半部から口縁端部にかけてススが付着し、下半は赤化し、また器面の剝離が顕著で、使い込まれたという感じを受ける。内面は全く汚れておらないので、湯沸かし専用であったものかもしれない。

5. 口縁部と胴部の一部を欠く甕である。肩部はあまり張らず、胴部最大径も中位に有する。内外面ともハケ目とナデの調整であり、外面にハケ目の前にタタキ目を施したかどうかはわからない。内面にはコゲツキ痕が残るが、試みにコゲツキの高さまで砂を入れてその量を量てみると、約6合、1.08ℓであった。

6. 47よりさらに小さめで、肩部の張り出しが特徴的である。外面のタタキ目はほとんどその痕跡を留めない。一方向から火を受けたようなススの付き方が認められる。

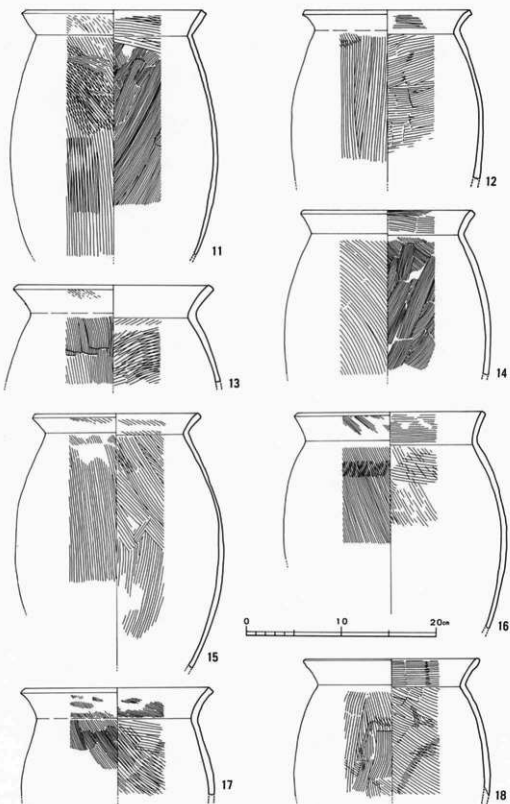
7. 口縁部の一部を欠くがほぼ完形の甕である。外面にはタタキ目の痕跡はなく、ハケ目とナデで、内面はハケ目で仕上げている。ススは胴部中位以上に顕著である。

8. ほぼ完形の甕で砂付きである。内外面ともハケ目を施し、外面はうすくナデている。全体にススが黒々と付き、底部から脚部にかけてはススがふっ切れている。内面はほとんど汚れていない。

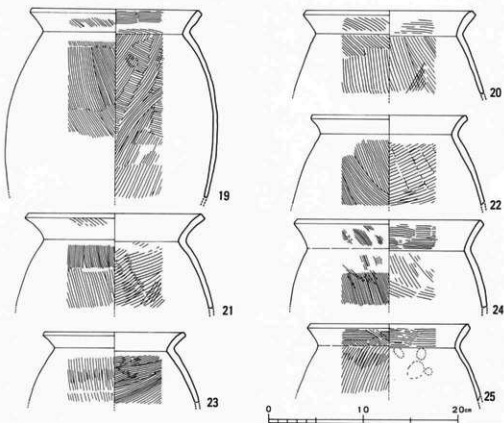
9. 甕の破片で、内外面ともハケ目、外面にはススが付着する。

10. 甕の破片である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸まる。内外面ともハケ目だが、外面右下がりの条痕文を肩部に施している。外面全体にススが付着している。

11. 甕の破片で、底部の形状はわからない。外面には粗いハケ目、内面には細かいハケ目を施している。内面の調整は入念に行っており、焼成も極めて良好である。外面全体にススが付着しているが、胴部下半はふっ切れた状態となっている。



第 98 圖 白石遺跡出土遺物実測図



第 99 図 白石遺跡出土遺物実測図

12. これも甕の破片で、外面は縦位の、内面は横位のハケ目を施す。外面はススが付着し、器面の剝落も著しい。内面は変色をきたしている。

13. 甕の口縁部片である。造りも丁寧で、焼成良好である。外面はススで真黒に汚れている。

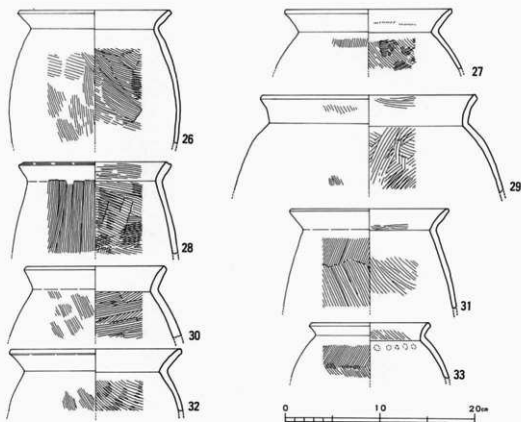
14. 甕の口縁部から胴部にかけて残る破片である。調整は内外面ともハケ目であるが、その原体は異なる。外面にススが真黒に付着している。

15. 底部を欠損する甕である。内外面ともハケ目を施しているが、外面に右下がりのタタキ目の痕跡がわずかに見受けられる。外面のススの付着部分と、ススのふっ切れた部分が明瞭な境をなしている。内面の汚れは少ない。

16. これも底部を欠損する甕である。口縁部がやや外湾し、肩部もやや張る。内外面ともハケ目調整だが、その原体は異なるようだ。外面は度重なる使用で器面が大変荒れており、内面も下位にコゲツキの痕が顕著である。

17. 甕の口縁部から胴部にかけての破片である。内外面ともハケ目だが、外面のハケ目の方が細かく、仕上げも丁寧である。ススが外面に真黒く付着し、よく使いこまれたという印象を受ける。

18. 口縁部から胴部中位にかけて残る甕の破片である。口縁端部は水平に近い。内外面ともハケ目。外面にスス、内面にコゲツキによる変色が見られる。



第100図 白石遺跡出土遺物実測図

19. 胴部下半を欠く甕である。口縁端部内側が若干つまみ出され気味になっている。胴部最大径も比較的上位にあるようだ。調整は内外面ともにハケ目で丁寧に行っている。焼成も極く良好である。外面に真黒くススが付着している。

20. 甕の口縁部片である。内外面ともハケ目、外面にスス付着。

21. これも甕の破片で、内外面ともハケ目。堅く焼き締まっている。外面にススが付着。

22. 甕の口縁部の破片である。胴部の張り出しが大きい。内外面ともハケ目を施す。外面にススが付着している。

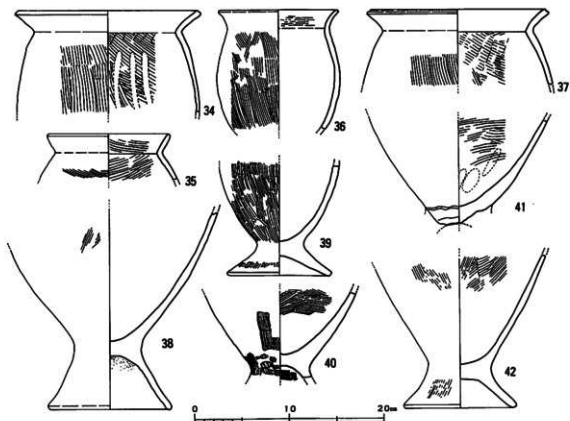
23. 甕の口縁部片で、やや小振りである。内外面ともハケ目。外面にススが付着する。

24. 甕の口縁部片で、内外面ともハケ目。外面にススの付着が顕著である。

25. 甕の口縁部片である。外面と内面の口縁部にハケ目を施し、内面胴部はナデである。焼成は極めて良好。外面に真黒くススが付着している。

26. これも胴部下半を欠く甕である。内外面ともハケ目を施しているが、外面はハケ目を大方ナデ消している。調整も入念で、焼成も良く堅く焼き締まっている。外面全体にススが付着している。

27. 甕の口縁部片で、端部は垂直に近い。胴部は大きく張り出す。外面はハケ目をヨコナデで消している。外面にスス付着。



第 101 図 白石遺跡出土遺物実測図

28. 甕の破片。口縁部は肉厚で、端部は中央部が凹む。肩部は張らず、胴部中位に向かってゆるく膨らむ。内外面ともハケ目。外面に濃くススが付着している。

29. 大型の甕の破片である。内外面ともハケ目。外面にススが付着し、器面の剥落顯著。

30. 甕の破片。肉厚である。外面はハケ目をナデ消している。外面にはススはほとんどついていない。内面にススあるいはコゲツキによる汚れが見られる。

31. 甕の破片である。口縁部は直線的に伸び端部は丸まる。肩部の張りはなく下位へ続く。内外面ともハケ目。外面にススが付いている。

32. 甕の破片。外面はハケ目をナデ消している。ススはうすい。

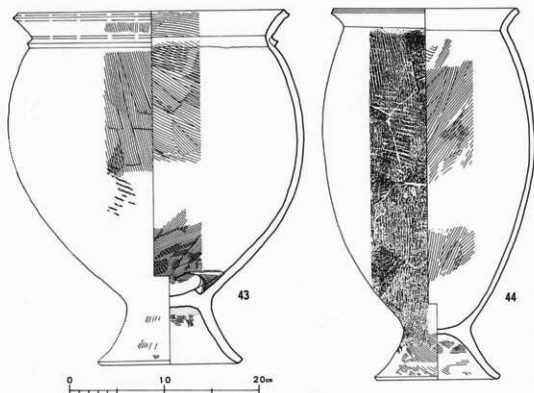
33. これも小型の甕の破片である。口縁部は短く、胴部は丸く膨らむ。外面に薄くススが付く。

34. 甕の破片である。口縁部はやや外湾しながら大きく開き、端部は内側が若干つまみ上げられている。内外面ともハケ目。内面はそのあと縦にナデで調整している。外面のススは薄い。

35. 小型の甕の破片。内外面ともハケ目。外面にタタキの痕跡が見られる。ススの付着はない。

36. 小型の甕の破片で、底部形状は判らない。外面はハケ目。内面はナデで仕上げている。外面のススには光沢がある。

37. 甕の口縁部片である。口縁端部中央はやや凹む。内外面ともハケ目。外面にスス付着。



第102図 白石遺跡出土遺物実測図

38. 下半部のみ残る脚付甕である。脚台は比較的高い。そして、内面に砂が付着している。外面は脚と胴部の境目より上位の半面にススが付着し、半面は強い火に当たっていたと見えてススがふっ切れて赤く変色している。コゲツキは内面の底面ではなく側面にはりつくような状態で残っている。

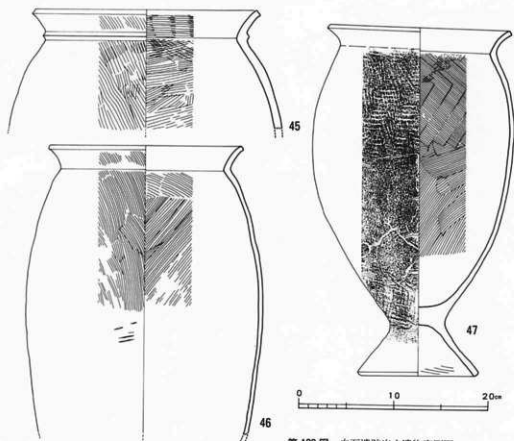
39. この資料は、36と同一個体の可能性が強い。外面はハケ目、内面はナデ。内面底部に近いところにコゲツキ痕が幅2cm程で周回している。外面にはススが付着し、やはり光沢がある。

40. 内底に数枚の木の葉を敷いたような痕がくっきり残っている。内面全体コゲツキの痕で黒く変色しているが、木の葉を敷いたと思われる底部のみ変色も極く薄く、コゲツキが見られない。多分コゲツクことによる使用後のわずらいを少しでも省くために葉を敷いたものであろうが、他に例がなく、当時の料理の仕方など考える上で、大変興味引かれる資料である。

41. 甕の底部片である。脚部が接合面で剥れている。内面に横位のハケ目が見られる。外面の半面にススが付着し、また内面にはコゲツキ痕が周回している。

42. これも下半部のみ残る甕である。脚台は38に比べるとかなり偏平で、肉厚である。胴部の調整は中位以上にハケ目を施している。胴部外面にススが付着し、内面の底部以外にコゲツキ痕が残る。

43. 甕と称してよいものか、鉢と称してよいものかわからない。口縁部はくの字形に外反し、端部は外側につまみ出され、中央部が凹む。頸部には断面三角形の貼付け突帯を有している。胴部は

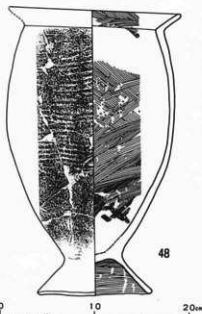


第103図 白石遺跡出土遺物実測図

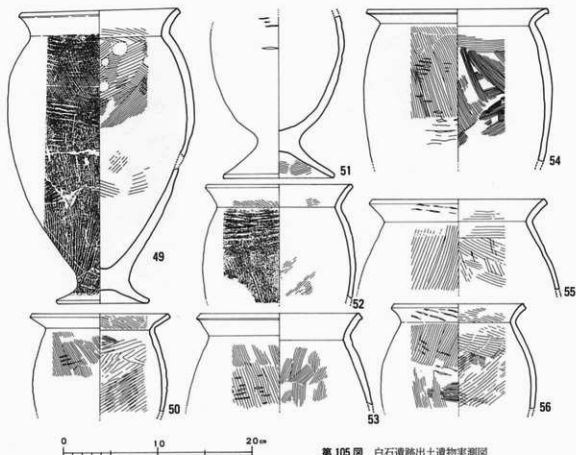
丸く膨らむ。内外面ともハケ目の調整だが、外面には右下がりのタタキ目の痕が若干残っている。脚部内面上位に砂粒が付着する。内面底部はハケ目を施したのち、さらに粘土を重ねて底部を厚くするという補修を行っている。

44. 脚台付の甕で、ほぼ完形である。極めて焼成が良好であり倒卵形の体部に外反した口縁部と脚台が付く。口縁端部はナデによって中央部を凹ませている。体部外面はタタキ目をハケ目で消し脚部には面取りをするような要領で小刻みにハケ目を周回させている。内面はハケ目とナデの仕上げ。外面胴部中位以上に真黒くススが付き、下位ではふっ切れている。内面にはコゲツキ痕が帯状に廻っている。

45. 頸部に断面三角形の突帯を有する甕の破片である。口縁部はやや外湾して立ち上がり、端部はナデによって外側へやや突出気味となっている。胴部は丸く、大きく張り出す。全体に



第104図 白石遺跡出土遺物実測図



第105図 白石遺跡出土遺物実測図

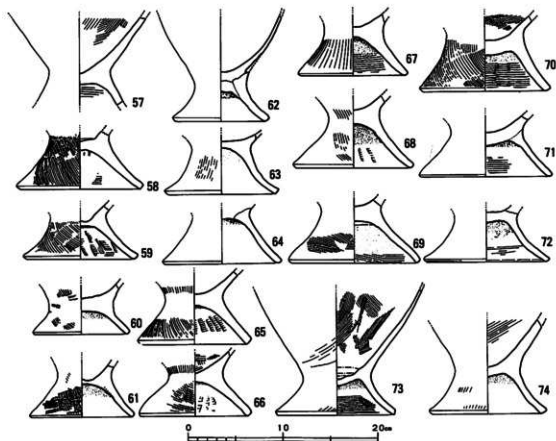
肉厚である。外面全体、及び内面口縁部端部付近にススが付着している。

46. 底部を欠く甕である。口縁部は外湾して立ち上がり、端部はややまるまる。内外面ともハケ目だが、タキ目の痕跡も見られる。外面にススの付着と変色が見られ、内面も下位が変色している。

47. 44よりやや小振りの甕である。こちらは外面の調整で、タキ目、ハケ目を施したあと全体をナデてそれらをほとんど消してしまっている。内面は幅8cm弱の原体によってハケ目を施す。これも焼成は極めて良好である。胴部に黒々とススが付着している。

48. 口径18.3cm、器高30.4cmの甕であるが、脚台が不整形のため全体に傾いている。口縁部は短く「く」字形に折れ、胴部の張りも少なく脚台へと続いている。脚台は内湾気味に広がっているが、裾部が不整形のため正円とならない。器面調整は口縁部外面はナデ調整、内面ではハケ目を施している。胴部外面においては水平方向の粗いタキ目を行い、一部ではナデ消しているところも見られる。内面では全面に細かいハケ目を行い、上部ではその後ナデ消している。脚台は外面をナデ、内面をハケ目で調整を行っていた。胴部外面にはススの付着が著しい。

49. 完形の甕である。肩部が張りだし、胴部最大径もかなり上位である。全体的に肉厚で底部の厚みは2.2cmを測る。脚部は極く偏平に作られている。外面の調整はタキ目、上から下への斜めの



第 106 図 白石遺跡出土遺物実測図

ハケ目、次に下から上へ引き上げたハケ目の順になっている。ススは胴部中位から口縁部にかけて濃く付き、下位はふっ切れている。内面にはコゲツキ痕が若干見られる。

50. 小型の甕の破片である。口縁部は大きく外へ折れて開き、その端部径は胴部の最大径より大きくなっている。内外面とハケ目調整だが、外面にタタキ目の痕跡を見ることができる。外面にススが付着し、器面の剝落も顕著である。

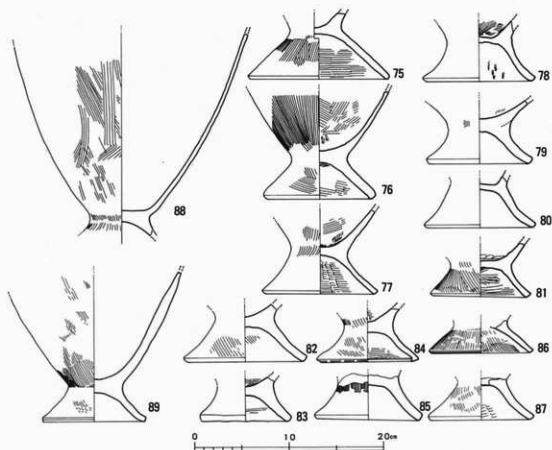
51. 口縁部を欠く小型の脚付き甕である。胴部下位の膨らみがかなりあり、胴部の断面形状は楕円形を呈するものと思われる。調整はおおよそナデであるが、胴部中位にタタキ目の痕跡が見られ、また脚部内面にハケ目が見られる。胴部外面にススが付着するが、脚部にはほとんどつかず、赤く変色している。

52. 小型の甕の破片である。外面肩部にタタキ目が見られ、下位にハケ目が見られる。ススが全面に付着している。

53. 甕の破片で、内外面ともハケ目だが、外面にはタタキ目の痕跡がかなり残っている。

54. 甕の上半部の破片である。口縁部は短く大きく開く。外面はタタキ目をハケ目で消し、内面は幅広の目の細かい原体によるハケ目を施している。焼成は極く良好である。

55. 甕の口縁部片である。胴部の張り出しが比較的大きい。内外面ともハケ目だが、外面口縁部



第 107 図 白石遺跡出土遺物実測図

にタタキ目の痕跡を見ることができる。外面はススで真っ黒である。

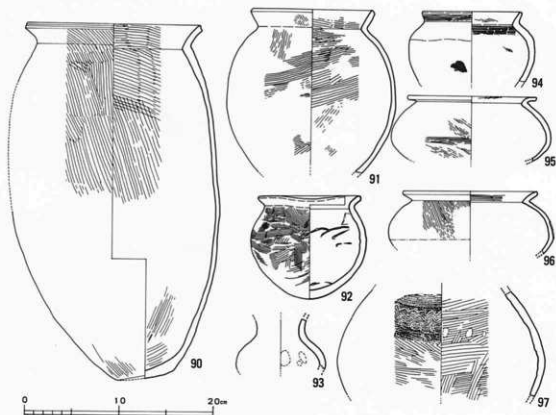
56. やや小振りな甕の破片である。外面はハケ目の前にタタキ目を施している。外面にススが付着。

57～87. 甕の脚台あるいは底部である。所謂砂付土器が16個ある。しかし砂粒の付着しないものにしても、製作工程のある段階においては多分砂が付いていたものと思われる。これは砂付土器の砂の付着する面積にばらつきがある点、またナデられた部分は、砂が塗り込められた状態となっている点、などのことからそう考えられる訳で、つまり、砂付かそうでないかは、砂をナデによって塗り込めたが、塗り込めなかったかの違いではなかろうか。

88. 脚付甕の下半部のみ残る。外面は荒いハケ目、内面はナデ調整である。外面は使用時の火熱によって赤く変色し、内面にまだら状にコゲツキ痕が残る。

89. 上半部を欠損する甕である。底部付近の肉厚はかなりあるが、中位では急に薄くなっている。ススは底部にはほとんど着かず、現最上端部あたりから付着しているようである。

90. ほぼ完形の平底甕である。接合復原がうまくできなかったので、かなり歪な格好になってしまったが、もとは整った形をしていたものであろう。内外面ともハケ目。外面の器壁の荒れが目立つ。



第108図 白石遺跡出土遺物実測図

91. 甕の破片で、底部の形状はわからない。内外面ともハケ目を施し、内面下位はへら磨きを行っている。外面にススの付着は見られず、内面も汚れていない。

92. 小型の鉢で完形である。口縁部の一部が外側にめくれ気味になっているのは故意にであろうか。外面はハケ目、内面はへら状のもので調整している。スス、コゲツキの付着は見られない。

93. 手捏ねの小型壺の破片である。内外面とも指頭による調整。

94. 鉢の破片である。口縁部は短く、肩部にはナデによって稜ができている。また、胴部中位には布目の圧痕も見られる。

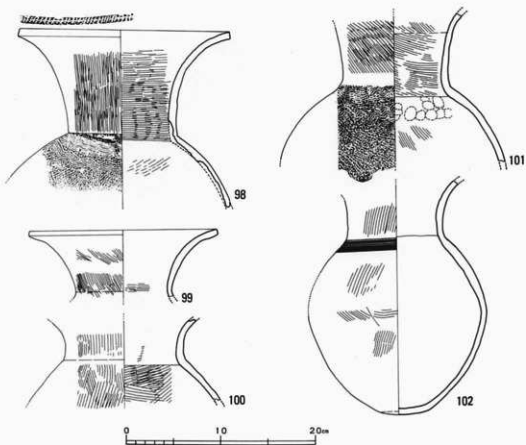
95. 鉢の破片である。口縁部は大きく外へ開き、胴部は扁球形を呈す。丁寧な作りで、焼成も良い。外面にススが付着している。

96. 鉢の破片で、すばまった頸部から口縁部が大きく外へ開く。胴部は扁球形で下位に稜を有する。外面はハケ目、内面はナデ仕上げである。外面全体にススが付着している。

97. 壺の破片である。頸部から肩部にかけて櫛描きによる直線文と波状文を施している。

98. 単純口縁の壺の破片である。口縁端部に刻目をやや斜位に施し、肩部に櫛描波状文を二重に施している。口縁部の調整は外面縦位、内面横位のハケ目で仕上げている。

99. 壺の口縁部片である。単純口縁で端部がやや肥厚する。内外面ともハケ目とナデで調整している。内面の器面の荒れが著しい。



第109図 白石遺跡出土遺物実測図

100. 壺の破片で、口縁部及び胴部以下を失っている。内外面ともハケ目、外面にススが付着している。

101. 胴部下位と口縁端部を欠いた壺である。肩部に櫛描波状文を二段にわたって施している。器面調整は内外面ともハケ目で、内面肩部に指頭痕が多く残る。焼成は極めて良好である。

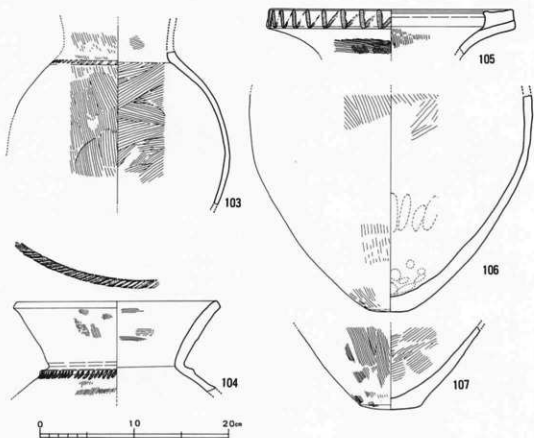
102. 口縁部を欠く壺で、肩部に13条の櫛描の沈線を有す。底部は平底気味である。外面はハケ目をナデ消している。

103. 口縁部及び胴部下位を欠く壺である。内外面ともにハケ目を施し、頸部には刺突文を廻らす。

104. 肩部に突帯を有する壺の口縁部である。口縁端部にハケ目原体によると思われる刻目文を施し、また突帯にも刻目文を廻らしている。口縁部は内外面ともハケ目をナデ消している。

105. 複合口縁壺の口縁部片である。接合関係がよくわかる。外側にはハケ目原体によると思われる刻目を縦位と斜位に交互に施している。

106. 平底の壺の下半部である。かなり大型で肉厚でもある。上半部には内外面ともハケ目を施しているらしい。外面には全体ススの付着を見るが、特に底部のススは光沢がある。内面には、底面ではなくて、胴部中位から下位にかけて斑状にコゲツキ痕が見られる。



第110図 白石遺跡出土遺物実測図

107. 肉厚で平底の底部片である。器形としては壺であると思われるが、底部外側及び、胴部半面にスガ付き、また、内面にはコゲツキ痕も見られるので、火にかけて使用されたようだ。内外面ともハケ目である。

108. 大型の壺で、口縁部が朝顔状に大きく開き、胴部も最大径をやや上部に有し長い。そのため口径25.6cm、器高44.6cmを測る。底部は平底だが僅かに凸レンズ状を呈しているため安定性に欠ける。器面調整は全面に粗いハケ目を施し、とくに口唇部においては刻目、頸部には櫛描縐状文と不規則な波状文を配していた。なお波状文については起結部分から右廻りで施文されたことが確認される。このことから恐らく工人の左手で壺を支え、右手によって行われたものと推察することができた。

109. 大型の壺で、底部の大半を欠くがほぼ完形である。体部は美しい倒卵形を呈し、底部は平底である。口縁部は外側へ湾曲しながら立ち上がり、端部は角ばっている。頸部にハケ目原体の角と部分によるとと思われる刺突文が廻る。外面はタタキ目、ハケ目及びナデ、内面はハケ目、ナデの調整である。外面に部分によってスガが濃く付着し、また内面の胴部中位を中心に丸くコゲツキ痕が見られ、土器を横に寝かせて火にかけ、煮炊きの用に供したことを窺わせる。

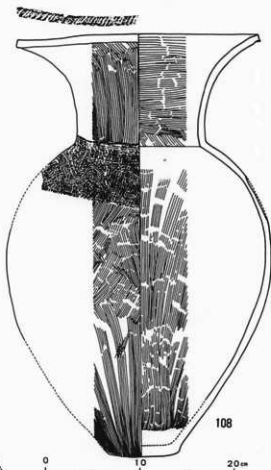
110. 単純口縁の壺で、底部を欠く。外面はタタキ目、ハケ目、ナデの順に、内面はハケ目とナデ

で調整を行なっている。胴部下位にススが付き、器面も荒れている。煮沸の用に供されたものと考えられる。

111. 単純口縁壺の破片である。口縁端部は外側がナデによって突出しており、中央部がやや凹む。内外面ともハケ目をナデ消している。調整は丁寧で、焼成も良好。

112. 単純口縁の壺で、底部は平底気味である。内外面ともハケ目を施し、外面はうすくナデている。

113. ほぼ完形の単純口縁壺である。底部は平底で、水平ではなくやや斜めに付く。全体に肉厚で重量感がある。外面はタタキ目のあとハケ目を施



第 111 図 白石遺跡出土遺物実測図

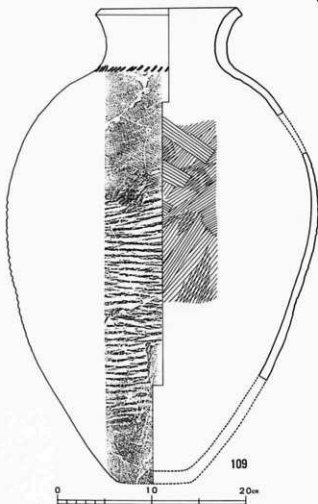
し、下位ではナデている。内面はハケ目を右上に引き上げており、左手による作業かとも思われるが、実際狭い口縁部から手を入れて作業を真似て見ると右手の方がやり易い。

114. 平底壺の破片である。胴部は肉厚だが底部は薄い。外面はナデ、内面はハケ目とナデの調整である。

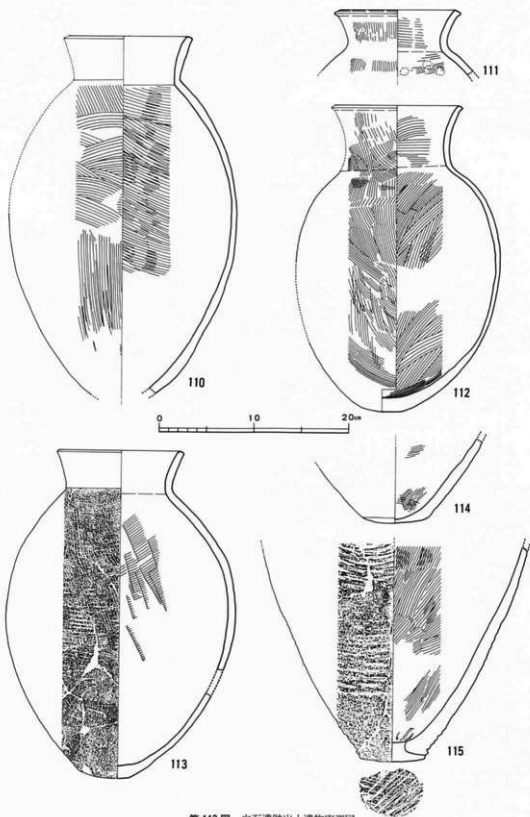
115. かなり大型で肉厚な資料で、多分壺であると思われる。底部は平底で、胴部との接合関係がよく見てとれる。外面は横位のタタキ目、内面はハケ目を施している。

116. 脚部を欠く高杯である。内面にヘラによる暗文を施す。

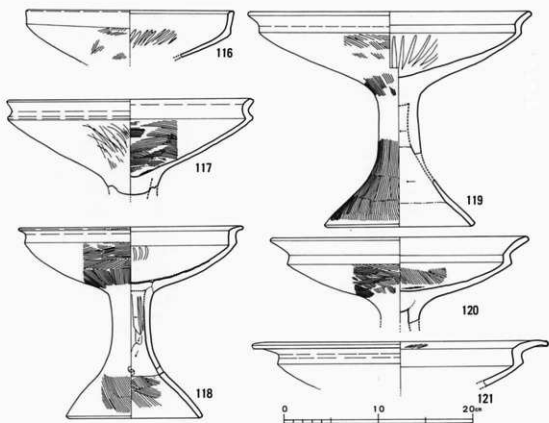
117. これも高杯の体部のみ残るもので



第 112 図 白石遺跡出土遺物実測図



第113圖 白石遺跡出土遺物実測図



第114図 白石遺跡出土遺物実測図

ある。体部は薄く、口縁部は2度折れするが、122とは異なり、一度内傾し、再び短く外反している。内面は丁寧なハケ目。外面は荒いハケ目のあとナデ調整で仕上げている。

118. これも高坏で、体部と脚部の大半を欠く。体部は丸味を持って伸び、ほぼ垂直に口縁部が付着、口縁部はさらに外側へ短く折れる。体部外面にハケ目、内面にヘラ磨きとナデ、脚部外面はヘラによるナデとハケ目、内面はヘラケズリとハケ目で各々調整している。内面の荒れが著しい。

119. ほぼ完形の高坏である。外面はハケ目のあとうすくナデで、体部内面はヘラによるナデのあと放射状に暗文を施す。脚部はヘラケズリとナデの調整である。体部内面の器面の剝落が著しい。

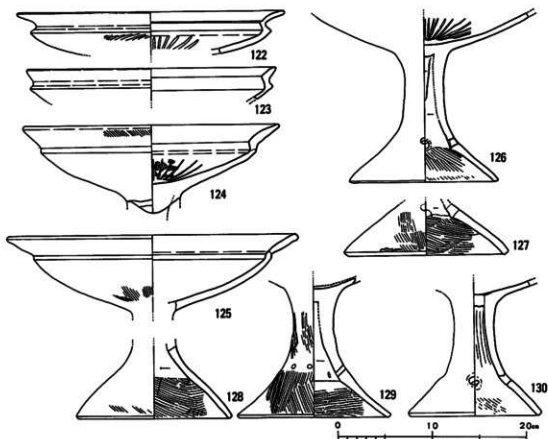
120. 高坏の破片である。口縁部は2度折出して開く。内外面ともハケ目のあとナデ。

121. 高坏の口縁部片で、復元口径は31.4cm。口縁部内側に若干ハケ目が見られる外は、ナデ調整である。

122. 高坏の口縁部片で、復元口径28.4cm。体部内面に放射状のヘラ描き暗文を施す。大変丁寧な作りで、ナデ調整は特に念入りに行なっている。焼成も極めて良い。

123. 高坏の口縁部片、復元口径26.4cm。調整はヨコナデのみ。

124. 脚部を欠損する高坏である。口縁部は体部から2度折出して開き、肉厚となる。内外面ともハケ目をナデ消しており、内面ではさらにヘラによって放射状に暗文を施している。内面体部上位



第115図 白石遺跡出土遺物実測図

から口縁部にかけてコゲツキ痕が周回し、また、底部中心外側の丸くもり上がった部分に他の部位とは異なった光沢が見られ、手ずれによるものかと思われる。このことは、脚欠損後煮沸の用に供されたことを窺わせるものであろう。

125. 高坏体部の破片である。口縁部は2度折出するが、その間の垂直な部分は、117、120に比べ短い。外面に比べて、内面の荒れが著しい。

126. 高坏であるが口縁部の形状はわからない。全体に丁寧な仕上げで、脚部外面にもヘラ磨きを施し、光沢をもたせている。裾部上位に4個の穿孔を施している。

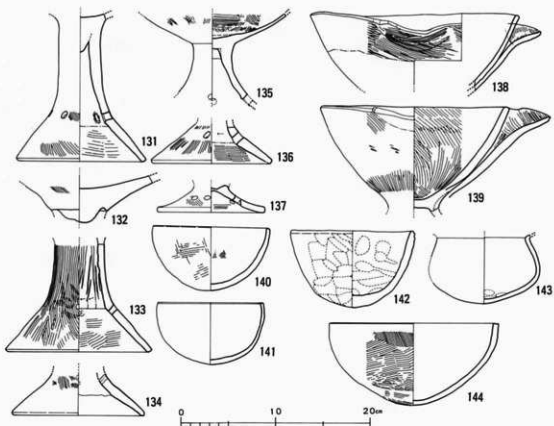
127. 高坏の脚部片。円孔の数は不明。内外面ともハケ目で、柱状部はヘラケズリ。

128. 高坏脚部の破片である。外面はヘラナデ、内面は柱状部がヘラケズリ、裾部がハケ目仕上げである。

129. 高坏の脚部。2個対の円孔を合計6個穿っている。柱状部内面はヘラケズリ。外面にうすくススが付着している。

130. これも高坏で、体部のほとんどを欠損する。脚部はラッパ状に開き、4個穿孔を施す。

131. これも体部を全く欠失している高坏である。推定で6個の穿孔を施している。



第 116 図 白石遺跡出土遺物実測図

132. かなり大型の高杯の破片で、外面の荒れが著しいがハケ目が見られる。内面はナデである。

133. 高杯脚部の破片である。裾部上位に 4 個の孔を穿っている。外面ハケ目、内面はハケ目ナデ、柱状部はヘラケズリを行っている。焼成は良好。

134. 高杯の脚部片。円孔の数は不明。

135. 口縁部と脚裾部を欠く高杯である。体部内外面ともハケ目を施し、外面はそれをナデ消している。脚部に円孔を推定で 4 個穿っている。体部外面にススの付着が見られる。

136. 高杯の脚裾部のみ残るもので、3 個の孔を穿っている。

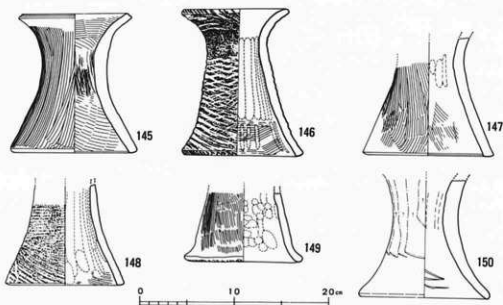
137. 鉢の脚台であろうか。偏平に仕上がっている。2 個体で計 4 個の孔を穿っている。

138. 片口の鉢で、底部を欠く。外面は右下がりのタタキ目のあとハケ目を施し、さらに下半部はヘラケズリを行い、そのあとすくナデている。内面はハケ目のあと丁寧にナデている。

139. 脚台付きの片口土器であるが脚部は失われている。内外面ともハケ目を施しているが、外面にはタタキ目の痕跡が見受けられる。スス等の付着はない。

140. 小型の鉢で完形である。外面に少しハケ目が残るが内外面ともナデ仕上げである。スス等の付着は見られない。

141. 鉢の半欠品である。内面が丁寧にナデ調整されている。



第 117 図 白石遺跡出土遺物実測図

142. 鉢の半欠品である。内外面とも指頭のみによる調整を行っている。

143. 口縁部を欠く鉢である。内外面ともナデ仕上げである。

144. 完形の鉢で、底部がやや尖り気味である。外面は2種のハケ目、内面はナデ調整で仕上げている。焼成は極めて良い。

145. 完形の器台である。外面は縦位のハケ目、内面は横位及び斜位のハケ目を施す。またくびれ部内面にヘラ状のもので集中的にひっかいたような箇所も見られる。

146. これも完形の器台であるが、114とはかなり様相を異にする。外面には大きなタタキ目を荒く施し、受部及び裾部端に刻目をこれも雑に付している。内面はハケ目のあとナデている。

147. 受部を欠く器台である。裾部径13.8cmを測る。外面に縦位のハケ目を丁寧に施す。焼成も極めて良好である。

148. 器台の破片で、受部の形状はわからない。外面はタタキ目の調整を施している。内外面ともにススが付着する。

149. 器台の裾部片で、おそらく雑な出来である。外面はハケ目、内面は指頭による調整。裾端部に藁くず等の圧痕が多数見受けられる。

150. 器台の破片である。外面は下から上へヘラケズリによって器面を調整し、そのあとナデている。(坂本)

4. ま と め

古閑白石遺跡からこれだけまとまって遺物が出土したのは初めての事である。遺跡の性格を知るうえにおいて、貴重な資料となることは言うまでもない。

今回の調査において得られた成果について考え、まとめをしてみよう。

1. 遺跡の性格と規模

調査時間と経費の制約から調査対象の面積が極端に限られていたが、逆台形状を呈した溝状遺構が確認された事は大きな成果と言えよう。また溝の中の埋土は殆ど同じ色をしており、その中の層位の確認は出来なかった。このことから溝を埋めた時間は非常に短期間であることが判明した。

これと同じ例が大道農協の調査でも見られる。溝最下層の第15層で一旦溝を埋めてしまい、その後再度掘り込み断面U字形の溝を形成していた。

これらは奇しくも出土した遺物からほぼ同時期であることが判明した。溝を埋め込む必然性が何に起因するかは今後の課題としても、興味ある現象と言えるのではなかろうか。

さて、この遺跡においては住居跡の確認ができていないが、恐らく土器の出土量から考えると相当数の住居が存在していたものと思われる。しかし、それがどの程度の広がりをもつかは推察の域を出ないため、今後の調査に待たなければならぬ。

ただ先にも述べたが、この地区では近年宅地化が急激な勢いで進んでおり、常に監視に目を光らせておく必要があり、一日も早くそれらに対応できる調査体制の確立を切望するものである。

2. 遺跡の時間的位置付け

出土した遺物は土器が殆どであった。コンテナ7箱にのぼる土器の中で今回実測を実施できたものは150点に達した。これらは大きく甕、壺、高坏、鉢、器台に分類することができたが、出土した土器の中にジョッキ形土器が1点も含まれておらず、気になる所であった。

弥生時代後期、中九州地方において最も顕著に変化する土器が甕である。古閑白石遺跡において出土した甕のうち1点を除いて全て脚台を有した在地系の甕である。残りの1点は筑後地方に見られる平底を呈していた。

かつて方保田東原遺跡^{註1}において土器の編年作業を行ったが、その時大まかにⅠ～Ⅴ期に分け、さらに各期で細分することができた。そのうちⅡ期とⅢ期が長胴で脚台を有する甕で、胴部表面にハケ目を施すもの(Ⅱ期)とタタキ目を残すもの(Ⅲ期)とに分けている。さらにⅣ期においては長胴で丸底となり、胴部表面にタタキ目を残しているものを考えている。またⅣ期から外来系の甕(庄内式)の出現を見る。

今回出土した甕は長胴で脚台を有し、胴部にはハケ目を施したものと、タタキ目を残したものとが見られ、長胴丸底でタタキ目を有した甕や外来系(庄内式)の甕の出土が無いところから、Ⅱ期とⅢ期に限定することができる。従って弥生時代終末期にあたり、未だ古墳時代に達していない時期であろうと考える。(第94図参照)

このことから、今回出土した各種の土器がこの時期を代表する標準的な資料となり得るものと考えられる。それだけでもこの調査でもたらされた成果は十分であろう。(中村)

註1 「方保田東原遺跡」山鹿市教育委員会 1982

第2節 方保田石原遺跡

1. 調査の経過

山鹿市議会議員河村修氏より、「馬見塚の若杉勝治氏から、自分の畑を耕作中に土器が出たと連絡がありましたので、急いで確認して下さい」との電話が入って来たのが昭和52年8月5日のことであった。中村と倉原はとりいそぎ山鹿市大字方保田字馬見塚931の若杉勝治氏をたずね、土器出土の状況等について話を聞き、現地へと赴いたのであった。現地は方保田東原遺跡の北側にあたり、方保田川を挟んで僅か200mの距離に位置し、さらに馬見塚古墳群が北西200mの所に存在していた。土器は大字方保田字石原1467番地の畑を地下げした際、隣の畑（1468番地）の土手から出土したもので、その断面には数個の土器が顔をのぞかせていた。しかし、地下げ作業は完了し、すでに隣接する畑とも約1.6mの比高差をもっていて、遺構検出を行うには時間的・金銭的に余裕も無いところから遺物取り上げを中心とした作業にならざるを得なかった。そのため現場で遺物出土状況の図が書けなかったのが心残りである。

2. 遺跡の位置 (第118図)

先に述べたように、この遺跡は方保田東原遺跡の北側に位置し、方保田川を挟んで僅か200mしか離れていない。また、遺跡の北約200mには土師器を主体として出土する馬見塚遺跡。さらに、北西200mには古墳時代中期の馬見塚古墳群が存在している。この他にも多くの遺跡や、古墳が方保田地区には存在しており、弥生時代終末期から古墳時代にかけての一大遺跡群が形成されていたことがうかがわれ、その中心部に方保田石原遺跡が存在している。

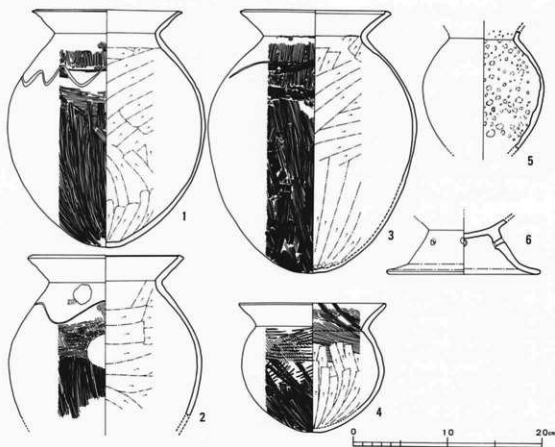
3. 遺構

すでに畑の地下げが完了していたため、遺構の確認調査は行うことができなかったが、僅かに土手断面において落ち込みを確認できた。落ち込みは、地表面から約1.4mの深さで、地山の褐色粘土層に掘り込まれ、長さ480cm、深さ20cmまでは確められた。土手面が遺構に対してどのような角度で切られているか不明なため、遺構自体の規模について現状では確認できないが、恐らく住居跡になるものと思われた。



- | | | | |
|----------|------------|--------|-------------|
| ①方保田東原遺跡 | ②大道小学校校庭遺跡 | ③方保田遺跡 | ④白石遺跡 |
| ⑤古岡ノ上遺跡 | ⑥石原遺跡 | ⑦馬見塚遺跡 | ⑧旧大道中学校校庭遺跡 |
| ⑨塚の本遺跡 | ⑩馬見塚古墳群 | ⑪神社裏古墳 | ⑫経塚古墳 |
| ⑬方保田古墳 | ⑭端山塚古墳 | ⑮亀塚古墳 | |

第118図 周辺遺跡分布図



第119図 方保田石原遺跡出土遺物実測図

4. 遺物 (図版46-4~8、第119図)

遺物は6点出土したが、全て遺構内から一括して出土したものである。壺と鉢のみだが、布留併行期の資料としては好資料と言える。

1は口径16cm、高さ20.1cmで最大径21cmを胴部やや中位に有している。口縁部は僅かに外反しつつ「く」字に開き、中位で肉厚となっている。口唇部は先端をつまみ出しているため僅かに凹んでいる。肩部は最大径が中位にあるためで肩になっており、一条の波状文をめぐらせている。底部は尖り気味の丸底で全体に器壁が薄い。器面調整は、口縁部では両面ナデ調整で、胴部は外面に細いタテ方向のハケ目を施しているが、肩部ではヨコ方向のハケ目を施した後波状文を行っている。内面は全面にヘラケズリを行っている。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良く茶褐色を呈している。なお胴部にはススの付着が著しい。

2は口径16.6cm、最大径20.5cmを測るが、底部を欠くため器高は不明。最大径は胴部やや上位になると思われる。肩部には大きな波状文を描いており、肩部直線的に胴部へ続くため肩が張る感じがする。口縁部は内湾気味に「く」字に開いており、端部は内側に摘み上げている。器面調整は、

口縁部は全面ナデ仕上げで、胴部は外面はハケ目、内面はヘラケズリを施している。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良いが、器壁が全体に厚く、茶褐色をしている。一部では器面剝離も見られる。なお胴部にはススの付着が著しい。

3は口径16cm、器面27.9cm、で最大径22.2cmを胴部やや上位に有している。口縁部は直線的に「く」字形となり、先端では内側を山形に積み上げている。肩部には波状文が変形した沈線を一条描いており、やや膨らみを持ちながら胴部へ続き底部は丸底であり尖らないため全体に丸味をもった器形となっている。器面調整は口縁部では全面ナデ仕上げ、胴部では外面には全面にハケ目を施しているが、胴部下位ではタタキの痕を僅かに残している。内面は全面ヘラケズリで、底部には指頭圧痕が残されている。胎土には砂粒を含むが焼成は良く茶褐色を呈している。胴部全面にススの付着が著しい。

4は口径15.6cm、器高13.6cmを測る。1～3に比べると小型の壺である。口縁部は外反して、端部で僅かに立ち上がっている。胴部は球形を呈しているが、底部は尖り気味である。器面調整は口縁部外面はナデ仕上げ、内面はハケ目を行っている。胴部外面は上位から中位にかけてタタキ目を施し、その後全面にハケ目を施している。内面では上部でハケ目、以下はヘラケズリを行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。赤褐色をしている。

5は口縁部と底部を欠く壺である。そのため口径、器高等不明で胴部径12.9cmを測るのみである。器面調整は全面ナデ仕上げであるが、内面における器面剝離が著しい。胎土には砂粒を含まず、焼成も良く、赤褐色をしている。

6は脚台付鉢の脚部である。鉢は欠くため、口径、器高等不明。脚部径は16.3cmで4個の透しを穿っている。器面調整は全面ナデ仕上げで、胎土には砂粒を多く含み、焼成も良くない。そのため、器面の剝離が見られる。黄褐色をしている。

5. ま と め

遺跡としての性格や範囲等今回の調査では明らかにすることができなかったが、遺構のレベルが畑地の地表下140cmであることから推察して、遺跡の主体部は未だ地下に眠っているものと思われる。従って北側に隣接する馬見塚遺跡の一部とも考えられるが、中間点での遺物採集が行われていないところから一応別の遺跡として認識するべきであろう。遺物は古墳時代初頭に位置付けられた布留式土器の影響を強く受けた外来系土器で、方保田東原遺跡のⅤ期に属しており、当時方保田川を挟んで両側に遺跡が広がっていたことを物語っている。となれば、方保田東原遺跡といった狭義の遺跡として理解するのではなく、方保田地区全域に広げて当時の集落形態を解明してゆかなければなるまい。従って食糧の問題にしても、方保田川に沿って形成された湿地帯や、菊池川に沿って広がる日出（ひいで）の氾濫原も現在と同じ様に水田が営まれた可能性が強いと言えよう。（中村）

第3節 藤井前田遺跡

1. 調査の経過

昭和54年2月1日、豚小屋増築中に土器が出たので見に来て欲しいとの連絡を受け、博物館から中村と倉原が出向いた。現地は山鹿市大字藤井字前田1687番地で、所有者は一安哲也氏であった。私達が現地に着いた時にはすでに遺物の一部が掘り出されており、土師器でも古いタイプであると判断した。作業は、豚小屋を南側に増築し、さらに南端には汚物溜め用の枡を作るために1.5m四方で深さ1m程度掘り下げる予定で排土作業を行っている時出土したものであった。作業はこの枡を作ったら完了する段階とのことで、止むを得ず、この中の遺物を取り上げるのみに終始してしまい、ついに図面はおろか写真も取る時間的余裕が無かったことは残念でならなかったが、午前中で82個体分の完形品や破片を採集した。なお調査に際して多大の御協力を賜った地主の一安哲也氏に対し深く感謝いたします。

2. 遺跡の位置と環境 (第120図)

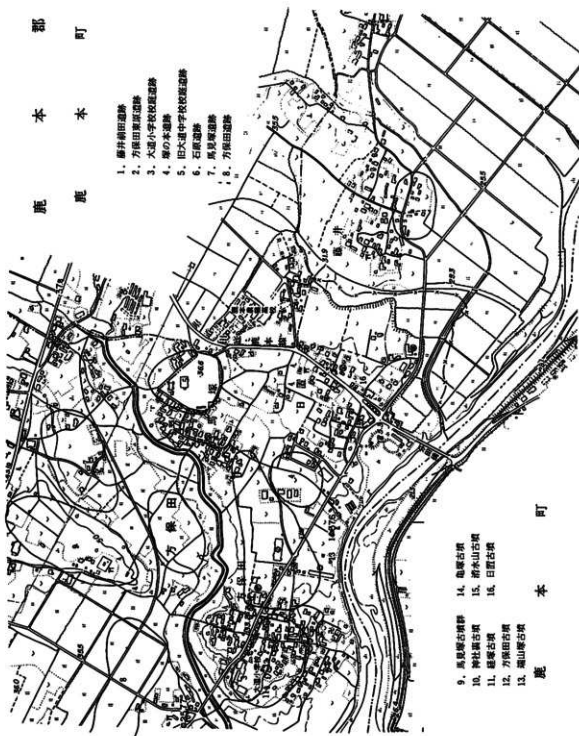
山鹿市大字藤井字前田は山鹿市東南端に位置し、東側と南側は鹿本町と接している。南側には菊池川が流れ、合志川との合流点が、遺跡から約500mの所に存在している。遺跡は菊池川右岸に形成された河岸段丘の微高地に立地しており、標高約26mの高さを測る。遺跡の規模は今回の限られた狭い区域での出土からは推察の域を脱し得ないが、微高地の広がり方が東西120m、南北70mで、北側の台地(標高31m)へと続いている。現在この台地上には藤井の集落が形成されており、遺跡はこの台地の南端部に位置している。そのため遺跡の広がりはこの南端部微高地を中心に広がるものと考えられる。

藤井地区の西隣に方保田地区が存在しているが、ここは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡が密集している。とくに巴形銅器をはじめとした青銅器を集中して出土した方保田東原遺跡は当遺跡から西に約1kmの所に広がっている。またその周辺には馬見塚古墳群、亀塚古墳、端山塚古墳、清水山古墳をはじめ、多くの古墳が散在しており、これらは古墳時代中期(5世紀)に比定されている。従って、遺跡群と古墳群とは時間的に僅かながら差が認められ、古墳に伴伴する遺跡はこれまで確認されていない。その意味からも、今回採集した遺物が古墳時代前期のもので、古墳築造と関わりのある人々の所産であるところからも、その意義は大きいと言えよう。なお藤井地区には1基前方後円墳^{註2}の存在をうかがわせる資料がある。

註1 原口長之「原始・古墳文化」『山鹿市史』1985

註2 大正年間に書かれた「大道村郷土誌」によれば「この前方後円は藤井部落の東端を距る

鹿 本 町
鹿 本 町



1. 藤井村田遺跡
2. 万保田東遺跡
3. 大田小学校校庭遺跡
4. 塚の木遺跡
5. 旧大田中学校校庭遺跡
6. 石原遺跡
7. 馬見塚遺跡
8. 万保田遺跡

9. 馬見塚古墳群
10. 神社遺古墳
11. 越塚古墳
12. 万保田古墳
13. 瑞山塚古墳
14. 龜塚古墳
15. 清水山古墳
16. 日置古墳

第 120 図 周辺遺跡分布図

約120間の地点に至り、田地の中に在りて東側及西側南端の小部分は破壊せられて現今は田地となり、然るに東側の如きは、絶壁となりて高さ2間余比地方の者は単に塚と称して特に名としてはなし。又伝説とてなし。内部に入るべき口もなく又遺構もなし。」と記載されていて、近年まで存在していたが、圃場整備事業によって昭和40年代後半に消滅している。今となっては確認の方法がない。

3. 遺物の出土状況

遺物は汚水溜橋用に掘られた1.5m四方の広さの中から一括して出土したものだが、その中でも北西コーナーを中心とした限られた地点で集中していた。地表から約50cm程度の深さで、黒色土層から意識的に重ねた状態で出土しており、当初単純に「土器溜め」ではと考えたが、あまりに完形品が多く、さら故意に重ねたり、大きな壺の中に小さな壺を入れたりと作為的な点が多く見られたため、果して土器溜めとすべきか、はたまた、祭祀行為の場なのか問題が残っている。掘り出した区域が狭いため、遺構の確認も困難をきわめたが、幾重にも重なった遺物は地山層にしっかりと置かれていたため、何らかの遺構の中に遺物を入れたものと思われた。さらに埋土が黒色土層のみで他の色調の層が見られなかったことは、短時間に埋められたものと推察された。

これらのことから、この遺構は単純な土器溜めとはなり得ないものと判断される。さらに出土状況から考えて、構状遺構の中に廃棄された土器とも異なっているように理解される。従って祭祀行為の場か貯蔵穴の可能性が強い。

4. 遺物 (図版46-9、47-55-8、第121-127図)

総数82点は全て土師器で、器種は壺、壺、甕、甕、高坏、鉢の6種類が見られる。これらはさらに細分化されるものもあり、以下器種ごとに述べてみることにする。

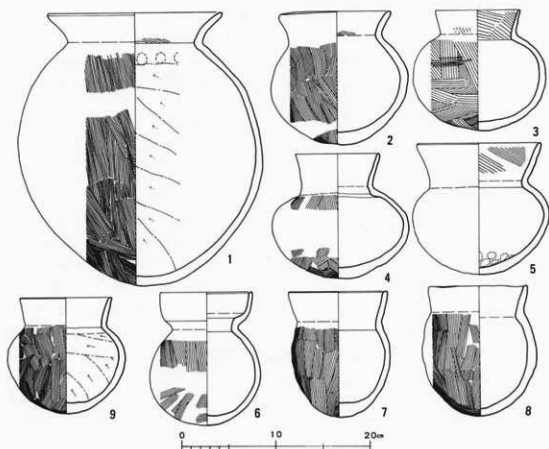
壺 (図版 第121図-1)

1点のみである。口径18.4cm、器高18.8cm、最大径26cmを測る。口縁部は外反しつつ「く」字形に折れ、胴部は球形を呈している。口縁部内面はハケの後ナデ消して、頸部から肩にかけては指頭圧痕を残す。胴部はヘラ削りである。胴部中位にスガが付着し、底部内面にコゲ付きが残る。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は茶褐色を呈し、胴部中位は黒色である。全体に歪んでいる。

壺 (図版 第121図-2～第123図-30)

総数29個を出土しており、技法的な相異によって4種類に分類できる。

- 1類 内面をナデ調整によって仕上げている。(2～8)
- 2類 内面をヘラ削りで仕上げている。(9～13)
- 3類 頸部に輪轆みの粘土帯を残し、内面を指頭によるナデ仕上げを行っている。(14～18)



第 121 図 藤井前田遺跡出土遺物実測図

4 類 所謂小形丸底埴と呼ばれるもの。(19~30)

これらは、無論形態的にも分類ができるが、一括資料という観点から技術的なものに重点を置いて考えてみたい。

1 類 (第121図-2~8)

2 は口径11.6cm、器高14.1cm、最大径13.7cmを測る。口縁部は外反しながら開いている。胴部中に張りをもち、底部は丸底となっている。器面は、口縁部では、両面ハケ目の後、ヨコナデを施している。胴部は外面をハケ目、内面はナデ調整を行っている。胎土は砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黄褐色を呈している。

3 は口径9cm、器高12.2cmを測る。口縁部は短く直口し、胴部は中位に最大径14.1cmを有し、球形を呈している。口縁部では全面にハケ目を施し、外面のみナデ消している。胴部は外面に粗いハケ目とヘラによる条痕を一部に残している。内面は全面ナデ調整である。胎土は砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない。色調は底部では黒く、その他は茶褐色を呈している。

4 は口径8.9cm、器高13.2cm、最大径14.4cmを測る。口縁部は僅かに内湾しつつ、直口している。胴部の張りは大きく、中位よりやや上にあるため肩が張った感じである。しかし、その形は歪んで

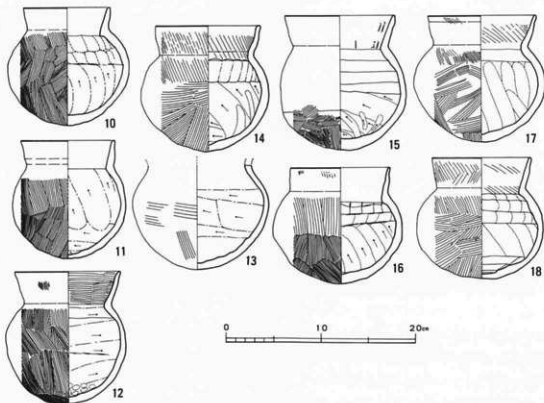
おり、一部には亀裂が生じているところさえ見られる。器面は、口縁部では両面ヨコナデ、胴部外面は全面ハケ目を施し、中位はナデ消している。内面は全面ナデ調整を行っている。肩部内部には粘土帯が見られる。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。色調は黄褐色で、一部赤褐色を呈している。

5は口径13cm、器高13.9cm、最大径14.5cmを測る。口縁部は長く、内湾気味に開いている。胴部は中位よりやや上に張りもち、尖り気味の丸底となっている。口縁部の外面の一部と内面にハケ目を施し、その後ナデ消している。胴部は全面ナデ調整で、底部には、指頭圧痕を残している。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黄褐色を呈している。

6は口径9.7cm、器高14.1cm、最大径11.7cmを測る。複合口縁の壺だが、形はかなり歪んでいる。胴部は球形で、外面にはハケ目を施し、内面はナデ調整である。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。

7は口径10.5cm、器高13.3cmを測る。口縁部に最大径10.4cmを有し、内湾気味に開いている。胴部は張りが小さく、長胴気味である。器面は、口縁部では両面ヨコナデ、胴部では外面はハケ目、内面はナデ調整を行っている。胎土には小さい砂粒を含むが、焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。

8は口径10.4cm、器高13.7cm、最大径12.2cmを測る。口縁部は短く、内湾気味に僅かに開いてい



第 122 図 藤井前田遺跡出土遺物実測図

るが、部分的に内側に押し込まれており、歪んでいる。胴部の張りは小さく、丸底となっている。器面調整は、口縁部は両面ヨコナデ、胴部外面はハケ目、内面はナデ調整である。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は、底部では黒色で、他は茶褐色を呈している。

2類 (第121図-9～第122図-13)

9は口径9.6cm、器高12.7cm、最大径12.5cmを測る。口縁部は直口し、肩の張った胴部で丸底となる。口縁部は両面ナデ調整で、胴部は外面ではハケ目、内面はヘラ削りを施している。肩部内面には粘土接合面を残している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は底部は黒く、他は茶褐色を呈している。

10は、口径9.1cm、器高12.5cmを測る。口縁部は短く、僅かに開いている。胴部は球形を呈し、中位に最大径12.85cmを有している。口縁部は両面ヨコナデ、胴部外面はハケ目を施し、内面は上部に粘土帯を残し、指による調整を行っている。下部はヘラ削りである。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。

11は口径9.9cm、器高12.5cmを測る。口縁部は短く、直口気味に開いている。胴部は球形で、中位に最大径11.9cmを有している。器面は口縁部では両面ナデ調整、胴部外面は上位に粗いハケ目、下位に細かいハケ目を施している。内面の上位は縦方向のヘラ削り、下位は横方向のヘラ削りを施している。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は口縁部の一部が黒いが、他は茶褐色を呈している。

12は口径11.2cm、器高14.1cm、最大径12.6cmを測る。口縁部は比較的長く、僅かに内湾しながら開いている。胴部は張りをやや上位に有し、丸底となる。器面は外面には全面にハケ目を施し、口縁部ではナデ消している。内面においては、口縁部はハケ目、胴部はヘラ削りを施している。とくに胴部中位では粘土帯の接合線を残している。底部には指頭による圧痕を残している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は一部黒色が見られるが、他は茶褐色を呈している。

13は口縁部を欠いているため、口径、器高は実測不能。最大径は14.4cmを測る。胴部はやや上位に張りを有している。器面は外面に粗いハケ目、内面はナデとヘラけずりを施している。胎土には砂粒を含み、焼成も良くない。色調は茶褐色を呈している。

3類 (第122図-14～18)

14は口径11cm、器高13.3cm、最大径13.6cmを測る。口縁部は僅かに内湾して立ち上がり、胴部は張りが小さく不整形な丸底となっている。外面には全面に粗いハケ目を施し、口縁部では内外共にナデ消しているが、完全には消えず痕跡を残している。内面の胴部上位には粘土帯を残し、下位では指頭によるナデ調整を行っている。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。色調は黄褐色を呈している。

15は口径11.6cm、器高14.2cmを測る。口縁部は僅かに開きながら、直口し、胴部の張りが小さな壺である。胴部は最大径13.3cmを中位よりやや下に有し、そこから底部に向って曲線を描いている。そのため胴部下位に稜線らしきものが見られ、これより上位ではナデ調整、下位ではハケ目を施している。底部は尖り気味の丸底である。内面では、胴部上位には3本の粘土帯をめぐらし、下位では指頭によるナデ調整を行っている。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。色調は口縁部の一部に

は黒斑があるが、他は黄褐色を呈している。

16は口径10.4cm、器高12.4cm、最大径13.7cmを測る。口縁部が直口する短頸壺である。胴部は張りが小さく、中位に位置しており、底部は丸底となっている。外面は口縁部ではハケ目の後、ヨコナデを行い、胴部の上位には粗いハケ目、下位は細かいハケ目を施している。内面は口縁部ではヨコナデ、胴部上位には輪積みの粘土帯が残り、下位では指頭によるナデ調整を行っている。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。色調は黄褐色を基本とし、胴部から底部にかけては黒色を呈している。

17は口径11.4cm、器高13.4cm、最大径13.1cmを測る。口縁部は僅かに内湾しながら開いていて、両面ともハケ目を施した後、ナデ消している。底部は不整形な丸底で、器面は外面上部では細かいハケ目、下部では粗いハケ目を施している。内面は指頭によるナデ調整を行っている。頸部内面には粘土帯が幅2cmで残っている。胎土には小さな砂粒を多く含むが、焼成は良い。色調は黄褐色を施した部分は少なく、黒色と灰色を呈した部分が多い。

18は口径11.4cm、器高12.9cm、最大径13.4cmを測る。口縁部は直口し、胴部は不整形な球形を呈している。張りは胴部中位に有し、内面には肩部と底部で粘土帯を残して整形している。そのため歪な感じを受ける。外面は粗いハケ目を全面に施し、口縁部ではナデ消している。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黄褐色を呈しているが、一部に黒色が見られる。

4類 (第123図-19~30)

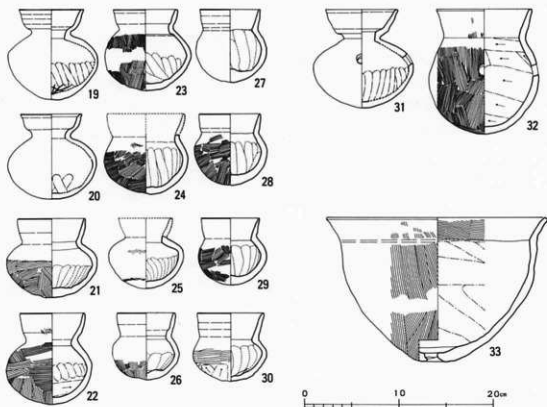
19は口径6.8cm、器高9.5cmを測る。複合二重口縁の壺である。頸部は短い、鋭くくびれている。胴部はやや上位に、最大径9.5cmを有しているため肩が張ったように見える。器面調整は、外面にヘラ研磨、内面は口縁部にヘラ研磨、胴部上位はナデ、下位はヘラ削りを施し、底部にはヘラ条痕が残っている。胎土には砂粒が少なく、焼成も良く、光沢がある。色調は一部に黒斑を残し、赤褐色を呈している。

20は口径6.4cm、器高8.9cmを測る。二重口縁の壺である。口縁部は内湾しつつ立ち上がり、口唇部は外反している。胴部は球形で、中位に最大径9.9cmを有し、底部は平底気味の丸底となっている。器高は外面をヘラ研磨、内面は口縁部にヘラ研磨、胴部は上位をナデ、下位では部分的にヘラ削りを残している。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良く、光沢をもっている。色調は一部に黒斑があるが、茶褐色を呈している。

21は口径7.1cm、器高8.3cm、最大径9.6cmを測る。口縁部は内湾気味に直口し、胴部は張りが強く、部分的には角張ったところもある。器面は口縁部から胴部上位にかけてナデ調整を行い、胴部下位は粗いハケ目を施している。内面は指頭による調整を行っている。胎土には小さな砂粒が含まれ、焼成は良い。色調は赤褐色を呈している。

22は口径6.96cm、器高9.7cm、最大径9.1cmを測る。口縁部は僅かに内湾気味に直口し、胴部は球形を呈している。器面は粗いハケ目を全面に施し、口縁部はその後ナデ消している。内面は口縁部でヨコナデ、胴部は指頭圧痕、底部ではヘラ削りを施している。胎土は砂粒を含まず、焼成も良い。色調は赤褐色である。

23は口径6.8cm、器高8.5cm、最大径8.7cmを測る。粗雑な作りで、口縁部は僅かに内湾気味に直口



第 123 図 藤井前田遺跡出土遺物実測図

している。胴部は球形だが、歪な形となっている。器面は口縁部外面ではヨコナデ、胴部にはハケ目を施している。内面は口縁部でヨコナデ、底部には指頭による調整痕が見られる。胎土には小さな砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない。色調は赤褐色を呈している。

24は口縁部を欠くため、口径、器高は実測不能、最大径は8.4cmを測る壺である。胴部は張りが小さく、多少凹凸したところが見られる。器高はハケ目を施し、内面は指頭による調整を行っている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は底部では黒色で、他は赤褐色を呈している。

25も口縁部を欠くため、口径、器高は実測不能、最大径は7.4cmを測る壺である。胴部の張りがやや中位より上にあるため、肩が張った感じがする。器面は細かいハケ目を一部に残すが、殆んどナデ調整を行っている。内面は指頭による調整を底部近くで行っている。胎土はきめの細かい土で、砂粒が見られず、焼成も良い。色調は赤褐色を呈しているが、一部に黒斑がある。

26は口径6cm、器高7.1cm、最大径7.1cmを測る。口縁部は内湾しつつ直口している。器面は両面共ヨコナデの調整を施している。胴部は粗いハケ目を施していて、内面は指頭圧痕を施しているため形が歪になっている。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。色調は茶褐色を呈している。

27は口径6.3cm、器高7.7cm、最大径7.5cmを測る。口縁部は内湾気味に直口し、全面ナデ調整を行

っている。胴部は不整形な球状をなし、器面は外面ではナデ調整、内面は指頭による調整を行っている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は赤褐色を呈している。

28は口径6.5cm、最大径7.1cmを測る。口縁部は内湾気味に直口し、全面ナデ調整を行っている。胴部は球形を呈し、器面は外面にはハケ目、内面には指頭による調整を行っている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は一部に黒斑が見られるが、赤褐色を呈している。

29は口径6.2cm、器高7.1cm、最大径7.2cmを測る。口縁部は直口し、両面ヨコナデを施している。胴部は球形を呈し、粗いハケ目を施している。また内面には指頭による調整を行っている。胎土には砂粒を含み、表面はザラザとしているが、焼成は良い。色調は赤褐色を呈している。

30は口径6.9cm、器高7.2cm、最大径7.8cmを測る。口縁部は長く直口し、胴部は粗い作りの壺である。器面は口縁部では、内外面共にヨコナデを施し、胴部は外面には粗いハケ目とヘラ削りを施し、内面には指頭による調整が見られる。胎土には、小さな砂粒を多く含むが、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈している。

壺 (第123図-31・32)

2点出土し、32についてはタコツボの要素が強いが、孔が器高の程中位に在ることから壺と考えた。

31は口径7.6cmを測る複合口縁をした壺である。頸部は鋭くくびれ、大きく張った胴部へと続く。胴部の張りは中位よりやや上位に位置し、10.6cmを測り、器高10.4cmより僅かに大である。孔は胴部上位に配し、孔の下端は破損しているが、孔の直径はおおよそ1.1cmと思われる。器面調整は外面においてはヨコナデ、及び胴部下位ではヘラ研磨も見られる。内面は胴部下位でヘラ削りが見られ他はヨコナデを施している。胎土は砂粒を含まず、焼成も良いが、部分的に器面剝離が見られる。色調は赤褐色を呈している。

32は口径10.1cm、器高13.2cm、最大径11.6cmを測る。口縁部はゆるやかな「く」字形を呈し、直口気味に開いている。そのため頸部のくびれはゆるやかで、胴部の張りも小さい。孔は直径1.1cmで胴部のやや上位、器高の中位に配している。外面には全面にハケ目を施し、口縁部ではナデ消している。内面にはヘラ削りを施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は赤褐色である。

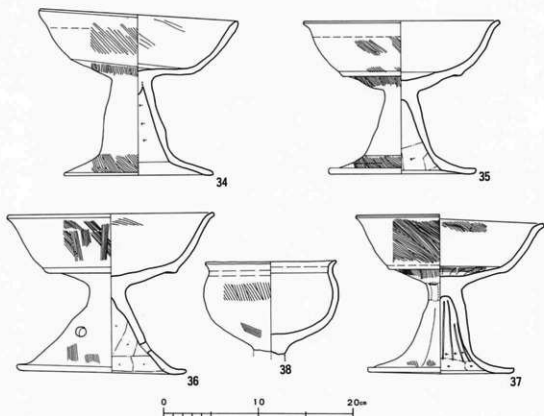
甗 (第123図-33)

33は口径23.1cm、器高15.3cm、最大径20.2cmを測る。口縁部は「く」字形に外反した鉢形を呈している。胴部は張りが小さく、尖り気味の底部へと向っている。底部には孔を1個配していて、孔の直径は、1.8cmである。器面は口縁部で両面ハケ目を施し、外面ではその後ナデ消している。胴部は外面をハケ目、内面はヘラ削りを施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は黄褐色を呈している。

高坏 (図版 第124図-34~37)

4点出土しており、全て口縁部が大きく開いている。脚部は柱状部が細いものと大きく広がるものとに分けられる。

34は口径21cm、裾部径16.8cmを測る。坏部が傾斜しており、器高が17.7cm~16.2cmとなっている。口縁部と体部との間には僅かに段を有している。口縁部は内湾気味に大きく開き、口唇部は直口し



第 124 図 藤井前田遺跡出土遺物実測図

ている。器面は両面とも条痕が見られる。脚部、柱状部は約 8 cm の高さをもち、大きく開いた裾部へと続く。器面は外面では、裾部にハケ目を残しているが柱状部はナデ調整を行っている。内面はヘラ削りを施し、裾部はヨコナデを施している。胎土はきめ細かな土で、焼成も良い。色調は坏の一部に黒斑が見られるが、他の高坏に比べると赤褐色でも黄色味が強い。

35 は器高 16.1 cm、裾部径 15.6 cm を測る。比較的均整がとれた高坏である。坏部径 21 cm で口縁部は僅かに外反し、体部との界には段をめぐらしている。脚部は柱状部が高く、裾部は大きく開いている。器面は、外面はハケ目調整の後、ナデ調整を行っているが、部分的にハケ目を残している。内面は坏部ではナデ調整、脚部ではヘラ削りを施している。胎土はきめ細かで、焼成は良い。色調は口縁部外面に黒斑が見られるが、基本的には赤褐色を呈している。

36 は口径 21.6 cm、器高 16.8 cm、裾部径 18.1 cm を測る。坏部、口縁部は内湾気味に大きく開き、口唇部近くでは僅かに外反している。器面は内外面にハケ目調整を施し、その後ヨコナデで消している。脚部、坏部との接合部から裾部に向かって大きく開き、中位に 3 個の孔を配して、孔の直径は 1.1 cm である。器面は外面はヨコナデ、一部にハケ目を残し、内面は全面ヘラ削りを施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良くない。色調は赤褐色である。

37 は坏部及び脚部に歪みが見られ傾斜しているため、器高は 17 cm から 16 cm となっている。坏部口径は約 20 cm、深さ 6.6 cm を測り、脚部は裾部直径 15.7 cm となっている。坏部と脚部とのくびれは、中

位よりやや上部に位置し、坏部及び、脚部は大きく広がっている。坏部は、口縁部が内湾気味に広がり、口唇部近くで外反して、口唇部には浅い沈線が部分的に見られる。口縁部と体部との界は外面に段をめぐらしている。脚部は柱状部が高く、裾部は大きく開いている。内面はヘラ削りを施し、ヘラ痕を残している。器面は、坏部ではハケ目を施し、脚部にも一部ハケ目を残すが、全面にナデ調整を行っている。胎土には砂粒を僅かに含み、焼成は良い。色調は口縁部に一部黒斑があるが赤褐色である。

鉢 (図版 第124図-38～第127図-82)

総数45点出土し、このうち1類 脚を有するもの(38)、2類 口縁部が比較的長く「く」字に開くもの(39、40)、3類 口縁部が小さく外反するもの(41～47)、4類 口縁部が直口気味に開くもの(48～82)とに大まかに分けることができる。

1類 (第124図-38)

38は口径13.8cm、最大径14.2cmを測る。台付鉢であるが、脚台を欠いているため器高は不明。口縁部は短く、外反している。胴部は中位に張りをもっている。器面は外面に粗いハケ目を施しているが、その後ナデ消している。内面は、全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。

2類 (第125図-39～40)

39は口径17.1cm、器高12.8cm、最大径16.4cmを測る鉢である。口縁部は「く」字形に開き、わずかに内湾気味になっている。胴部は張りが小さく、丸底となっている。器面調整は、頸部外面に指頭による調整を施し、胴部下位は粗いハケ目を施し、他はナデ調整を行っている。内面は、口縁部はヨコナデ、胴部はヘラケズリを施している。胎土は砂粒が少なく、焼成も良い。色調は底部では黒色で、他は褐色を呈している。

40は口縁部が外反し、胴部の張りが小さい鉢である。口径17.1cm、器高7.6cm、最大径15.5cmを測る。胴部外面と口縁部内面にハケ目を施し、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。茶褐色を呈している。

3類 (第125図-41～47)

41は口径15.2cm、器高8.1cmを測る。口縁部は外反し、胴部は張りが小さく、最大径は口縁部にある。底部は丸底で、外面にはススの付着が著しく、底部以外には全て付いている。器面調整は、口縁部では両面ナデ、胴部外面はハケ目、内面はナデを行い、底部近くに条痕が見られる。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調はススのため黒褐色を呈している。

42は口径13cm、器高7.6cm、最大径13.6cmを測る。口縁部は外反し、胴部上位に張りをもつ。器面調整は、外面は全面にハケ目を施し、口縁部はその後ヨコナデを行っている。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。

43は口径13.2cm、器高6cmを測る。口縁部は外反しつつ「く」字形に折れている。胴部は丸く浅い。器面調整は、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ目の後ヨコナデを施している。胴部外面は、上位でヨコナデ、下位は粗いハケ目とヘラ削りを施し、内面は全面ナデ調整で、底部には条痕を残している。胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良い。色調は口縁部の一部が黒色で、他は茶褐色を

呈している。

44は口径13.6cm、器高5.7cmを測る。口縁部は外反しながら開く。胴部の張りは小さく、丸底に近くなっている。器面は、内面では全面ナデ調整だが、外面では口縁部はヨコナデ、胴部は粗いハケ目とヘラ削りを施している。なお、胴部中位では粘土の皺が多く見られる。胎土は砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黄褐色を呈している。

45は口径14.7cm、器高5.7cmを測る。口縁部は小さく外反し、胴部は最上部に最大径15.9cmを有していて、底部は尖り気味で、わずかに平坦となって、肉厚である。器面は、外面では木材端部による条痕を残し、口縁部はヨコナデで仕上げている。内面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は口縁部に黒斑があるが、他は黄褐色を呈している。

46は口径11cm、器高7.5cmを測る。口縁部は外反しつつ、内傾している。胴部上位に最大径12.2cmを有し、丸底となる。器面調整は、外面では全面にハケ目を施し、口縁部ではその後ヨコナデ、底部近くではその後ナデ消している。内面は底部近くにヘラ削りを施し、他はナデ調整である。胎土には小さな砂粒を多く含み、焼成も良くない。色調は茶褐色を呈している。

47は口径16.8cm、器高6cmを測る。口縁部は不整形で、全体に肉厚であり、仕上げは良くない。口縁部先端が外反し、口径に比べ浅い感じのする同部である。底部外面にハケ目を施し、他の面は全てナデ調整で仕上げている。胎土には砂粒を僅かに含み、焼成は良い。色調は灰褐色を呈している。

4類 (第125図-48～第127図-82)

48は口径15.2cm、器高6cmを測る。口縁部は直口し、胴部は直線的に底部に向っている。器壁は肉厚で、底部外面には粗いハケ目を施しているが、他の面は全てナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は灰褐色を呈している。

49は口径15.3cm、器高6cmを測る。口縁部は直口気味に開き、底部は平坦に近い丸底になっている。器面は全面にハケ目を施し、内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黄褐色を呈している。

50は口径に対し、胴部の浅い鉢である。口径は15.8cm、器高5.4cmを測る。口縁部はナデによって僅かに外反している。器面調整は外面全面にハケ目、内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黄褐色を呈している。

51は口径14.2cm、器高5.2cmを測る。口縁部は、開き気味に立ち上り、胴部は比較的浅い。底部は平坦気味になっている。器面調整は、外面には全面にシャープなハケ目を施し、口縁部はその後ヨコナデで消している。内面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黄褐色を呈している。

52は口径15.2cm、器高6.3cmを測る。口縁部は短く外反し、胴部は球状を呈している。器面調整は外面にハケ目、内面にナデを全面に施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は口縁部の一部に黒斑があるが、他は褐色を呈している。

53は口径15.5cm、器高6.3cmを測る。口縁部は直口し、胴部は直線的に底部に向い、底部は尖り気味の平底となっている。口縁部直下には僅かに稜線を遺している。器面調整は、外面でシャープな

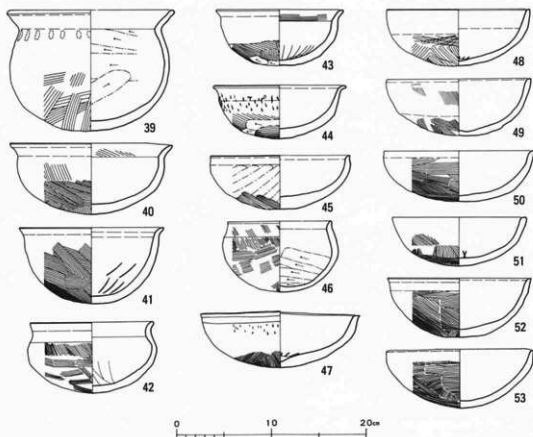
ハケ目を全面に施し、口縁部のみその後ヨコナデで消している。内面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は底部中心に灰褐色を呈し、口縁部では黄褐色を呈している。

54は不整形な鉢で、口縁部は正円にならない。口径は14.2cm、器高5.5cm、最大径14.4cmを測る。胴部は浅く、尖り気味の底部となっている。器面調整は、口縁部外面はヨコナデを施し、その後、胴部上位のハケ目を施し、さらに底部まで粘土を貼り付け、ナデ調整を行っている。内面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は褐色を呈している。

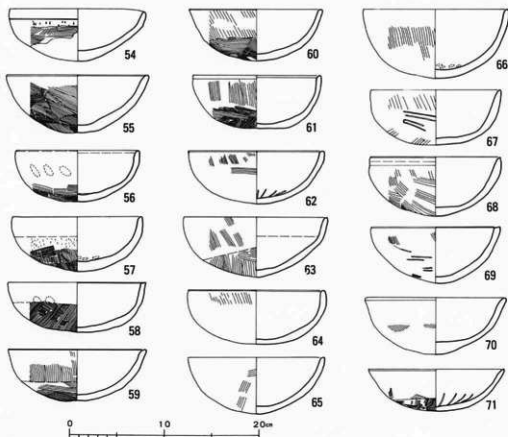
55は口縁部が2箇所、衝撃を加えられているため不正円となっている。口径は15cm、器面は6.1cmを測る。器壁は厚く、器面調整は外面にハケ目、内面は全面ナデ調整を行っている。とくにハケ目は板目を遣していた。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は褐色を呈している。

56は口径13cm、器高5.5cm、最大径は13.2cmを測る。口縁部は直口気味に立ち上り、口唇部は肉厚になっている。底部は丸底で、胴部中位には指圧痕を遣している。器面調整は外面はナデ調整を口縁部近くで行い、底部はハケ目を施している。内面は全面ナデ調整を行っている。

57は口径13.6cm、器高5.8cm、最大径13.8cmを測る肉厚な土器で、口縁部は直口気味で、胴部は直



第 125 図 藤井前田遺跡出土遺物実測図



第 126 図 藤井前田遺跡出土遺物実測図

線的に尖り気味の底部に向っている。器面調整は、外面は口縁部ではヨコナデ、胴部はシャープなハケ目を施している。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。色調は黄褐色を呈している。

58は口径14.6cm、器高5.3cmを測る不整形な鉢である。口縁部は直口し、胴部は浅い。器面調整は、口縁部外面ではヨコナデ、その後ハケ目を下部に施している。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は暗褐色を呈している。

59は口径14.5cm、器高5.5cmを測る。口縁部は開き気味で、胴部との界に稜線を残している。底部は丸底となる。器壁は厚く、口縁部ではハケ目、その後ヨコナデ、胴部は強いナデであるが、その痕がハケ目のようになっている。内面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黒斑があるが、黄褐色を呈している。

60は口径14.1cm、器高5.5cmを測る。口縁部と胴部との界に稜線をめぐらす鉢で、口縁部は直線的に開き、胴部は曲線を描きながら丸底となる。口縁部には粗いハケ目、底部には細かでシャープなハケ目を施している。内面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は黄褐色を呈している。

61は口径13.5cm。器高5.6cmを測る。口縁部が直口気味に開き、口唇部は僅かに凹線を認めること

ができる。底部は平坦になっている。器面調整は、外面では全面にハケ目を施し、内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は褐色を呈している。

62は口径14.2cm、器高5.6cmを測る。口縁部は大きく開き、胴部は浅く、平底に近い。器面調整は外面では口縁部にハケ目を施した後ナデ消しており、胴部はナデ調整を行っている。内面は口縁部でヨコナデ、底部もナデ調整を行っている。ヘラ圧痕も見られる。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は褐色を呈している。

63は口径15.2cm、器高6.4cmを測る。口縁部は直口し、胴部は直線的に底部に向っている。底部は尖り気味である。器面調整は、外面は全面ハケ目を施し、口縁部ではナデ消している。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。色調は褐色を呈している。

64は口径15.2cm、器高6.4cmを測る。口縁部はやや内行気味に立ち上り、底部はやや平坦になっている。器面調整は、口縁部外面にハケ目を施し、その後ナデ消していて、他は全面ナデ調整を行っている。内面もナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は灰褐色で、口縁部の一部が褐色である。

65は口径14.3cm、器高6cmを測る。口縁部は直口気味に開き、丸底となっている。器面調整は、口縁部をヨコナデで調整した後、底部にハケ目を施し、さらにナデ消している。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。色調は褐色を呈している。

66は口径15.3cm、器高7.3cmを測る。口縁部は直口し、胴部は丸味を持ち、丸底となる。器面調整は、外面に粗いハケ目を施し、口縁部はヨコナデ、底部ではナデで消している。内面は全面ヨコナデで、底部に指頭圧痕を残している。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良い。色調は赤褐色を呈している。

67は内厚な土器で、口径13.6cm、器高5.8cmを測る。口縁部は直口し、胴部は大きく折れ、底部に向い、底部では平坦になっている。器面調整は、外面全面に粗いハケ目を施し、その後口縁部ではヨコナデ、底部ではナデ消している。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は褐色を呈している。また、底部近くに柵圧痕が残されており、現長3.8mm、幅2.05mmを測ることができる。

68は口径13.7cm、器高6.3cm、最大径13.9cmを測る。口縁部直下に浅い凹みをめぐらし、胴部は膨らみをもちながら底部に向い、丸底となっている。器面調整は外面に粗いハケ目を施し、口縁部ではナデ消している。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には小さい砂粒を多く含み、焼成も良くない。色調は黄褐色を呈している。

69は口径13.5cm、器高6cmを測る。口縁部は直口気味に開き、底部も尖り気味の丸底である。器壁は厚く、器面調整は、外面に粗いハケ目、内面はナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含むが焼成は良い。色調は褐色を呈している。

70は口径14.4cm、器高6cm、最大径15cmを測る。口縁部は開き、胴部はヘラ削りのため直線的に底部に向い、口縁部との界には稜線を残している。底部は小さな平底となる。器面調整は、外面では口縁部をヨコナデした後、胴部にハケ目を施し、その後ヘラ削りを施し、さらにその面にナデ調整を行っている。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土に砂粒をあまり含まず、焼成も良い。色

調は底部は灰褐色で、口縁部は褐色を呈している。

71は口径14.3cm、器高4.5cmを測る。口縁部は大きく開き、胴部は浅い。底部は平底に近い状態となっている。そのため胴部中位に僅かな稜を残している。器面調整は、底部にハケ目、上位はヨコナデを施している。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。色調は褐色を呈している。

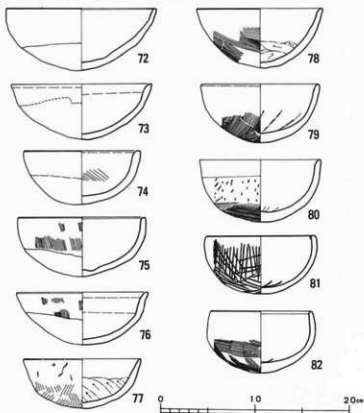
72は不整形な土器で正円にならない。口径15.8cm、器高6.5cmを測る。口縁部は大きく開き、胴部は直線的に底部へと向っている。底部は尖り気味の丸底である。器面は前面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は口縁部近くに黒斑を有するが、他は褐色である。

73は口径14.9cm、器高5.3cmを測る。口縁部は直線的に開き、胴部との界には稜線をめぐらしている。底部は尖り気味である。器面調整は、口縁部外面ではヨコナデ、胴部はへら削りの後ナデ調整を行っている。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は灰褐色を呈している。

74は肉厚な土器で、口径12cm、器高5.7cm、最大径12.4cmを測る。口縁部が直口し、胴部は直線的に尖り気味の底部へと続いている。器面調整は外面は全面ナデ調整、内面は一部にハケ目を施し、他はナデ調整を行っている。胎土には砂粒は無く、焼成も良い。色調は灰褐色を呈している。

75は口径13.5cm、器高6.3cmを測る。口縁部は直口し、胴部は直線的に底部に向っている。そのため胴部中位に稜を残している。底部は尖り気味の丸底である。器面調整は、外面はハケ目を施し、その後ナデ消して仕上げている。また、底部近くは強くナデ消している。内部は全面ナデ調整を行っている。胎土には小さな砂粒を含み、焼成も良い。色調は灰褐色を呈している。

76は口径13.7cm、器高5.6cmを測る。口縁部は外反し、胴部は膨らみが小さく、丸底となっている。器面調整は、外面では全面にハケ目を施し、胴部はその後ナデ消している。その界には稜線が残るほど強い。内面は全面ナデ調整を行っている。器壁は肉厚である。全体の造りは粗雑である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は灰褐色を呈している。



第127図 藤井前田遺跡出土遺物実測図

77は口径12.3cm、器高5.2cmを測る。口縁部は直線的に大きく開き、胴部は浅く、底部も平底気味の丸底となっている。そのため、胴部中位に僅かに稜線を残している。器壁は肉厚である。器面調整は、外面では全面粗いハケ目を施し、口縁部ではナデ消している。内面は口縁部ではヨコナデで、下位はヘラ削りを施している。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良い。色調は赤褐色を呈している。

78は口径13.3cm、器高6.3cmを測る。口縁部は大きく開き、胴部の張りが少ない。丸底となっている。器面調整は、口縁部では両面ヨコナデ、胴部外面はハケ目、底部はその後ナデ消している。内面はヘラ削りを行っている。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は褐色を呈している。

79は口径12.1cm、器高6.2cm、最大径12.6cmを測る。口縁部が直口し、胴部は張りがなく、丸底となっている。器壁は厚く、器面は、口縁部ではヨコナデ、胴部はハケ目を施し、内面は全面ナデ調整で、ヘラによる条痕を残している。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。

80は口径12.8cm、器高6.5cmを測る。口縁部に最大径を有し、直口している。胴部は張りが小さく丸底となっている。器壁は肉厚である。器面調整は、口縁部外面ではヨコナデ、胴部はナデ、底部外面はハケ目を施し、内面は全面にナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。色調は茶褐色を呈している。

81は口径11.4cm、器高6.2cm、最大径12cmを測る。口縁部は内湾し、胴部は球形を呈している。器壁は厚く仕上げている。器面調整は、外面では条痕文を施し、内面では全面ナデ調整を行っている。底部に条痕を残す。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。色調は胴部に黒斑を見るが、他は茶褐色を呈している。

82は口径10.6cm、器高6.6cmを測る。口縁部は内湾気味に開き、胴部中位に最大径11.5cmを有している。底部は尖り気味の丸底である。器面調整は、外面では口縁部でヨコナデ、胴部はハケ目を施している。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土には砂粒は含まず、焼成は良い。色調は赤褐色を呈している。

5. ま と め

遺物は、製作→使用→廃棄といった時間的経過を辿っていることは周知の事実である。とくに土器の場合、素材の土が柔らかいため製作者の意識が鋭く反映されている。さらに、それは時代と共に、また地域によって変化しているのである。我々はこの変化を利用して、土器の編年を組み立てているのであるが、現実問題としてこの編年作業を行うにあたっては、遺構の切り合いや、層位等によって相対年代を決定しているのである。ところが、大方の遺物は廃棄された段階での出土状況であり、製作された時間を示す形態的变化では、使用期間という時間差を無視していると言えるのではなかろうか。つまり土器はその製作活動の中では、整形の段階で形が決定されており、その時点での時間を留めていると言っても過言ではない。次の乾燥・焼成といった一連の製作過程での時間的経過、さらに搬出・使用・破損・廃棄といった使用過程による時間的経過を無視しているのである。従って、廃棄された段階での形態的変遷によって得られた編年は、製作された段階における

形態の変化とは、厳密に言えば異なっていると言わなければなるまい。その意味からすれば窯跡から出土した土器によって編年を進めるのが理想であるが、今まで土師器等の窯跡の発見は少なく、僅かに須恵器窯が実施されているに過ぎない。

今後は単に編年のみならず、土器の使用期間等の検討も併せて行うべきであろうと考える。その意味から、今回出土した遺物について考えてみたい。

82個の土器は一括して出土したものである。このことは製作年代は別であっても、少なくとも廃棄（埋納）の時期は同一と認識されるものである。また、これらの形態を詳細に検討を加えることによって形式認定はともかく、その変化が見られ、ひいては土器製作年代の前後関係及び廃棄されるまでの使用期間の限定に一步近づけるのではなかろうか。

さらにこれらの土師器のうち、とくに丁寧な作りの土器が見られた。19・20・31の3点である。これらは外面をヘラ研磨で仕上げ、胎土もきめ細かい粘土を使用しており、他の土師器に比べて明らかに異なっていた。さらに器種としては壺と甕であるが、器形としては同じ複合口縁で、胴部が大きくなる小形丸底壇の形態をとっていた。他の小形丸底壇に比較してみると、一層技術的な巧拙の差が認められる。この違いは土器製作者の技術的な差に基くものであるが、同一製作集団内における個人の差であるのか、他の製作集団によって製作されたものを持ち込んだものかが、問題となってくる。さらにこれらは同一時間内におけるものか、時間的差異によって生じた形態的变化によるものかといった検討をする必要がある。

まず、同一集団内における個人差について考えた場合、製作時間を同時と見なすことができる。しかし、同時に製作されたものが、この遺跡に持ち込まれたとすれば、巧品と拙品が数量的に均衡のとれた状態が近くなる可能性が高いと判断される。

では他の集団からもたらされた場合はどうであろうか。この場合土器が製作集団に持ち込まれた場合と遺跡に直接持ち込まれた場合とが考えられる。先者の場合、持ち込まれた時点ですでに巧品が出来上がっており、それを見本として他の拙品が作られた可能性もある。この場合数量的なバランスは巧品が少なく、拙品が多くなることが予想される。また、後者の場合、巧品と拙品は同一時期もしくは多少時間的なずれを生じる可能性があり、数量的にはバランスのとれた状態が高いことが予想された。

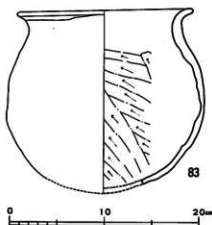
以上の様に考えてみると少なくとも82個の土師器のうち3個は時間的に古く、他の土師器の見本的存在であった可能性が考えられ、土師器の使用期間も大幅な形態的变化も少ないところから短期間であったと思われる。

いずれにしてもこれらの遺物は今後詳細に検討を加えてゆかなければならないと考えているが、今回はその指針を述べてまとめとしたものである。また、これらのことを将来の仕事とすることは調査を担当した者の責任として、その責務を果たしてゆきたいと考えている。（中村）

関連資料（図版55－9、第128図）

83は谷良太郎氏持参の資料で、古閑の上遺跡出土の土師器である。畑耕作中に出土したとのこと、発見者は山鹿市大字古閑1264 徳永定氏である。

口径18.7cmで、最大径は胴部中位に有し、21cmを測る。器高は底部を欠くため実測不能である。器壁は全体に薄く仕上げられ、土師器の中においては、薄手とも言えるものである。口縁部は短く、大きく反り返っていて、肩部に僅かな張りを認めることができる。胴部は球形を呈し、底部は丸底となると思われる。器面調整としては、外面はナデ調整、内面は口縁部近くでヨコナデ、胴部はヘラ削りを施している。外面にはヘラで切った痕跡や、布圧痕も残されている。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。色調は赤褐色を呈し、部分的に黒斑がある。（中村）



第128図 古閑の上遺跡出土遺物実測図

第6章 付 論

第1節 方保田東原遺跡出土鉄器〈穂摘具〉の金属学的調査

大澤 正己

概 要

方保田東原遺跡出土で、3世紀代に属する石庖丁形鉄器及び手鎌（摘鎌）の調査を行って次のことが明らかになった。

- (1) 石庖丁形鉄器は、鉍石系素材を用いた鍛造品の可能性が高い。
- (2) 手鎌は石庖丁形鉄器とは異質素材であるが、こちらも鉍石系の鍛造品である。
- (3) 石庖丁形鉄器及び手鎌の鉄素材は、前者が磁鉄鉍系（Ti、P含有）、後者が褐鉄鉍か菱鉄鉍系（Mn、P含有）の可能性が考えられる。
- (4) 両鉄器の鉄素材は大陸産で、鍛冶加工は国内で実施されたと想定される。

以上の要旨は鉄器現状を損わない黒錆層からの調査結果であり、最終結論を得るには金属鉄部分の調査に委ねばならぬと考える。

1. いきさつ

方保田東原遺跡は、熊本県山鹿市大字方保田字東原に所在する弥生時代終末から古墳時代前期にかけての住居跡を主体とした集落遺跡である。この遺跡からは多くの鉄器（刀子、鎌、農工具）が出土しているが、今回は鉄製穂摘具である石庖丁形鉄器と手鎌2種の鉄器を調査対象とした。

石庖丁形鉄器は、過去に福岡県で2例の出土報告があったが、これらは近代のカラスキ破片として、報告当事者から撤回された^{附1}為、今回調査の石庖丁形鉄器が本邦初例出土となる。この石庖丁形鉄器は、形状が半月形で大陸産にみられる三角形タイプとは異なって、石庖丁模倣の形態を留めている。

一方手鎌は、長方形薄鉄板の両短辺を折り曲げた形態をもち、両者は国内製作品の可能性があり、製作地同定が大きな研究課題になってくる。今回、農耕基盤に欠く事の出来ない鉄製穂摘具と国内鉄生産の問題を内包した2種の鉄器の調査依頼を山鹿市立博物館より要請されたので、鉄器の原形を損わない表面近傍の黒錆層を供試材としてX線マイクロアナライザーにもとづく検討を行った。

2. 調査方法

2-1 供試試料

(1) 石庖丁形鉄器（M-861）

形状は、長さ117mm、最大幅38mm、厚さ0.8mm、刃部は両端がやや反った半月形を呈す。上部には

指にかける紐を通す小さな穴2個が穿っており、北部九州で縄文末期から弥生時代に使用された石廬丁形模倣の鉄器で、鉄器断面は鍛造時の重ね鍛えの痕跡が認められる。この鉄器から採取された1mm前後の黒錆層を供試材とした。(第41図実測図参照)

(2) 手鐲 (M-862)

13号住居出土(13)で手鐲の破片がある。幅2.6cm、厚さ3mm、重さ7.3gで端部を欠いているため現長2.6cmを測る。

端部は約1cm程折り返しており、形状的にも比較的良好な資料である。

供試材は、これも黒錆層を用いている。

2-2 調査方法

石廬丁形鉄器および手鐲の供試材は50mgにも満たない剥片で樹脂埋込みも出来なかったため、黒錆片そのままの形状でX線マイクロアナライザー (Electron Probe Micro Analyzer、以下EPMAと略記) による組成分析を行った。

EPMAの原理は、真空中で試料面に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後にとらえて画像化し、定性的な測定結果を得る分析法である。これが最近ではCMA(Computer aided X-ray Micro Analyzer、以下CMAと略記)という新型総合状態分析装置が開発されている。標準試料とのX線強度の対比から元素定量値を得ることが出来るコンピューター内蔵である。

当調査では、コンピュータープログラムによる高速定性分析結果にもとづく検出元素を特性X線像で提示し、定量分析値を挙げている。なお、このEPMA調査対象試料は、通常鏡面仕上げした断面試料を用いるが、該材は小剥片であり、埋込み不可能であったので表面調査を行った。表面と断面の相違については別途検討を行って、大差なしを確認して本調査を実施した。

3. 調査結果と考察

3-1 石廬丁形鉄器 (M-861)

① コンピュータープログラムによる高速定性分析結果

Table 1に示す。検出元素はマグネシウム (Mg)、アルミ (Al)、珪素 (Si)、燐 (P)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、鉄 (Fe) らである。鉄 (Fe) は素地として存在するので当然Countは強く、3225と検出される。これに非金属介在物 (鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混じり物)系元素、もしくは土壌らの汚染元素として、アルミ (Al) Count 2479、珪素 (Si) Count 4098、カリウム (K) Count 70、カルシウム (Ca) Count 105らに加わる。また、鉄中に固溶した元素としては、チタン (Ti) Count 332、燐 (P) Count 26らである。鉄製原料は、微量チタン (Ti) と燐 (P) の存在から磁鉄鉱の可能性が高い。

② 特性X線像

高速定性分析結果を視覚化したものが特性X線像である。Photo 1に示す。白色輝点の集中する個所が存在元素を表わしている。珪素 (Si)、アルミ (Al)、鉄 (Fe) に白色輝点が強く表われて、他元素は弱くそのイメージ像が各元素の含有量に比例している。なお高速定性分析では炭素 (C) 分析は出来ないが、特性X線像では測定できるので提示した。炭素 (C) 含有量は極く微量と判定さ

れる。この結果から石庖丁形鉄器は、鑄造品は否定されて鍛造品の可能性が強いと指摘できる。

③CMA定量分析結果

Table 3に示す。当然高速度定性分析結果や特性X線像の白色輝点らと相関がとれる。アルミ (Al) 13.278%、珪素 (Si) 15.324%、鉄 (Fe) 13.325%らが大きく、これに炭素 (C) が20.315%が大半として加わる。炭素 (C) のこの数値のみからみると、石庖丁型鉄器の鑄造品の可能性も考えられそうである。しかし、炭素 (C) は有機物汚染の影響を受けやすく、また測定値に変動が激しく、この黒錆部分の炭素 (C) 量20%台が化学分析で何%に相当するのか検討が必要である。

石庖丁形鉄器は、外観的に重ね鍛えの痕跡を呈し、特性X線像の炭素 (C) イメージは弱いことから考えて鑄造鉄器は否定的にならざるをえない。

なお、定量分析値は相対値であり、分析値 Total が100%に満たないのは各元素が酸化物として存在する故、酸素 (O) 量が差し引かれているためである。

3-2 手鎌 (M-862)

① コンピュータープログラムによる高速度定性分析結果

Table 2に示す。手鎌黒錆層表面からの検出元素は、アルミ (Al)、珪素 (Si)、燐 (P)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) らである。前述した石庖丁型鉄器との成分差は、チタン (Ti) が未検出で、新たにマンガン (Mn) が入れ替わっている事である。マンガン (Mn)、燐 (P) らを鉄中に固溶する原料としては、褐鉄鉱が菱鉄鉱あたりである。

② 特性X線像

Photo 2に示す。白色輝点集中度の大きい元素は、鉄 (Fe)、珪素 (Si)、アルミ (Al) であり、次に炭素 (C)、マンガン (Mn) が連なる。マンガン (Mn) は鉄中固溶成分と考えられる。

③ CMA 定量分析結果

Table 3に示す。該品は鉄 (Fe) が43.225%あって、他の汚染物質となるアルミ (Al) 2.051%、珪素 (Si) 3.045%と低目である。鉄中の固溶元素としては、マンガン (Mn) が1.041%である。マンガン (Mn) は磁鉄鉱中に含有するものもあるが (たとえば中国金嶺鎮)、どちらかというとなら菱鉄鉱あたりに可能性が考えられる。また、褐鉄鉱は燐 (P) を高低2種含むものもあり、朝鮮半島の价川、殷栗、戴寧らの褐鉄鉱は酸化マンガン (MnO) が高い。

次に炭素 (C) は、6.978%と石庖丁型鉄器に比べると $\frac{1}{2}$ 以下であるが、特性X線像では、白色輝点の集中度は高かった。この様なデータのバラツキは、この器種のデータ処理での問題点であり、心して判断する必要がある。

4. まとめ

方保田東原遺跡出土で、3世紀代の鉄製穂摘具を調査して次のことが判った。

- (1) 本邦初出土の石庖丁形鉄器は、磁鉄鉱系素材を使った鍛造品の可能性が高い。
- (2) 北部九州に偏在傾向を示す手鎌 (摘鎌) も褐鉄鉱か菱鉄鉱系を想定させる鉱石系素材での鍛造鉄器と考えられる。
- (3) 石庖丁形鉄器は、国内石庖丁の模倣品であり、手鎌は列島内特有形態を示す。2種の鉄器の作

製は、国内における鍛冶加工品と考えられる。

- (4) 列島内では、現在のところ6世紀以前の製錬遺構は未検出である。今回調査の鉄製穂摘具の鉄素材は大陸側に依存した搬入品と想定される。
- (5) 方保田東原遺跡内には、第2次調査（昭和49年）で、3世紀代の鍛冶工房らしき遺構が検出されている。住居跡内に多くの鉄片が出土し、長さ5.8m、幅1m、深さ0.4mの土坑があり、内部に炭化物が混在する。この工房跡出土の鉄片成分と、今回調査の鉄製穂摘具成分のクロスチェックが必要であろう。これによって今回調査の鉄製穂摘具の鍛冶加工工房の同定糸口が掴まれる公算が大きい。
- (6) 今回調査の供試試料は、黒錆層表面の僅小サンプルで、断面検査までなされていない。機会があれば、後日断面からの再調査を試みたいと考える。
- (7) 本稿では紙数の制約があって列島内での鉄製錬及び鍛冶加工の開始の問題は詳述していない。別稿の『下山西遺跡』や、古墳供献鉄滓からみた古代製鉄を対象とした拙稿を参照して頂ければ幸いである。

注

註1 原田大六・森貞次郎「九州出土石廬丁形鉄器の搬回」『考古学研究』第7巻 第4号 1961 P26～34。

註2 E PMA調査におけるサンプルで表面そのままと、断面研磨したサンプルの相違の有無の確認は、沖縄本島中頭郡具志川市所在で弥生時代に比定される宇堅貝塚群出土の板状鉄斧の剥片で行った。両者の検出元素は、Fe、S、Clらで差異のないことが判明している。

註3 安部英夫『要説鉄冶金』丸善 1955 P14

註4 山鹿市教育委員会『方保田東原遺跡』 1982

註5 大澤正己「下山西遺跡出土の弥生時代鉄器と明神山鉱石の金属学的調査」『下山西遺跡』（熊本県埋蔵文化財調査報告書第88集） 熊本県教育委員会 1987

註6 大澤正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会 1983

POS. NO. 5 HOLDER NO. X(NH) Y(NH) Z(NH) COMMENT(8 CHARACTER)
 CO-ENDJ 40.000 40.000 11.000 CC.R. ISAMES
 MS62

READY(PAGE) 7

POS. NO. 5

COMMENT : MS62

ACCEL. VOLT. (KV): 15

PROBE CURRENT : 5.000E-06 (A)

STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

30-JAN-87

CH(1) TAP			CH(2) PET			CH(3) LIF					
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOO)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOO)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOO)
Y -1	6.43	397	22222222222222222222	TI-K	2.75	175	22222222222222222222	P9-1	1.18	46	22222222222222222222
SR-1	6.86	321	22222222222222222222	BA-1	2.78	150	22222222222222222222	PT-1	1.31	54	22222222222222222222
W -	6.98	321	22222222222222222222	CA-K	3.36	150	22222222222222222222	IR-1	1.33	54	22222222222222222222
O SI-K	7.13	3115	22222222222222222222	SR-1	3.44	82	22222222222222222222	ZN-K	1.44	50	22222222222222222222
RB-1	7.32	231	22222222222222222222	SM-1	3.60	42	22222222222222222222	CU-K	1.54	39	22222222222222222222
O AL-K	8.34	941	22222222222222222222	K -	3.74	90	22222222222222222222	NI-K	1.66	34	22222222222222222222
BR-1	8.37	324	22222222222222222222	CD-1	3.75	24	22222222222222222222	CO-K	1.79	32	22222222222222222222
AS-1	9.67	68	22222222222222222222	CL-K	4.73	13	22222222222222222222	FE-K	1.94	2800	22222222222222222222
HG-K	9.89	50	22222222222222222222	S -	5.37	17	22222222222222222222	CR-K	2.10	87	22222222222222222222
GE-1	10.44	42	22222222222222222222	MO-1	5.41	13	22222222222222222222	VR-K	2.29	9	22222222222222222222
BA-1	11.29	42	22222222222222222222	MS-1	5.72	6	22222222222222222222	U -K	2.50	7	22222222222222222222
MA-K	11.91	32	22222222222222222222	ZR-1	6.07	11	22222222222222222222	CE-1	2.56	9	22222222222222222222
F -K	16.32	8	22222222222222222222	P -K	6.16	25	22222222222222222222	LA-1	2.67	9	22222222222222222222

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT

AL SI P K CA MN FE $\leftarrow$ 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

MS LA

手鏡黒銅表面からの検出元素はAl、Si、P、K、Ca、Mn、Feらである。鉄中の非金属成分や土壌中の汚染成分を除いて鉄中に固着した成分としてはP、Mnとなる。これらは増減量もしくは増減率の原料から還元された鉄素材の可能性がある。

表 5 手鏡黒銅表面のコンピュータプログラムによる高感定性分析結果

表7 鉄器黒銅片のCMA定量分析結果（絶対値ではない）

符 号	遺 跡 名	試 料	化 学 成 分 (%) <相对比较値>											
			Mg	Al	Si	P	S	Cl	Ca	Ti	Mn	Fe	C	TOTAL
M-861	方原田東原	石廬丁形鉄器	0.553	13.278	15.324	0.618	0.118	0.084	0.372	0.280	0.314	13.325	20.315	64.582
M-862	"	手 鏝	0.103	2.051	3.043	0.276	0.076	0.013	0.083	0.057	1.041	43.225	6.978	56.951
OKU 1	宇堅貝塚群	板 状 鉄 斧	0.000	0.029	4.053	0.063	0.445	4.039	0.022	0.000	0.000	48.861	3.961	61.474

注) 沖縄県宇堅貝塚群出土板状鉄斧を参考値として挙げた。該品は不純物の少ない清浄な鉄である。

C1の純出は海水汚染の影響と考えられる。



供試材の外観写真

M-861：石廬丁形鉄器 M-862：手鏝

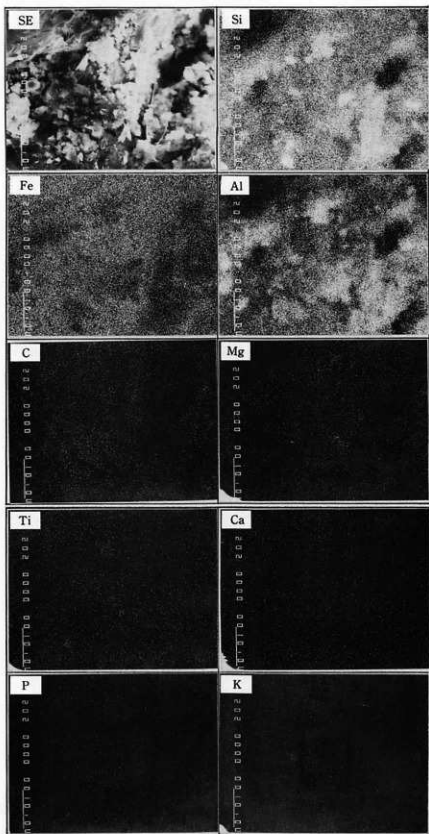


Photo. I 方保田東原遺跡出土、石胞丁形鉄器 (M-861) の特性X線像 (×1400)

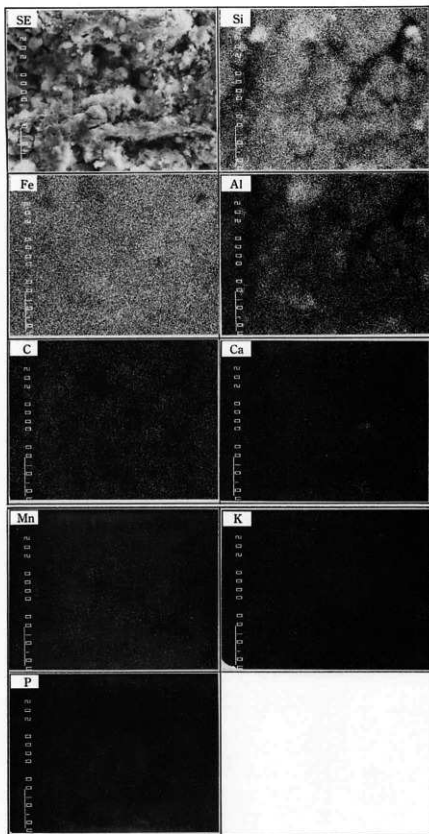


Photo. 2 方保田東原遺跡出土、手鎌 (M-862) の特性X線像 (×1400)

ま と め

方保田東原遺跡第Ⅶ次調査において検出した遺構は住居跡18軒、溝状遺構1本、小形竪穴2基、土坑2基を数える。調査面積が299㎡であるのに対し、これだけの遺構が密集するように存在していたということで、今さらながら遺跡の規模の大きさと密度の高さに改めて感心するばかりであった。

とくに今回調査した地点は大道小学校校庭遺跡と方保田東原遺跡の中間に位置するところから、遺跡の接点とも言えるもので、この結果から二つの遺跡の間には空白地帯が無く、本来同一集落が広がりをもっていたものと理解することができた。

また、溝状遺構において、これまで弥生時代終末から古墳時代にかけての土器の変遷が、形式的には考えられていた在地系脚台付甕と同系丸底甕との関係を、層的に捉えることが出来たことは大いなる成果と言えよう。

さらに国内で初めての出土である石庵丁形鉄器が出たのも、穂摘具の変遷を考えるうえにおいて重要な位置を占めることは言うまでもなく、遺跡そのものの重要性まで裏付けた資料と言えよう。

また、方保田東原遺跡の周辺にはほぼ同時期の遺跡が数多く存在しており、これらの遺跡群から出土した遺物も併せて考えることによって、相互の関連性と重要性が理解できるものと思われた。従って小規模ながらかつて調査を行った古閑白石遺跡、石原遺跡、藤井前田遺跡についての報告も行った訳である。

とくに、古閑白石遺跡は溝状遺構内より大量の土器が出土しており、弥生時代終末期における在地系の長胴脚付甕を主体としていた。甕は器面の特徴から2種に分類され、器面にハケ目を施したものと、ハケ目とタタキ目を施しているものが見られた。これらの成果と今回調査した溝状遺構において得られた成果を考えた場合、甕の形態変化をかなりしっかりと捉えることができた。

さらに石原遺跡において外来系甕（庄内・布留）を主体とした遺物で、所謂古式土師器が出土している。また藤井前田遺跡においてはそれに続く土師器が一括して82個も出土しており、弥生式土器から土師器への変遷を解明するには絶好の資料であると言えよう。

今回の調査ではこの他にも多くの成果をあげることができたが、とくに石庵丁形鉄器の出土によって、方保田東原遺跡が国の重要文化財として指定された要因となった事を忘れてはならない。

山鹿市教育委員会と市立博物館では昭和56年度に、国庫補助事業として方保田東原遺跡の重要確認調査を実施している。これは国指定史跡として指定に値するか否かの調査であり、この時にも数多くの成果が得られた。以来国指定を受けるべく準備を進めていたが、この資料の出土によって決定的なものとなり昭和60年2月19日付文部省告示第21号をもって指定されたのである。

指定面積は26,697.96㎡でこの範囲は第2図に示すとおりであるが、遺跡自体はさらに大きいことは言うまでもないが、単に一つの遺跡のみを重要視するのではなく、今後は方保田東原遺跡を中心として広がる多くの遺跡や古墳を含めたところの、地域としての重要性を高める必要があろう。

圖 版

道跡より馬見塚古墳群および不動岩を望む





2 調査区域全景（北より）



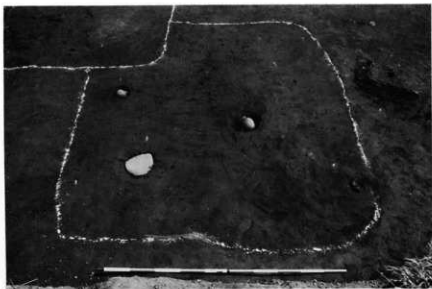
1 調査区域全景（南より）



1 1号住居跡



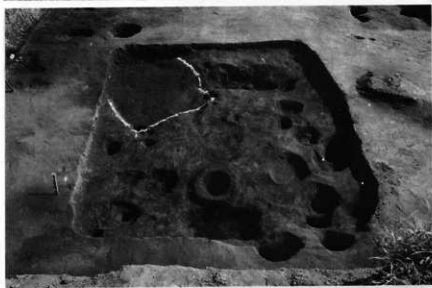
2 完掘状態



1 2号住居跡



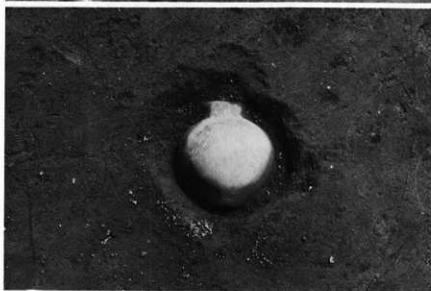
2 遺物出土状況



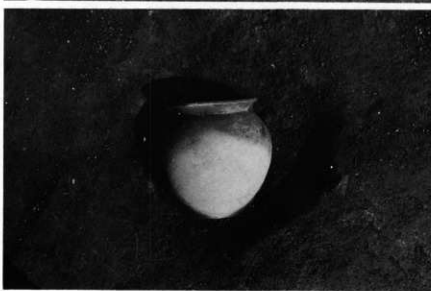
3 完掘状態



1 2号住居跡
遺物出土状況



2 壺出土状況



3 甕出土状況



1 3号住居跡



2 遺物出土状況
(西より)



3 遺物出土状況
(北より)



1 4号住居跡



2 遺物出土状況
(北より)



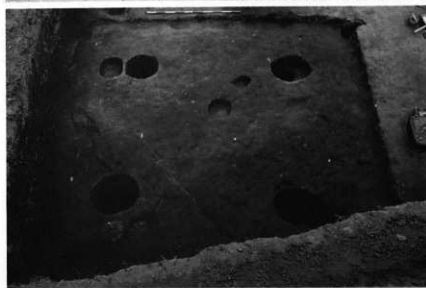
3 遺物出土状況
(西より)



1 5号住居跡



2 遺物出土状況



3 完掘状態



1 6号住居跡



2 2号住居跡



3 3号住居跡



1 7～10号住居跡



2 完掘状態



3 完掘状態
(南より)



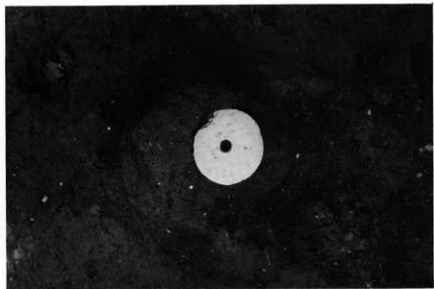
1 10号住居跡



2 土製品出土状況



3 土製品出土状況



1 紡錘車出土狀況



2 勾玉出土狀況



3 16号住居跡



溝状遺構全景



1 埋土断面



2 完掘状态



1 床面状况



2 埋土中遺物出土状况



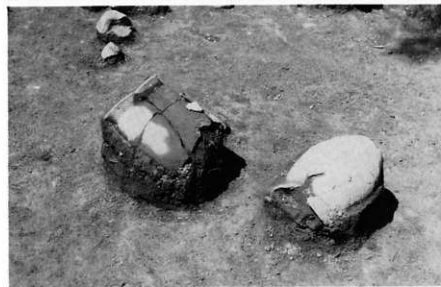
3 遺物出土状况



1 遺物出土状況
(南より)



2 遺物出土状況
(西より)



3 遺物出土状況



1 甕出土状況



2 勾玉出土状況



3 ミニチュア土器
出土状況



1
溝上土師器



2 遺物出土状況



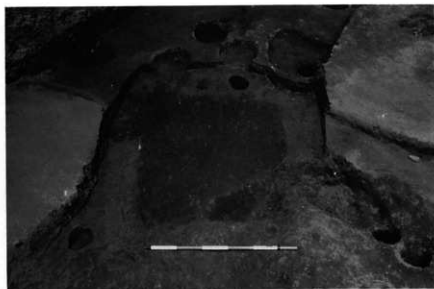
1 溝東端部遺構
(北より)



2 溝との切合い状況



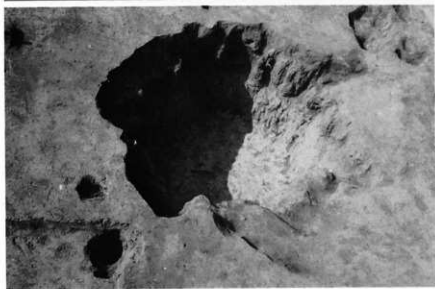
3 遺物出土状況



1 1号竖穴



2 完掘状况



3 2号竖穴



1 土器捨て場



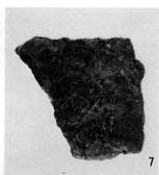
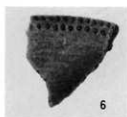
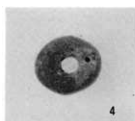
2 発掘風景
(北より)



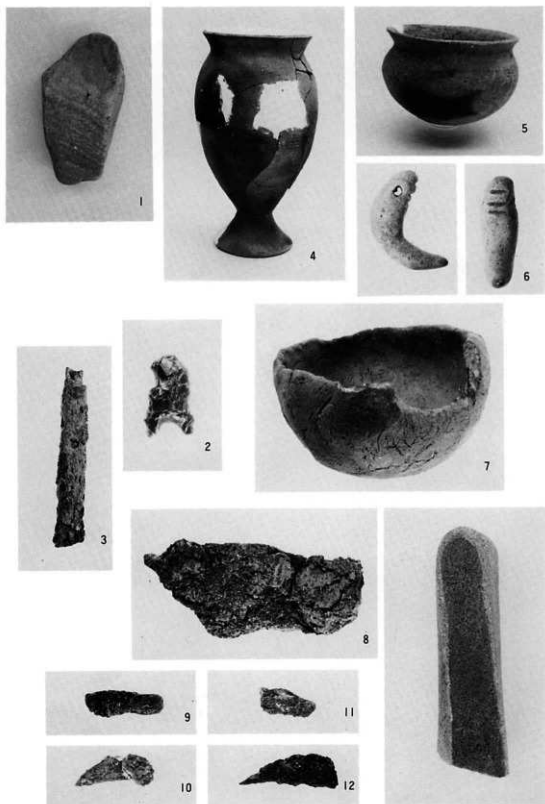
3 発掘風景
(南より)



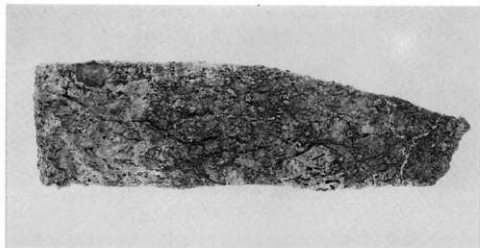
2号(1~4)・3号(5~11) 住居跡出土遺物



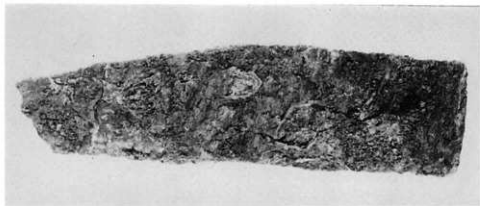
3号 (1~4, 10)・4号 (5~9, 11~12) 住居跡出土遺物



5号(1~3)・6号(4~13)住居跡出土遺物



1 6号住居跡
出土土器



2
繊維付着状況



3
付着した繊維



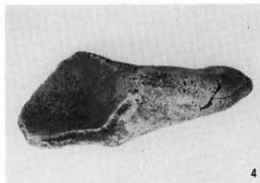
1



2



3



4



5



7

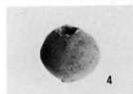


8

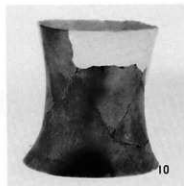
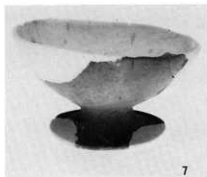
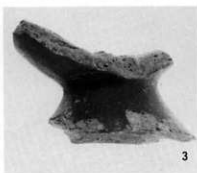
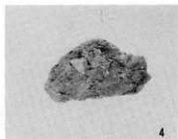


6

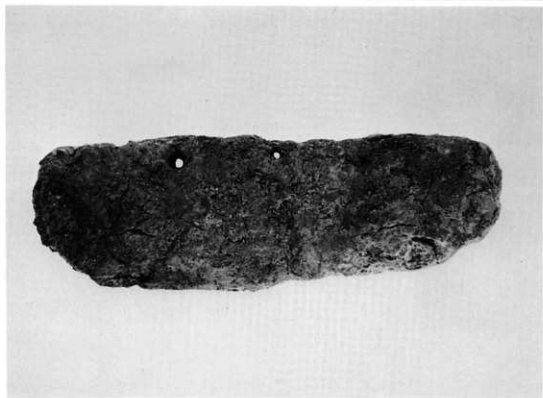
7号(1)・8号(2~8)住居跡出土遺物



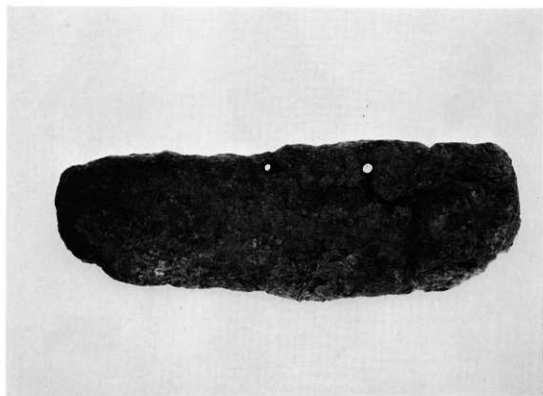
9号(1~4)・11号(5~13) 住居跡出土遺物



11号 (1~7)・12号 (8~12) 住居跡出土遺物

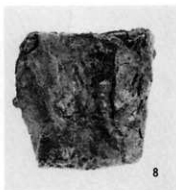
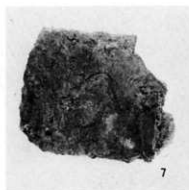
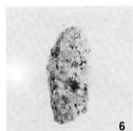
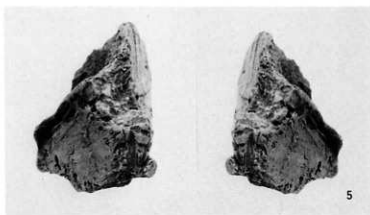
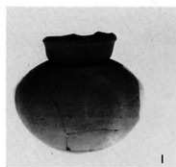


1



2

12号住居跡出土石庖丁形鉄器（実大）



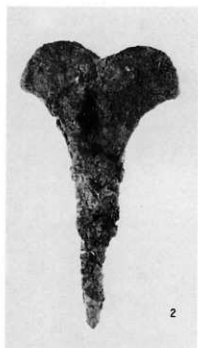
13号住居跡出土遺物



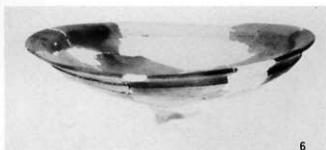
1



5



2



6



9



7



3



4



8

15号 (1, 2)・18号 (3, 4)・19号 (5 ~ 9) 住居跡出土遺物



溝状遺構出土遺物（1～3期）

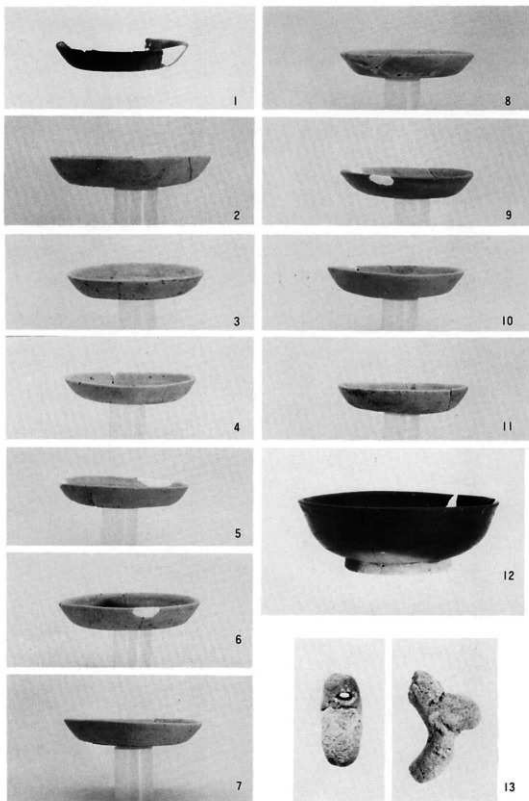


溝状遺構出土遺物（3期）

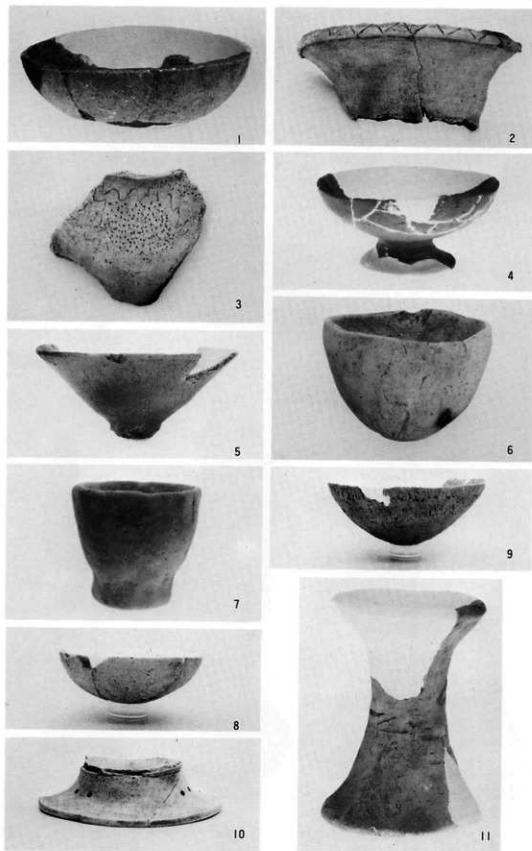




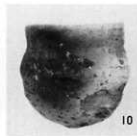
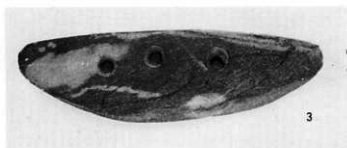
溝状遺構出土鉄器



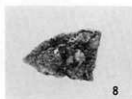
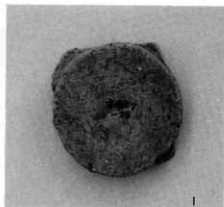
溝上土師器・溝東端部出土遺物



その他の遺物（1～7）・遺構に伴わない遺物（8～11）



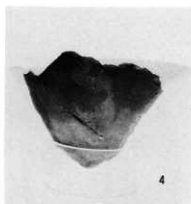
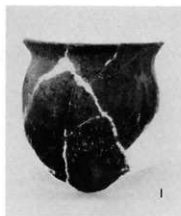
遺構に伴わない遺物



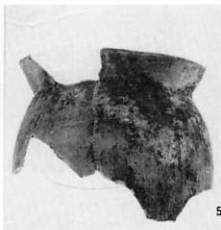
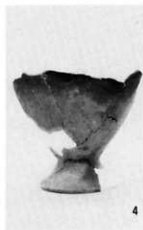
遺構に伴わない遺物



白石遺跡出土遺物 (甕)



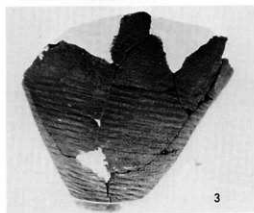
白石遺跡出土遺物 (壺)



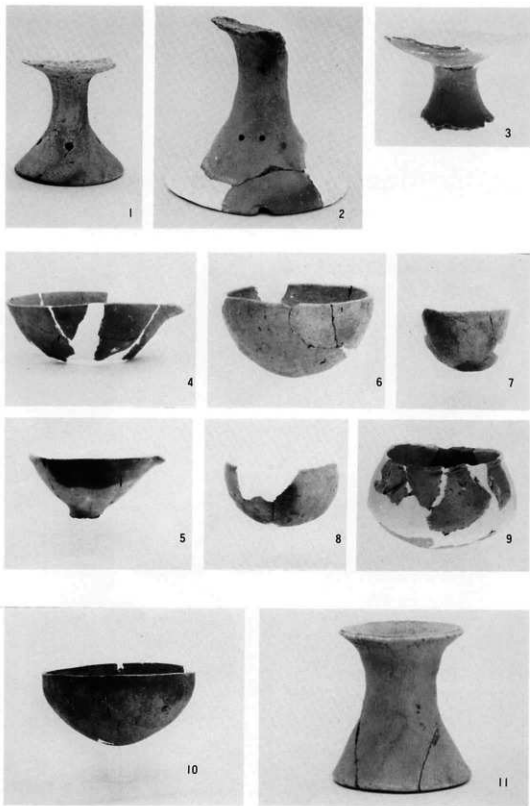
白石遺跡出土遺物（甕・鉢）



白石遺跡出土遺物 (壺)



白石遺跡出土遺物（壺・高坏）



白石遺跡出土遺物（高环・鉢・器台）



1



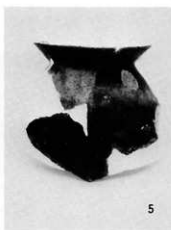
2



3



4



5



6



7



8

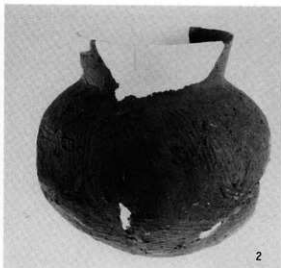


9

白石遺跡 (1~3)・石原遺跡 (4~8)・藤井前田遺跡(9)出土遺物



1



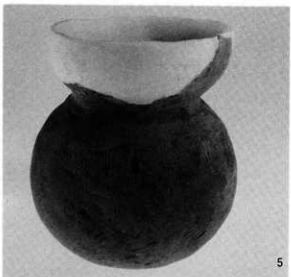
2



3



4

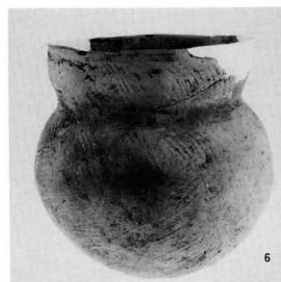
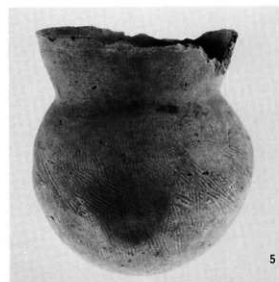
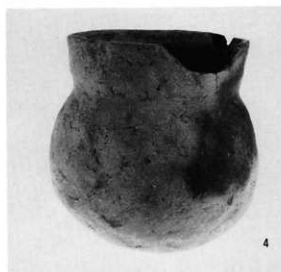


5

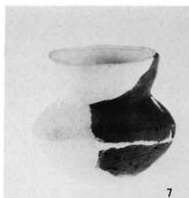
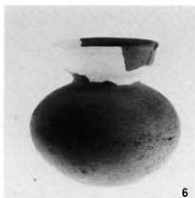
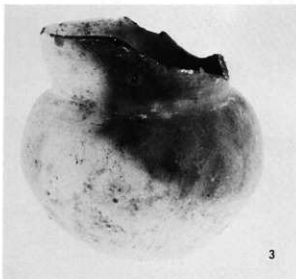


6

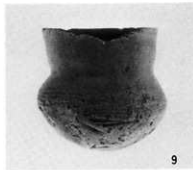
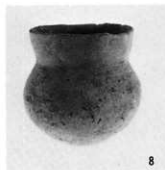
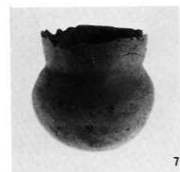
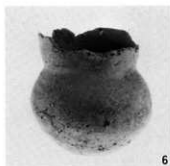
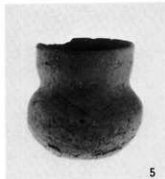
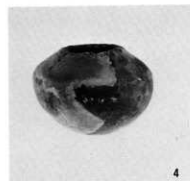
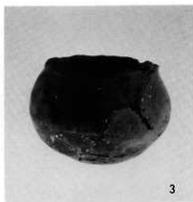
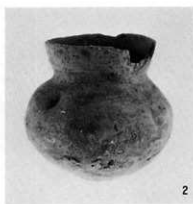
藤井前田遺跡出土遺物（壺）



藤井前田遺跡出土遺物（壺）



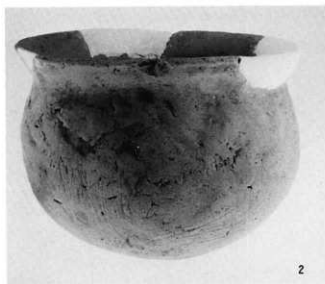
藤井前田遺跡出土遺物 (壺)



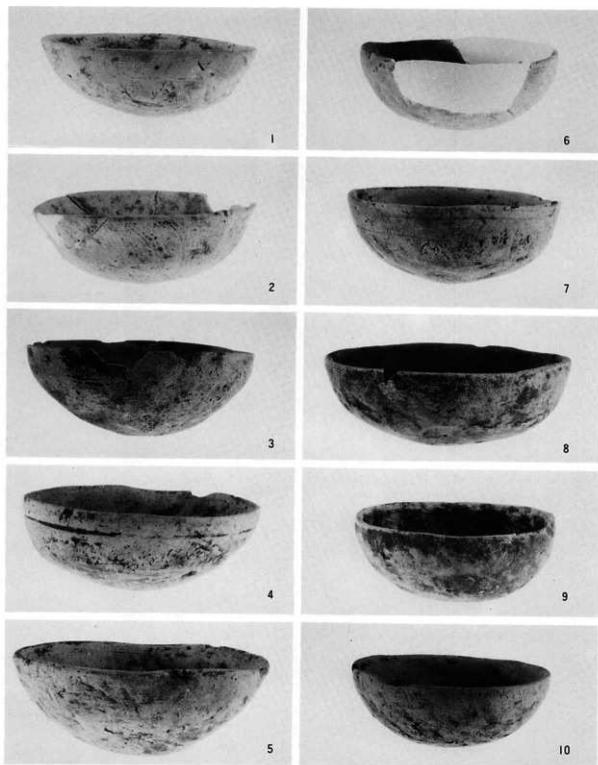
藤井前田遺跡出土遺物（壺・甕）



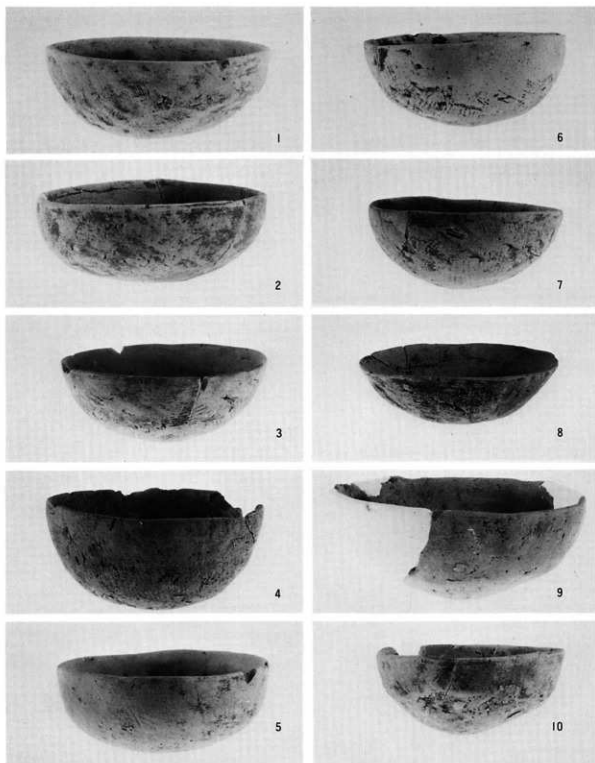
藤井前田遺跡出土遺物 (甌・高坏)



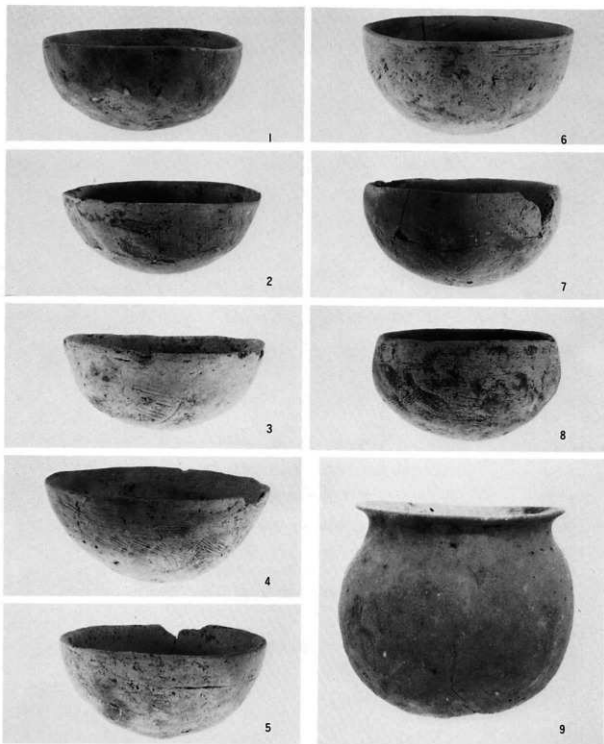
藤井前田遺跡出土遺物（鉢）



藤井前田遺跡出土遺物（鉢）



藤井前田遺跡出土遺物 (鉢)



藤井前田遺跡（1～8）・古閑の上遺跡(9)出土遺物

山鹿市立博物館調査報告書第7集

方保田東原遺跡(3)

昭和62年3月31日

編集 山鹿市立博物館
〒861-05熊本県山鹿市大字鍋田2085

発行 山鹿市教育委員会
〒861-05熊本県山鹿市彌明町1026-2

印刷 鍋下田印刷
熊本支店 熊本市南熊本3丁目1-3

正誤表

『方保田東原遺跡(3)』 山鹿市文化財調査報告書 第7集 熊本県山鹿市教育委員会1987年

文中

頁	行	図番	誤	正
96		第90図	(図番号を記載漏れ)	124
98	11		35は棒状をした	36は棒状をした

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市立博物館調査報告第7集 方保田東原遺跡(3)』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成 17 年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市立博物館調査報告第7集 方保田東原遺跡(3)

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年6月 19 日